

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

- 平成19年度 -

2008. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成19年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、西ノ辻遺跡、法通寺跡、五里山古墳群、山畠古墳群、縄手遺跡、皿池遺跡、善根寺遺跡、出雲井遺跡群の調査概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成20年3月

東大阪市教育委員会

目 次

はしがき

目次・例言

第1章 平成19年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 西ノ辻遺跡第48次発掘調査	6
第3章 法通寺跡第5・6次発掘調査	13
第4章 五里山古墳群第2・3・4次発掘調査	35
第5章 山畠古墳群第30次発掘調査	61
第6章 繩手遺跡第20次調査	67
第7章 皿池遺跡第9次調査	74
第8章 善根寺遺跡第3次発掘調査	85
付 出雲井遺跡群第5次発掘調査	130

例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%（総額10,000,000円）で実施した、個人住宅建設に伴う発掘調査、及び保存目的で行なう確認調査の概要報告書である。
- 本発掘調査は、調査原因に係る個人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 本書には、過年度に実施した国庫補助対象の発掘調査及び開発工事に伴う確認調査の内容を含んでいる。
- 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（2000年版）に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 本書の執筆は次のとおりである。
第1章・第2章・第6章1) 2) 4)・第7章1) 2) 4)・第8章6) は菅原、第3章1) 2) 3)a 4)a 5)・第4章1) 2)a 3)a 4)a 5)・第5章1) 2) 4) は若松、第3章3)b 4)b・第6章3) 第7章3) は村上、第4章2)b 3)b 4)b・第5章3) は松田、第8章1) 2) 3) 4) は成瀬、第8章5) は才原、付は原田。編集は菅原が行った。
- 平成19年11月16日に文化審議会から河内寺廃寺跡は国史跡の答申をうけた。このため第7章については国史跡指定地を含む伽藍内部を河内寺廃寺跡、周知の遺跡名称を河内寺跡として記述を行なっている。
- 考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』（2002年）の表記に従った。
- 調査では、遺構名称に略号を使用したものがある。略号は以下のとおりである。

S P	ピット・柱穴	S D	溝・濠・溝状遺構
S K	土坑	S E	井戸
S X	その他の遺構	S B	掘立柱建物跡

- 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げる次第である。

第1章 平成19年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成19年度の文化財保護法第93条・94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出（通知）件数は、平成20年2月29日現在で届出531件、通知52件で合計583件である。届出（通知）にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる。

個人住宅	102件	分譲住宅	199件	共同住宅	16件	兼用住宅	3件	その他住宅	6件
工場	1件	店舗	5件	その他建物	29件	道路	3件	学校	1件
ガス	73件	上水道	21件	公園造成	3件	下水道	96件	河川	4件
土地区画整理	1件	宅地造成	14件	その他の開発	6件	（※0件の調査原因是省略）			

583件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査94件、工事立会171件、慎重工事318件であった。

平成17年度では届出(通知)が596件、18年度は585件であったことと比較すると、若干の差はあるが、ほぼ3年間、横並び状態である。工事別では個人住宅が前年比17件増の反面、共同住宅は9件の減少となっている。共同住戸件数は母数が小さいため、年々の増減の数字が顕著に現われるが、経済回復のスピードにやや歯止めがかかった状況といえるかもしれない。

東大阪市教育委員会では、個人専用住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設等に伴う確認調査と発掘調査について平成19年度国庫補助事業として実施した。昨年度の報告書の補遺とともに次ページ以下に掲げた。その内容は個人専用住宅建設に伴う確認調査が26件、兼用住宅に伴う確認調査が1件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が1件、個人住宅建設に伴う発掘調査が1件、個人による区画整理事業に伴う発掘調査が1件、保存目的で行なう遺跡の範囲確認調査が2件、未確認地の試掘調査が2件で合計34件であった（平成20年2月29日現在）。

平成19年度の国庫補助事業では、例年と同じく、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が優位を占める。これらは基礎工事に地盤改良や柱状改良、杭打設を伴うもので、国庫補助事業として悉皆的に確認調査を行ない、遺跡保護行政のための必要なデータを得ている。例年との相違点は、遺跡の範囲確認調査や未確認地の試掘調査を平成19年度で併せて4件実施したことである。これらは工事主体者ないし地権者からの依頼に基づいて行なった。今後も開発工事に伴って調査を実施するだけでなく、範囲確認や未確認地の試掘などの調査を積極的に行ない、遺跡を保護するための方策に資するよう努めなければならない。

次に、平成19年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。

No23とNo25はともに良好な遺物包含層ないし遺構を検出したが、基礎形状の設計を大阪府の基準に合致する形で変更されたことにより、立会調査を経て工事実施となったものである。No23は若江遺跡で、現地表-0.4mで溝状の遺構、-0.5mで鎌倉時代の遺物包含層を検出した。上層の溝状遺構には室町時代（15～16世紀）の土師器皿を多量に含んでいた。No26は縄手遺跡で現地表-0.2mから0.55mまで2層の古墳時代の遺物包含層、-0.55mから-1.1mまで2層の弥生時代の遺物包含層を検出した。弥生時代の遺物包含層のうち上層の上面には溝が認められた。

No14は未確認地の試掘調査である。調査地は大蔵古墳の隣接地にあたることから、古墳ないし集落遺跡の存否を目的として実施した。その結果、旧の谷筋に相当する南への傾斜面を検出した。傾斜面の堆積層には鎌倉時代から室町時代の遺物（瓦器椀・瓦質土器羽釜・土師器羽釜など）が多数含まれていたが、原位置はとどめておらず、古墳を構成する石も検出されなかった。このため埋蔵文化財包蔵地とは認定できなかった。No29も未確認地の試掘調査で、平安時代のピット・土坑・溝などが検出され、該期の遺物も多数出土した。このため瓜生堂遺跡の範囲を拡大した。詳細は次年度報告したい。

平成18年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況（補遺）

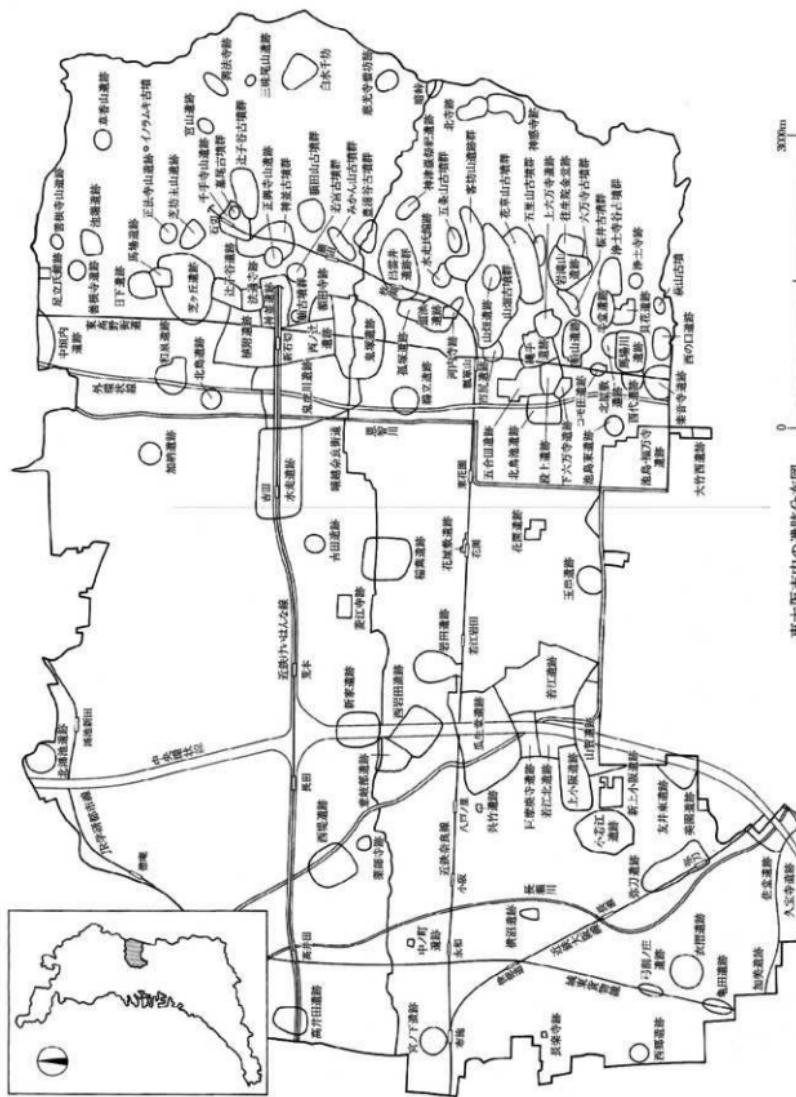
調査事業名及び用途		実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1	鬼虎川遺跡確認調査 (個人専用住宅)	弥生町1475-5~7番地	菅原	平成18年9月19日	10m ²	GL-0.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
2	河内寺跡第15次発掘調査（保存目的）	河内町435,436,441,445番地	菅原	平成19年3月1日 ～3月28日	約 161m ²	『河内寺廃寺跡発掘調査報告書』で報告 (平成19年7月刊)
3	善根寺遺跡第3次発掘調査 (個人専用住宅)	善根寺町1丁目644,645番地	菅原 成瀬	平成19年3月5日 ～3月22日	68.65 m ²	本書第8章。
4	横沼遺跡確認調査 (個人専用住宅)	横沼町3丁目39-13,-14番地	若松	平成19年3月16日	2.25m ²	GL-3.2mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
5	五里山古墳群第3次 発掘調査（個人区画 整理事業）	上四条町1170-1番地ほか1 筆、上六万寺町1744-2番 地ほか30筆 計33筆	若松	平成19年3月19日 ～3月27日	約 87m ²	本書第4章。
6	水走遺跡確認調査 (個人賃貸共同住宅)	水走2丁目16-8番地	若松	平成19年3月28日	2.25m ²	GL-2.5mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。

平成19年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

調査事業名及び用途		実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1	神並遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西石切町1丁目24-3番地	菅原	平成19年4月6日	2.0m ²	GL-0.85mまで調査。二次堆積層検出。 工事実施。
2	意岐部遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西岩田3丁目350-1の一部 番地	菅原	平成19年5月10日	2.25m ²	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財検出 せず。工事実施。
3	張刀遺跡確認調査 (個人専用住宅)	源氏ヶ丘92-2番地	菅原	平成19年5月18日	1.44m ²	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出 せず。工事実施。
4	神並遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東石切町1丁目803-4の一 部番地	菅原	平成19年5月24日	0.70m ²	GL-1.1mまで確認。埋蔵文化財検出 せず。工事実施。
5	瓜生堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	瓜生堂2丁目57-49番地	若松	平成19年5月28日	1.44m ²	GL-1.0mまで確認。埋蔵文化財検出 せず。
6	段上遺跡確認調査 (個人専用住宅)	下六万寺3丁目1131-2番地	若松	平成19年6月12日	1.50m ²	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財検出 せず。工事実施。
7	小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江3丁目218-49番地	菅原	平成19年6月13日	1.50m ²	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出 せず。工事実施。

調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
8 西ノ辻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南莊町1773-8.-9番地	菅原	平成19年6月18日	1.00m ²	GL-0.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
9 水走遺跡確認調査 (個人専用住宅)	水走2丁目1150-1の一部番地	若松	平成19年6月21日	1.50m ²	GL-2.15mまで確認。近代以降の層と自然堆積層内から遺物検出。工事実施。
10 池島・福万寺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	玉串町東2丁目27-13番地	菅原	平成19年7月5日	2.30m ²	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。T.T実施。
11 山賀遺跡確認調査 (個人専用住宅)	新上小阪23-17番地	菅原	平成19年7月17日	0.96m ²	GL-1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
12 法通寺跡第6次発掘調査 (個人専用住宅)	中石切町1丁目671-4.-5番地	若松	平成19年7月17日～7月23日	55.00m ²	本書第3章。
13 上小阪遺跡確認調査 (個人住宅)	若江西新町4丁目4-12.-15番地	菅原	平成19年7月18日	2.25m ²	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
14 未確認地確認調査 (個人専用住宅)	東石切町5丁目551-8番地	菅原	平成19年7月30日～7月31日	19.45m ²	鍾乳～室町時代の遺物（瓦器・瓦質土器羽釜・土器器羽釜など）が出土したが、傾斜面に堆積したものと考えられる。巨石はすべて転石であり古墳とは考えられない。
15 五里山古墳群第4次発掘調査 (個人区画整理事業)	上四条町1170-1.-2はか2筆 上六万寺町1744-2はか31筆 墓道、水路番地	若松	平成19年7月31日～8月3日	約78m ²	本書第4章。
16 宮ノ下遺跡確認調査 (貸貸共同住宅)	長塙1丁目57の一部番地	菅原	平成19年8月6日	1.44m ²	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
17 佐童遺跡確認調査 (個人専用住宅)	金岡4丁目1-24番地	若松	平成19年8月7日	1.44m ²	GL-1.9mまで確認。埋蔵文化財検出せず。T.T実施。
18 山畑遺跡確認調査 (範囲確認)	上四条町1709番地	若松	平成19年8月21日～8月24日	4.76m ²	第1層から古墳時代の遺物が出土したが、焼地造成時の二次堆積層である。石の集積は古墳に該当しない。
19 若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町2丁目65-10.67-3番地	若松	平成19年9月11日	2.25m ²	GL-1.4mまで確認。近代以降の整地層より遺物出土。工事実施。
20 皿池遺跡確認調査 (個人専用住宅)	本町462-5番地	菅原	平成19年9月14日	1.80m ²	GL-1.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
21 衣摺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	衣摺3丁目1073-1.-2の各一部、1073-3番地	菅原	平成19年9月20日	2.25m ²	GL-1.3mまで確認。流れ込み砂層上面に鎌倉時代の遺物含む。工事実施。
22 足立氏館跡確認調査 (範囲確認)	普天寺町6丁目5甲番地他23筆 番地	若松	平成19年9月26日～9月28日	19.00m ²	現存の母屋に近接した箇所から、足立氏館跡に開通すると思われる石垣を検出。整地層内より少量の土器出土。

調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
23 若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町4丁目540-26番地	菅原	平成19年10月1日	1.44m ²	GL-1.0mまで確認。GL-0.4mで室町～戦国時代の遺物包含層を検出。立会調査を経て工事実施。
24 出雲井遺跡確認調査 (兼用住宅)	東島浦町885の一部番地	菅原	平成19年10月2日	2.25m ²	GL-1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
25 山焼古墳群確認調査 (個人専用住宅)	瓢箪山町91-13,14,284番地	菅原	平成19年10月2日	2.25m ²	GL-0.8mまで確認。検出土層に遺物含まず。
26 純手遺跡確認調査 (個人専用住宅)	末広町800-1,803の一部番地	若松	平成19年10月4日	1.44m ²	GL-1.25mまで確認。GL-0.3m以下で古墳時代・弥生時代の遺物包含層、遺構検出。立会調査を経て工事実施。
27 芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町2198-23番地	菅原	平成19年10月16日	2.25m ²	GL-0.9mまで確認。検出土層に遺物含まず。
28 鬼塚遺跡確認調査 (個人専用住宅)	宝町1853-6番地	菅原	平成19年10月26日	1.44m ²	GL-1.3mまで確認。検出土層に遺物含まず。
29 未確認地確認調査 (企家共同住宅)	下小阪5丁目41-2番地	菅原	平成19年10月31日 ～11月15日	158m ²	平安時代のピット・井戸・土坑・溝などを検出。調査地は遺跡と認められる。詳細は次年度報告予定。
30 西ノ辻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東山町1265-4-5番地	菅原	平成19年11月30日	3.0m ²	GL-1.1mまで確認。弥生土器を含む層を検出。立会調査を経て工事実施。
31 芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中石切町4丁目2323-9番地	菅原	平成19年12月17日	1.44m ²	GL-1.15mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
32 小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江3丁目218-47番地	菅原	平成19年12月20日	1.44m ²	GL-1.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
33 西ノ辻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南莊町1780-7,1781-14番地	菅原	平成20年1月25日	12m ²	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
34 吉田遺跡確認調査 (個人専用住宅)	吉田下島22-24番地	菅原	平成20年2月13日	2.25m ²	GL-2.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。



東大坂市内の遺跡分布図

第2章 西ノ辻遺跡第48次発掘調査

1) はじめに

西ノ辻遺跡は、東大阪市東山町・弥生町・宝町・南莊町・西石切町1丁目・同3丁目にわたる绳文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。南北約600m、東西約400mの範囲に広がっている。本遺跡は生駒山地西麓部に発達した、標高7~20mの沖積扇状地の扇央部から扇端部にかけて立地する。遺跡は昭和16年に発見され、その後16~17年の京都大学の調査により、弥生時代後期の標式遺跡として全国的に著名となった。今まで48次に及ぶ発掘調査が実施されている。なお、今回の調査地は西ノ辻遺跡の最南端に位置し、東西道路を挟んで南側は鬼塚遺跡に属する。旧の小字地名では「唐辻」にあたる。既往の調査は遺跡の北部域が中心で、中部から南部にかけては遺跡の様相に不明な点が多いことを以前指摘した（東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成13年度－』、2002年。）。現在の町名でいえば、発掘調査は西石切町1丁目・東山町・弥生町がほとんどであり宝町・南莊町での発掘調査は、それぞれ第31次、第41次調査のみになる。今回の調査成果と周辺の調査状況との対比は、まとめの項で行ないたい。

平成18年12月、南莊町1768-24,1768-25番地において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建物基礎はベタ基礎で設計され埋蔵文化財への影響は小さいと考えられたことから、立会調査が必要な旨届出者宛て通知した。同年12月7日に立会調査を実施することになったが、調査は工事着手の事前に設定され、確認（試掘）調査のように行なった。調査の結果、遺物包含層は



第1図 調査地位置図

削平されていたが、時期不明のピットを1個検出した。ピット検出の層準は現地表から0.35mであり、基礎工事で遺構面が破壊されるおそれが出てきた。このため取扱いについて協議を行ない、基礎工事の事前に、ピットなどの遺構の有無・時期、広がりを目的とした調査を実施することで双方合意した。なお、地表面から遺構面までの機械掘削は届出者側で用意、負担いただいた。調査は平成18年12月13日から12月18日まで実施した。調査面積は、106m²である。

2) 層位

調査は立会調査の結果に従い、表土、耕作土および遺構面上面まで重機で掘削した。

検出した層位は次のとおりである（表土層は除く）。

第1層 明赤褐色（5YR5/6）細粒砂。床土層。

第2層 灰色（10Y4/1）細繊混じりシルト。

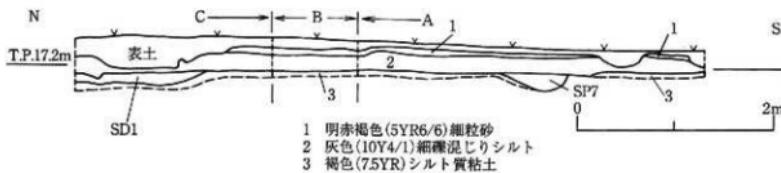
第3層 褐色（7.5YR4/4）シルト質粘土。地山層。南側では同色の細繊層。上面は遺構面を形成する。

調査地の層位から、以前申請地にあった建物の基礎工事により、最近の旧耕土層は滅失していることがわかる。このため床土層が表土下に露出する。第2層も土層の色調や質から、ある時期の旧耕土層に相当するものとみられる。遺物を含まないため所属時期は不明であるが、周辺の調査状況から第2層は近現代を測るものではないと思われる。

これらの所見から、第2層の下面と、第3層の上面の間には堆積時期の大きな隔たりがある。後記するように第3層上面の遺構には古墳時代に属するものがみられることから、少なくとも近現代の土地変更のために該期以降の遺物包含層は滅失している。さらに遺構の検出面である第3層の上面もかなり削平を受けたと考えるのが妥当と考えられる。むしろ、以前あった建物の基礎深度が浅かったため、該期の遺構が比較的良好に遺存したとも考えられる。



第2図 調査箇所位置図



第3図 調査地東側断面図（図中A～Cは第5図に対応）

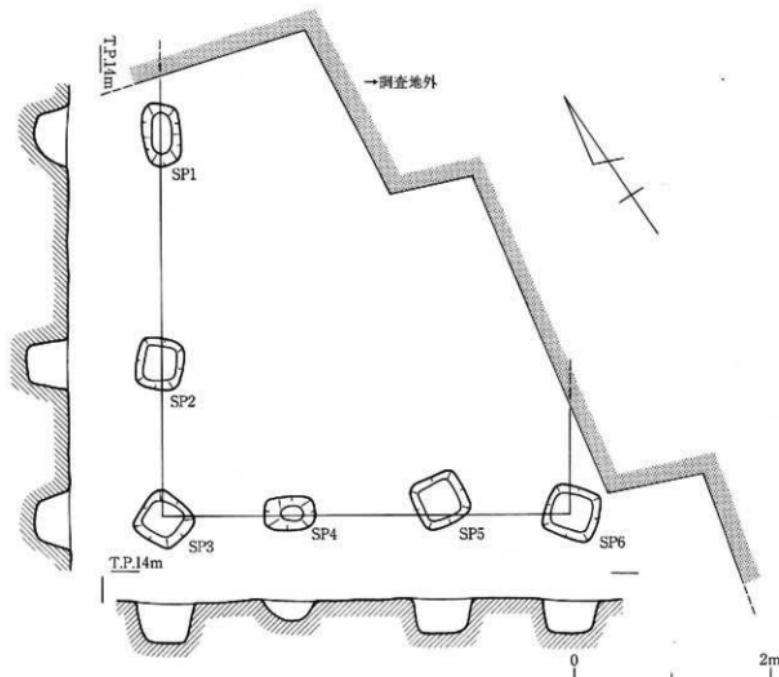
3) 遺構と遺物

遺構は第3層上面で、土坑1基、ピット9個、溝2条を検出した。ピット9個のうち、6個は掘立柱建物を構成する。ピットの規模・埋土は別表にまとめた。第3層上面のレベルは、北端でT.P.13.69m、南端でT.P.13.67mを測り、ほぼ平坦である。なお、調査地の西端には、耕作のため棚田状に造成された近現代の段がみられた。

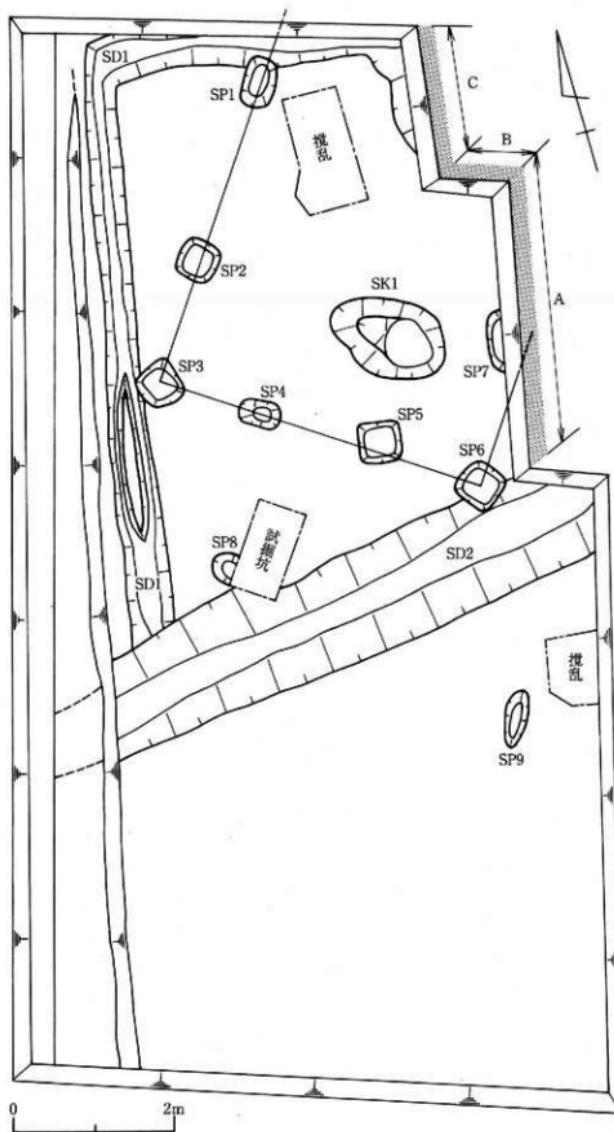
第1表 西ノ辻遺跡第48次調査ピット一覧表

ピット名	平面形態	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	埋土
S P 1	隅丸方形	52	40	37	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 2	方形	44	44	44	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 3	方形	52	50	37	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 4	椭円形	43	29	13	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 5	方形	54	50	33	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 6	方形	54	51	36	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 7	隅丸方形	79	(20)	37	褐色 (10YR4/1) 細緻混じりシルト
S P 8	円形	40	(28)	17	黒褐色 (10YR3/1) 細緻混じり粘土
S P 9	椭円形	67	28	14	黒褐色 (10YR3/1) 細緻混じり粘土

(注) () は現存長を示す。



第4図 掘立柱建物1実測図



第5図 検出構平面図

掘立柱建物1 S P 1～6で構成される建物。2間以上×3間の建物で調査区の北側で検出した。東西の柱間は等間で1.4m、南北の柱間は、S P 1～S P 2間が2.4m、S P 2～S P 3間が1.6mである。床面積は18.9m²以上。建物の南北軸は磁北から東に34°振る。S P 4を除いて柱掘形は方形ないし隅丸方形を呈する。柱掘形の規模も同様で一辺50cm内外、深さは40cm前後を測る。遺構面は前記のように削平を受けたことが予想されるため、建物を構成するピットはさらに下部に続くものと思われる。S P 4のみ楕円形を呈し、深さも13cmと浅い。これはS P 4と北側で対応する未検出のピットと組合って、S P 4の柱材の規模に関連する可能性が考えられる。埋土は全て共通し、褐灰色(10YR4/1)細繰混じりシルトである。建物は調査地の北東側に延びる。掘立柱建物1を構成するピットがS D 1およびS D 2と切り合うことから、掘立柱建物1は溝の埋没後に建てられている。ピットから土師器、須恵器の各細片が出土した。

その他のピット 掘立柱建物1の外側にあるS P 8・S P 9は埋土が黒褐色細繰混じり粘土で、建物1を構成するピットとは明らかに異なる。

土坑 掘立柱建物1の内部でS K 1を検出した。S K 1は楕円形を呈する。長辺は1.55m、短辺は1.0m、深さ0.27mを測る。北西から南東へ2段に落ちる。埋土は黒褐色(10YR3/1)細繰混じり粘土である。

溝 2条検出した。S D 1は調査地の西辺と北辺に沿うように走る溝である。平面形はコの字形、溝断面は蒲鉾形を呈する。幅0.4～0.6m、深さ0.11～0.15mを測る。溝底面のレベルを見ると、調査地東端とS D 2と切り合う南端とではその差がなく、溝水状態であったことがうかがわれる。南端に近い箇所で二又に分流する。形状から区画溝と考えられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)細繰混じりシルトである。S D 2は磁北に対してほぼ直交する溝である。延長約7mを検出した。溝断面はU字形を呈する(図版2)。幅1.3～1.4m、深さ0.54～0.6mを測り、両方とも均質である。溝底面のレベル差から、東から西へ流下する。磁北と直交すること、S D 2の南側では遺構が疎らになること、居住域を区画する用途が考えられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じり粘土である。

出土遺物には、土師器、須恵器、製塙土器の各細片がある。遺物包含層が滅失したこともあり、遺物量は僅少であった。図化できるものはない。製塙土器は古墳時代中期から後期に頻出するタイプである。このことから第3層上面で検出した各遺構は、概ね該期に属するものとみられる。

4)まとめ

第48次調査地周辺の調査状況から、今回の調査成果をみておきたい。調査地の南側は道路に接して鬼塚遺跡の範囲内となり、市立枚岡西小学校が所在する。昭和56年8月、市立枚岡西小学校校舎増築に伴う鬼塚遺跡第6次調査(以下「鬼塚6次」等と略記)では、古墳時代中期末から後期初頭の溝が検出され、その内部から須恵器、土師器、滑石製勾玉が出土した。鬼塚6次調査地は今回の調査地に接した箇所にあたり、遺構の所属時期が近いことから、今回検出した掘立柱建物1は古墳時代中期末～後期初頭に造られた蓋然性が高い。北西約100mの西ノ辻31次調査地で古墳時代中期の溝、南西約250mの鬼塚24次調査地で古墳時代後期の土師器、須恵器がみつかっている。これらの成果から、今回の調査地周辺には古墳時代の集落が広がることが推測される。今後の調査進展に期待したい。

【参考文献】財団法人東大阪市文化財協会1997「鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書」

財団法人東大阪市文化財協会1997「西ノ辻遺跡第31次発掘調査概報」(『東大阪市文化財協会概報集-1996年度(1)-』)

東大阪市教育委員会2001「鬼塚遺跡の第24次調査」(『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-平成12年度-』)

図版1 西ノ辻遺跡第48次調査

遺構



調査前の状況（南西から）



調査風景（南西から）



調査地東側断面（西から）

図版 2 西ノ辻遺跡第48次調査 遺構



検出遺構掘削後状況全景（南から）



SD 2 掘削後状況（東から）



SB 1 掘削後状況（南東から）

第3章 法通寺跡第5・6次発掘調査

1) はじめに

法通寺跡は、東石切町から中石切町に広がる飛鳥時代末期から室町時代まで存続した寺院跡を中心とした遺跡である。法通寺は藤原忠親の日記『山槐記』の応保元年（1161年）九月条に、

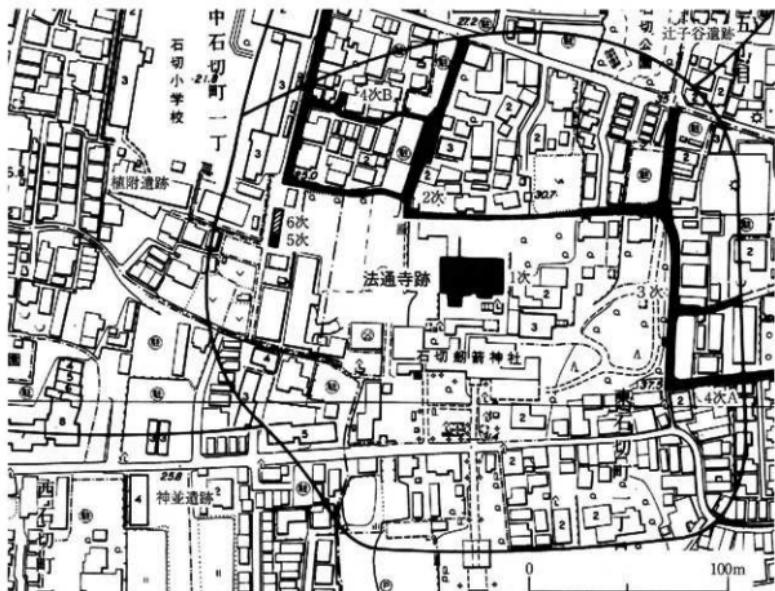
十七日丙戌 天晴、午刻参内、申河内国大江御尉訴事、

一、停止法通寺坊、如舊可隨進止事

とあり、平安時代後期に存在し、室町時代の福智院家文書の明応2年（1493）御陣図にも「法通寺」の名が見える。江戸時代にはその名を記したものもなく、それまでに廃絶してしまったようである。

昭和59年、石切神社内において穗積殿建設工事に伴う発掘調査（第1次調査）において南北に並ぶ石積み基壇の建物跡2棟と回廊跡の一部が検出され、多量の瓦や土器などが出土し、正確な伽藍は不明であるが、法通寺の遺構および存続状況が確認された。その後の調査（2～4次）はいずれも下水管埋設に伴うもので、瓦・土器などの遺物は出土しているが、遺構は確認されていない。今回の調査地は法通寺跡の北西端に位置し、西は植附遺跡、北は辻子谷遺跡に接している。

平成19年1月16日付けで、中石切町1丁目671番地2の一部における個人住宅建設に伴う届出があった。当該地は1月15日の調査で瓦器・土師器を含む遺物包含層とビットを検出した場所であり、この結果に基づき、代理者を通して協議を行ない、埋蔵文化財に影響を与えるガレージ工事部分約22m²を1月25日から1月29日までの間、第5次調査として発掘調査を実施した。



第1図 調査地位置図 (1/2500)

また、中石切町1丁目671-4・5番地において平成19年6月26日付けで個人住宅建設の届出があつた。当該地は第5次調査の北接地であり、代理者を通して協議を行ない、埋蔵文化財に影響を与えるガレージ工事部分の約29m²と26m²の計55m²を7月17日から7月23日までの間、第6次調査として発掘調査を実施した。以下、両調査地の基本層位、第5次調査の遺構と遺物、第6次調査の遺構と遺物の順で記していく。

2) 基本層位(第3図 図版1)

表土・盛土は省略。

第1層 オリーブ灰色砂混じり
シルト質土。旧耕土。

第2層 明黄褐色・灰黄色砂・
細礫混じり粘土質シルト。床土。

第3層 灰色砂・小礫混じり土。
近世以降の耕土。土師器、陶磁器の細・小片

第4層 黄褐色・灰色砂混じり
粘土質シルト質土。近世以降の床土。土師器
の細・小片出土。

第5層 灰色砂・小礫混じりシルト質土。中世以降の
耕土。土師器・瓦器の細・小片出土。

第6層 明黄褐色・暗灰黄色砂
混じり粘土質シルト。中世以降の床土。土師器・瓦器の細・小片が出土。

第7層 灰色砂混じりシルト(やや粘質)。上部に暗褐色土粒多く含む。土師器・瓦器の小片、瓦、須恵器などが出土。

第8層 黒褐色砂・礫混じりシルト質土。地山。

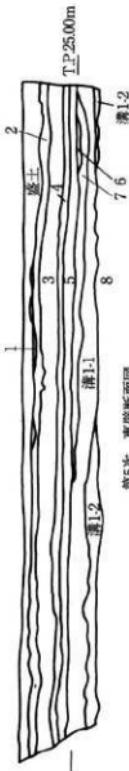
溝1-1 灰色砂混じりシルト質土。

溝1-2 黄灰色砂・小礫混じりシルト質土。にぶい黄褐色砂粒含む。

土坑1 灰オリーブ色砂礫混じり粘土質土。



第2図 第5・6次調査地位置図



第5次 東壁断面図

表土・盛土
第1層 オリーブ灰色(5G5/1)砂混じりシルト質土。

第2層 明黄褐色(10YR6/1)砂・灰褐色(2.5Y4/2)砂・細繊混じり粘土質シルト。

第3層 灰色(7.5Y7/1)砂・灰褐色(2.5Y4/2)砂混じり土。

第4層 黄褐色(7.5YR5/6)・灰褐色(7.5Y6/1)砂混じり粘土質シルト質土。

第5層 灰色(5Y5/1)砂・小繊混じりシルト質土。

第6層 明黄褐色(10YR6/8)・暗灰褐色(2.5Y5/2)砂混じり粘土質シルト。

第7層 黑褐色(10YR5/1)砂混じりシルト質土(やや粘質)。一部に暗褐色(10YR3.3)土粒多く含む。

第8層 黒褐色(10YR5/1)砂混じりシルト質土。

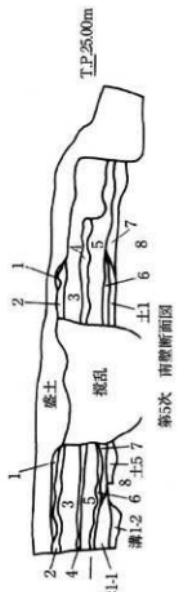
溝1-1 土色(10Y5/1)砂混じりシルト質土。

溝1-2 黄灰褐色(2.5Y5/1)砂・小繊混じり粘土質土。

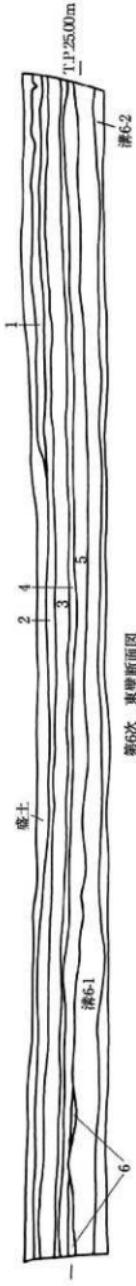
土坑1 灰オリーブ色(10YR5/4)砂混じり粘土質土。

土坑5 にがい黄褐色(5Y5/2)砂混じり粘土質土。

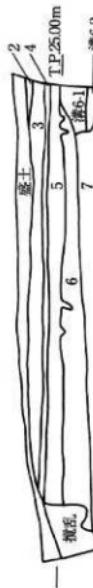
動溝 動土(5Y5/1)・灰オリーブ色(5Y5/2)色砂・小繊混じりシルト質土。



第6次 東壁断面図



第5次 南壁断面図



第6次 東壁断面図

第5・6次調査地土層断面図

土坑5 にぶい黄橙色砂混じり粘土質シルト。

龜溝 灰色・灰オリーブ色砂・小砾混じりシルト質土。土師器・瓦器の細・小片などが出土。

3) 第5次調査

a. 遺構

調査は、南隣地との関係から境界より1m幅を控え、盛土および近代以降の第1層の耕土、第2層の床土、近世以降の第3層の耕土、第4層床土、現代の搅乱坑、西端側の搅乱の大半を機械掘削と人力掘削によって除去し、中世以降の第5層耕土、第6層床土をもゆっくりと機械掘削し、第7層以下は人力掘削による調査を実施した。道路側は既存していた境界擁壁によって大きく搅乱されており、搅乱坑も中央部と南側に2箇所あった。2~7層内には須恵器・土師器・土師質土器・瓦器・黒色土器などの細・小片が包含され、とくに4~6層に多く須恵器蓋(1~3)などが出土した。

第8層上面遺構(第4図 図版2)

第8層は黒褐色砂・砾混じりシルト質粘土で、いわゆる地山である。上面において、南北方向の溝群12条(溝1~4、6~13)、東西方向の溝1条(溝5)、土坑6基(土坑1~6)、ピット2個(P1・2)を検出した。

溝1は東壁に沿って南北に延びるが、東肩は調査地外になるため本来の幅は不明。検出幅0.4~0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は2層に分かれ、上部は灰色砂混じりシルト質土、下部は黄褐色(10YR5/6)砂粒含黒褐色(10YR3/2)砂・小砾混じりシルト質土で、土師器・須恵器・黒色土器の細・小片が出土した。

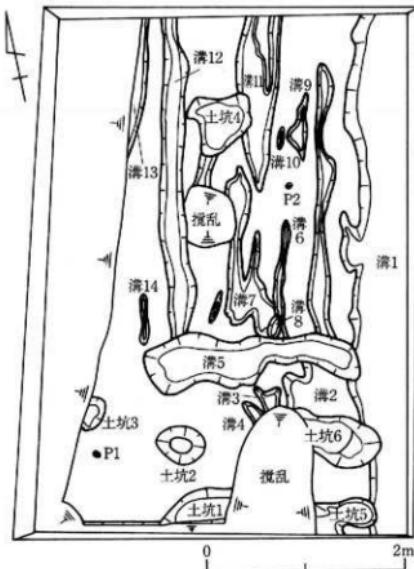
溝2~4・6~8・10~14は南北方向に延び、幅0.07~0.18m、深さ0.04~0.36mを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫混じりシルト質土で、溝12の須恵器杯身(4)をはじめ、土師器・須恵器・瓦器の細・小片が出土した。耕作に伴うもの。

溝5は東西方向に延び、幅0.2~0.5m、長さ2.2m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫混じりシルト質土で、土師器・瓦器の細片が出土した。南北方向の溝を切っている。

溝9は南北方向の溝、幅0.18m、長さ0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は黄褐色(10YR5/6)砂質土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)砂礫混じりシルト質土で、遺物は出土せず。

土坑1は南端部で搅乱により破損し、検出の幅0.7×0.35m、深さ0.2mを測る。埋土は灰オリーブ色(5Y5/2)砂礫混じり粘土質土。

土坑2は0.5×0.4mの楕円形を呈し深さ0.4mを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混じ



第4図 第5次調査第8層上面遺構平面実測図

り粘質土。

土坑3は西部が破損。検出幅0.35×0.2m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫混じりシルト質土(やや粘土質)。

土坑4は幅0.6×0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は黄褐色(10YR5/6)砂質土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)砂礫混じりシルト質土で、須恵器・土師器・土師質土器、瓦器の細片が出土。

土坑5は南端部で搅乱により破損し、検出幅0.6×0.32m、深さ0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫混じり粘土質シルト。

土坑6は搅乱で破損し、検出幅0.9×0.5m、深さ0.33mを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫混じりシルト質土(やや粘土質)。

P1・2は径0.08m、深さ0.04mを測る。埋土は灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫混じりシルト質土。

各遺構は、平安～鎌倉時代に亘るものと考えられ、溝1、南北方向の溝群、東西方向の溝5内より遺物を検出したが、明確な時期を限定できるものではなかった。土坑5・6、溝5は溝1埋没後のもの。さらに溝5は南北方向の溝埋没後である。溝1は黒色土器を含み、南北方向の溝群には瓦器をも包含していたことから、溝1は10世紀代、南北方向の溝群は11世紀代、溝5・土坑5・6などはそれ以降の遺構といえる。

b. 遺物(第5図 図版5)

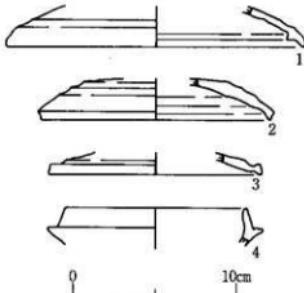
以下の解説では、口縁部のナデ調整と焼成が良好なものについては説明を省く。

包含層と溝・土坑から、土師器・須恵器・瓦器・鉄釘が出土した。時期幅は古墳時代後期(6世紀後半)～中世と幅広い。図化できた須恵器4点を取り上げる。

1～3は須恵器の杯蓋である。1は天井部が丸味を帯び、緩やかに口縁部に繋がる。天井部の頂部を欠き、器高は低い。口縁端部は丸く納める。内面のかえりの作りはやや甘い。外面は回転ヘラケズリ調整の後に、口縁部を回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。灰色を呈し、胎土に長石を含む。2は天井部が丸味を帯び、頂部付近に平坦面を持つ。口縁部は直線的に斜め下方に伸びる。口縁端部は面を持ち、下へ短く伸びる。外面は回転ヘラケズリ調整の後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。灰白色～明オリーブ灰色を呈し、胎土に長石を含む。3は全体が扁平化している。天井部は直線的に若干立ち上がり、口縁部に段を持つ。口縁端部は面を持ち、下へ短く伸びる。内外面は回転ナデ調整する。灰色を呈し、胎土は緻密である。

4は受部を持つ須恵器の杯身である。体部の大半を欠く。幅狭の受部は、半裁竹管状工具をナデ付けたと思われる、沈線状の痕跡を残す。口縁部はやや短く、内傾する。口縁端部は尖り気味である。内外面は回転ナデ調整する。灰白色～灰色を呈し、胎土は緻密である。

1はTK46型式に該当する7世紀後半のもの、2はMT21型式に該当する8世紀初頭のもの、3はTK7型式に該当する8世紀後半のもの、4はMT85型式に該当する6世紀後半のものである。1～3は包含層、4は溝12から出土している。



第5図 第5次調査出土遺物実測図

4) 第6次調査

a. 造構

調査は、南・北の隣地との関係から南北境界より各1m幅を控え、盛土および近代以降の第1層の耕土、第2層の床土、近世以降の第3層の耕土、第4層床土、現代の搅乱坑、西邊側の搅乱（道路境界に既存していた擁壁基礎部）の大半を機械掘削と人力掘削によって除去し、中世以降の第5層耕土、第6層床土をもゆっくりと機械と人力で掘削し、第7層以下は人力掘削による調査を実施した。搅乱坑は南により2箇所あった。上記の3層から6層にわたる遺物包含層内からは土師器皿（1~4）、土師器碗（7~9・11~22・24~28）、黒色土器碗（29~33・35・36）、須恵器の瓶または壺（37・38）・杯蓋（39）・甕（41）、土師器壺（43~47・51・52）、土師質移動式竈（58・59・62・63）、軒丸瓦（64）・丸瓦（65~69）・平瓦（72~75）など多くの遺物片が出土した。

第7層上面遺構（第6図 図版3）

溝は上部層の整形などによって削平を受けており、途切れているところがあったが、北東部域で5条の溝（溝1~5、各溝に枝番、溝1-1、溝1-2など）を検出した。検出面で幅0.1~0.5m、深さ0.05~0.15mを測る。埋土は灰オリーブ色（5Y5/2）砂混じり砂質土で、土師器碗（6・10）、黒色土器（34）をはじめ土師器・瓦器・黒色土器・須恵器などの細・小片が出土した。中世後半期の耕作に伴う鶴渕。

第8層上面遺構（第6図 図版4）

溝10条（溝6~15）、土坑3基（土坑1~3）とピット10個（P 1~10）を検出した。

溝6 東壁に沿って南北に延びるが、東肩は調査地外になるため本米の幅は不明。検出幅0.3~0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は2層に分かれ、上部は灰色砂混じりシルト質土、下部にはぶい黄褐色砂粒含む黄灰色砂・小礫混じりシルト質土で、土師器碗（23）、須恵器杯身（40）、土師器壺（42）、製塙土器（57）、平瓦（71）など土師器・須恵器・瓦片などが出土した。第5次調査の溝1と対応。

溝14 幅0.14m、長さ0.5m、深さ0.05mの南北方向に延びる。埋土は黄灰色（2.5Y6/1）砂混じり粘質土。遺物出土せず。

溝7~13・15 南南東~北北東に延びる溝。溝7~9・12・13・15は幅0.2~0.4m、深さ0.08m。埋土はにはぶい黄橙色（10YR6/4）砂・小礫混じりシルト質土で、溝13-土師器碗（5）をはじめ土師器・須恵器・土師質土器の細・小片が出土した。溝10・11は幅0.3~0.9m、深さ0.07m。埋土は灰色（5Y5/1）砂混じり粘質土で、溝11-土師器壺（48・50）をはじめ土師器・須恵器の細・小片が出土した。耕作溝。

P 1・2・6・8 埋土は黄灰色（2.5Y6/1）・にはぶい黄褐色（10YR5/4）砂混じりシルト質土で、P 8から土師器細片が出土した。

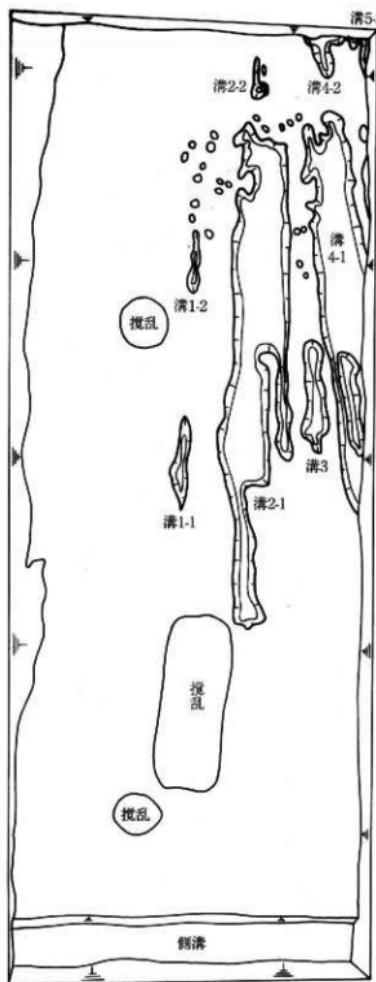
P 3・4・5・9・10 埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じりシルト質土で、P 3・5から土師器細片が出土した。

土坑1 埋土は黄灰色（2.5Y4/1）砂・小礫混じり粘質土で、須恵器・土師器・土師質土器の細・小片が出土した

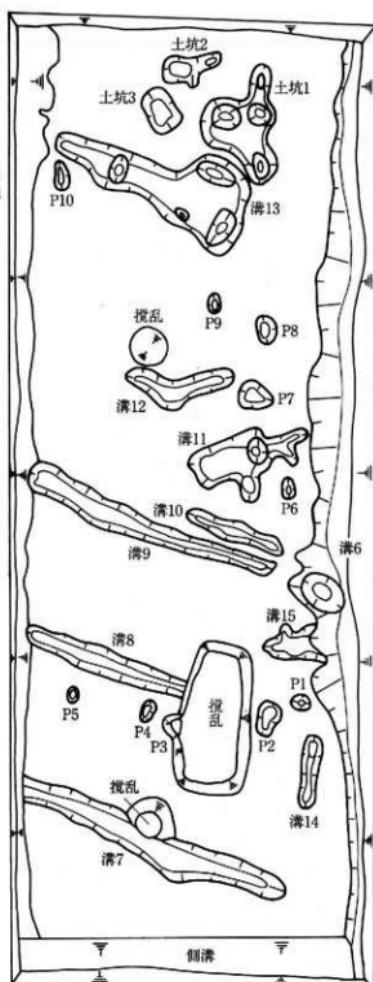
土坑2 埋土は灰オリーブ色（5Y4/2）砂・小礫混じり粘質土で、土師質土器の細片が出土した。

土坑3 埋土は灰黄褐色（10YR4/2）砂・小礫混じり粘質土。遺物出土せず。

北西部の搅乱土内からは土師質移動式竈（60・61）、平瓦（70）とともに須恵器・土師器・黒色土器・瓦器の細・小片が出土した。



第7層上面 遺構面



第8層上面 遺構面



第6図 第6次調査第7・8層上面遺構平面実測図

b. 遺物（第7～9図 図版5～9）

第6層を中心とする包含層と溝・落ち込みなどの遺構から、土師器・須恵器・黒色土器・瓦が出土している。平安京II期前後に併行する9世紀後半～10世紀初頭のものが中心である。遺構出土資料の一括性が低いため、包含層出土資料と区別せずに記載する。

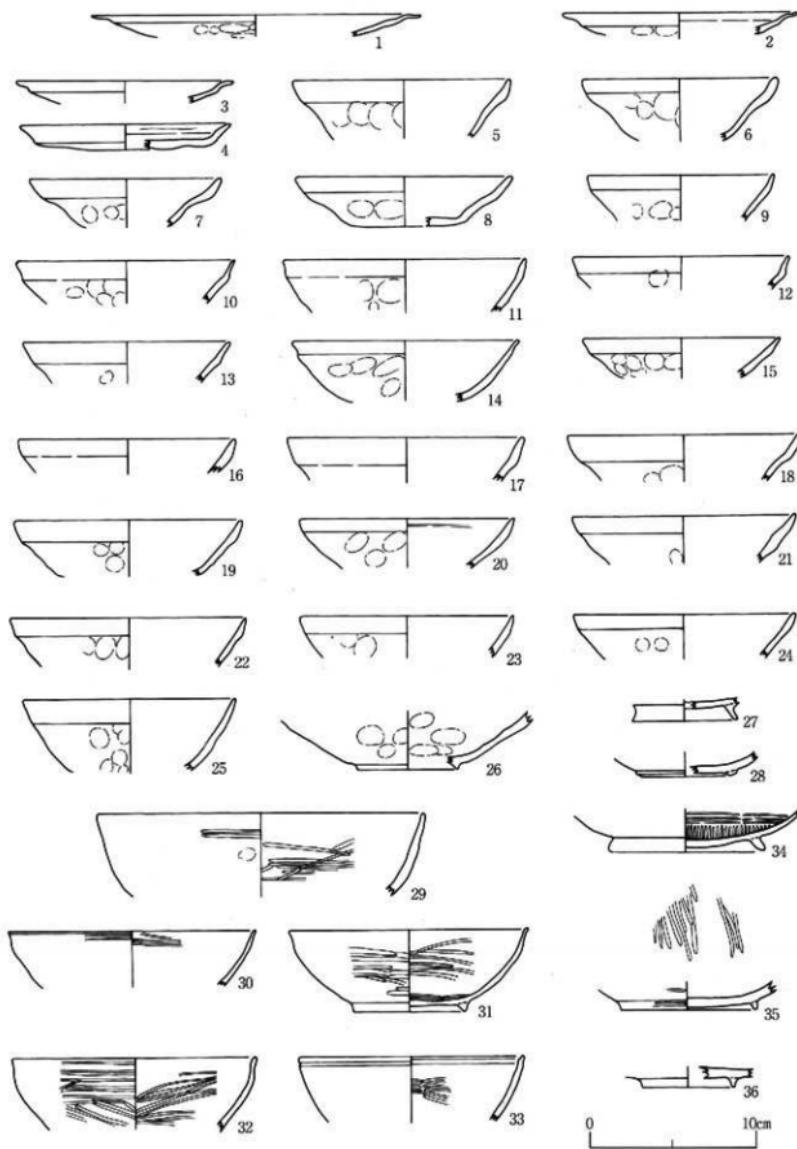
1～4は土師器の皿である。1～3は口縁部が強く外反し、口縁端部内面を摘み上げる。いわゆる「て」の字状口縁を呈するものである。底部を欠き、体部外面は指オサエ成形による指頭圧痕を残す。内面はナデ調整する。非常に薄手である。1・2は明るい褐色を呈し、3は白味が強い。胎土は緻密である。4は強いヨコナデ調整によって口縁部が外反する。口縁端部は尖る。底部は平底である。体部外面は指オサエ成形による指頭圧痕を残す。内面はナデ調整する。茶色味を帯び、胎土に径1mm程度の石英・長石を含む。

5～25は土師器の碗である。体部外面は指オサエ成形による指頭圧痕を残す。口縁部はヨコナデ調整を巡らす。内面は比較的丁寧にナデ調整する。成形と器面調整の強さの違いから、器形に違いが見られる。器形と色調・胎土との明確な相関関係は認められない。胎土は緻密なものが多く、角閃石を含まない。すべて他地域産のものである。5～8は体部が強く凹むものである。口縁部は斜め上方に向に立ち上がり、体部よりも器壁が厚くなるものが多い。5～7は明るい褐色を呈し、胎土に若干の石英・長石を含むものがある。8はやや暗めの茶褐色を呈し、胎土に細かな石英・雲母を含む。9～12は口縁部のヨコナデ調整が強く、体部との境に明らかな屈曲を持つものである。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は尖るものが多い。9はにぶい橙色を呈し、胎土が緻密である。やや軟質な質感である。10は赤褐色を呈し、胎土に石英・角閃石を含む。11は橙色を呈し、胎土に石英・長石を含む。12は明赤褐色～にぶい褐色を呈し、胎土に石英を含む。13～25は口縁部と体部との境の屈曲が比較的緩やかで、器形に強い凹みがないものである。口縁部の器壁が薄く口縁端部が尖るもの（13～15）、口縁部の器壁がやや厚くなり口縁部が尖り気味なもの（16～19・22）、器壁の厚さが概ね一定なもの（20・23～25）がある。橙色味が強く、胎土に石英・長石・雲母を含むものが多い。この内、14・23・24は口縁部にヨコナデ調整による不鮮明な擦痕を残す。口縁部のヨコナデ調整に何らかの工具（充て具）が用いられた可能性がある。18は口縁部と体部との境に沈線状の工具ナデ付け痕を残す。21は体部に焼成時に有機物が燃え尽きたと思われるひび割れを残す。

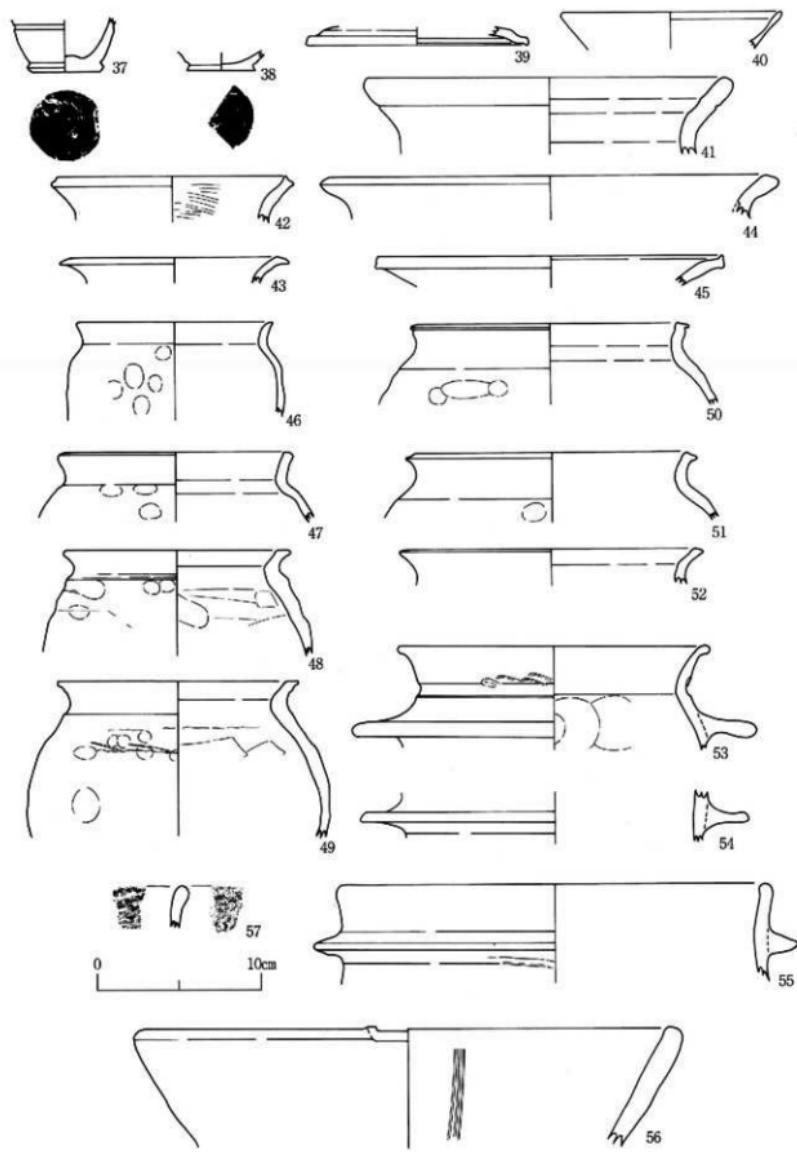
26～28は高台を貼り付けた土師器の底部片である。『平城宮発掘調査報告XII 本文』（奈良国立文化財研究所1982）の分類における、杯Bもしくは皿Bに該当すると考えられる。26は杯Bの底部である。内外面に指オサエ成形による指頭圧痕を残す。にぶい橙色を呈し、胎土に石英・雲母を含む。27・28は平底を呈し、内外面をナデ調整する。褐色味を帯び、胎土に石英・雲母を含む。

29～33は黒色土器の碗である。体部は丸味を帯びる。口縁端部はやや上向きで、尖り気味である。外面はヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面はヘラミガキ調整する。摩滅により器面調整が判別し辛いものがある。いずれも内黒で、森隆による畿内系Ⅲ類に該当する（森1995）。29はやや大形のものである。外面は暗灰黄色、内面は黄褐色を呈し、胎土に石英・雲母を含む。30～32は口縁部が上向きに立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。30は内面がにぶい褐色、外面が黒色を呈する。31は外面が灰褐色、内面がオリーブ黒色を呈する。32は外面がにぶい黄褐色、内面が黒色を呈する。いずれも胎土に石英・雲母を含む。33は口縁端部内面に沈線が巡る。口縁部の断面は緩やかな「S」の字状を呈し、胎土に石英・長石・雲母を含む。大和型の碗である。

34～36は高台を貼り付ける黒色土器の底部である。34は平たい丸底で、35・36は平底である。34・35は見込み部に平行する直線的な暗文を施す。34の暗文は特に密である。34は外面が橙色、内面が黒



第7図 第6次調査出土遺物実測図（1）



第8図 第6次調査出土遺物実測図(2)

褐色を呈する。35は外側がにぶい橙色、内面が黒褐色を呈する。36は外側がにぶい黄橙色、内面が灰色を呈する。34は胎土に石英・クサリ礫を、35・36は胎土に石英・長石・雲母を含む。

37~41は須恵器である。37・38は瓶もしくは壺の底部である。底部が高台状を呈する。底面は回転糸切り痕を残す。内外面は回転ナデ調整する。灰色~明青灰色を呈する。37は胎土に石英を含む。38の胎土は緻密である。9世紀頃のものであると考えられる。39は杯蓋である。全体が扁平化している。口縁部外面は強いヨコナデ調整による段を持つ。口縁端部が外側に面を持ち、下に摘む。内面は回転ナデ調整する。灰白色を呈し、胎土に若干の石英を含む。TK 7型式に該当する、8世紀後半のものである。40は杯身である。口縁部は若干内彎気味に、斜め上方向へ伸びる。口縁端部の器壁はやや厚くなり、丸く納める。内外面は回転ナデ調整する。9世紀代のものである。41は壺である。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は斜め上方へ伸びる。口縁端部は丸く納める。体部より下を欠く。外面に沈線が巡る。内外面は回転ナデ調整する。灰色~灰白色を呈し、胎土に石英・長石を含む。正確な帰属時期は不明である。

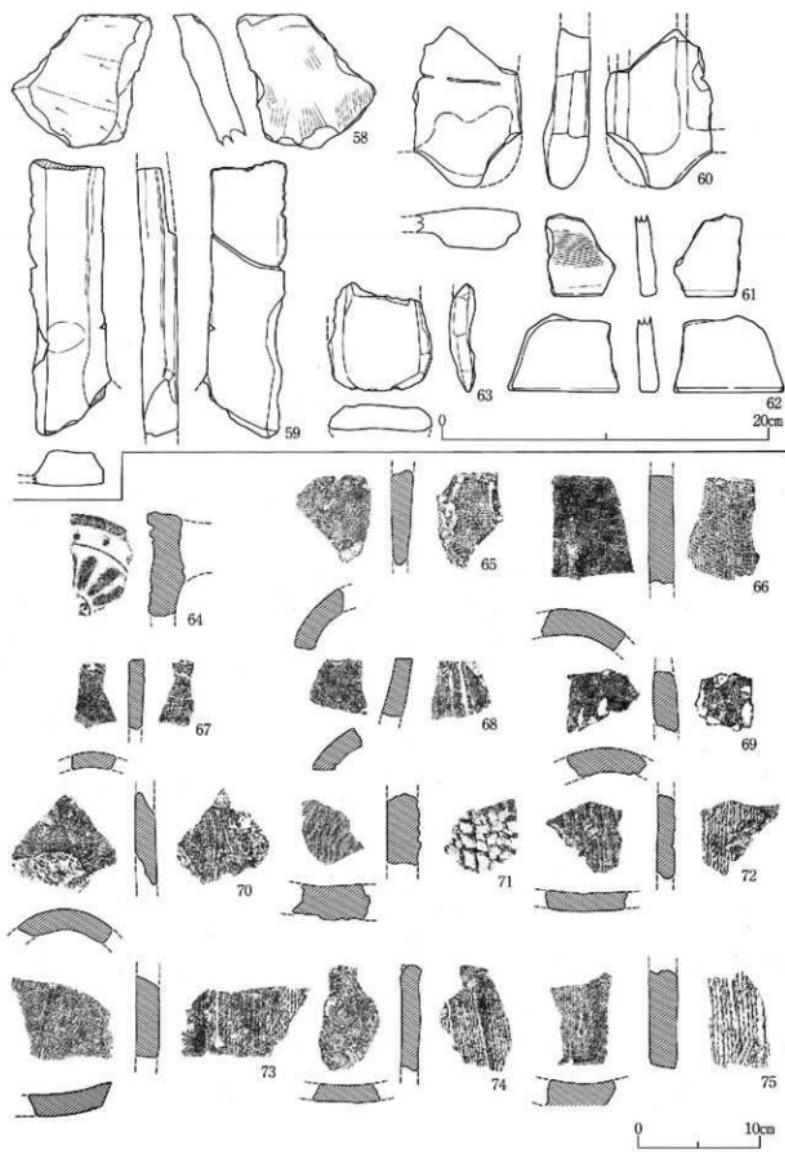
42~52は土師器の壺である。外側に聞く口縁部を持つ。多くが体部下半~底部を欠く。体部内外面は指オサエ成形による指頭圧痕を残す。42が口縁部内面をハケメ調整する以外は、口縁部は内外面をナデ調整する。口縁端部に面を持ち、42・45は内面を摘み上げる。44のみは口縁端部が丸味を帯びる。色調は橙色~にぶい赤褐色~灰褐色と幅があるが、暗めで褐色味を帯びるものが多い。胎土に石英・長石を含み、雲母を含むものもある。

53~55は土師器の羽釜である。にぶい橙色~にぶい褐色を呈し、胎土に雲母・角閃石を含む。生駒西麓産の胎土である。53は口縁部~鋸部が残り、口縁端部をわずかに欠く。体部は丸みを帯び、口縁部は緩やかに外反する。鋸部は水平後方に伸び、端部は丸く納める。内外面はナデ調整する。頸部外面は工具痕が残る強いナデ調整をする。口縁部の立ち上がりは菅原正明による10世紀の河内B型に類似する（菅原1983）。これ以外の特徴は森島康雄による中河内地域の11世紀のA型式に類似する（森島1990）。54は鋸部のみが残る。鋸部はやや下向きに伸び、端部に強い面を持つ。内外面はナデ調整する。55は口縁部~鋸部が残る。口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに内彎し、丸く納める。鋸部は短く、断面三角形状を呈する。内外面はナデ調整する。

56は瓦質の擂鉢である。口縁部は斜め上方向に伸びる。口縁端部は軽く面取りし、一部に片口を持つ。内面にカキメが残る。器壁は1cm強と厚い。摩滅のため、詳しい器面調整は不明である。淡桜色を呈し、白味が強い。胎土に石英・長石を含む。

胎土と質感から、57は製塙土器の口縁部片と判断する。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く納める。体部より下を欠く。浅黄色を呈し、胎土に径1~2mm程の石英・長石を多く含む。胎土は非常に粗い。詳しい帰属時期は不明である。ただし、畿内では8世紀に製塙土器が急増し、9世紀には激減することから（積山1993）、8世紀のものである可能性が考えられる。

58~63は土師質の移動式竈である。褐色味を帯び、胎土に大きめの角閃石と雲母を多く含む。牛駒西麓産の胎土である。色調・胎土・質感が非常に似通っていることから同一個体を含む可能性がある。58は口縁部片である。内傾して直線的に立ち上がる。口縁端部は面取りする。外面は上向きにハケメ調整する。内面はヘラケズリ調整する。59は焚口部内面の肥厚部分である。横断面が台形を呈する棒状の破片で、接地面を欠く。正確な傾きは不明である。本体体部と接合面で剥離している箇所がある。焚口部を面取りした後に、内外面をナデ調整する。60は焚口部下半の破片である。内面に肥厚部分があり、横断面が台形である。端部の器壁はやや厚さを増す。正確な傾きは不明である。摩滅のため判別が難しいが、外面はハケメ調整すると考えられる。内面はナデ調整し、焚口部は面取りする。61・



第9図 第6次調査出土遺物実測図（3）

62は体部接地部分の破片である。やや内傾して直線的に立ち上がる。接地面は面取りする。61の内面はハケメ調整する。これ以外の器面調整は、摩滅のため不明である。63は焚口部内面の肥厚部分である。緩やかに湾曲する板状の破片で、接地面付近まで残存する。本体体部から剥離している。下端の器壁は薄くなる。横断面は平らな台形を呈する。器面はナデ調整する。

64は軒丸瓦の瓦頭部片である。丸瓦部接合面で剥離している。瓦頭文様は、外区に珠文が巡り、内区に子葉表現が退化した花弁の細長い素弁珠文縁細弁15葉蓮華文である。推定される花弁の数は14枚前後である。中房がわずかに残る。外区外縁の断面は台形状に突出する。黄灰色を呈し、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。法通寺跡第1次調査で出土した軒丸瓦の内、IV類に該当する（下村1985）。平安時代以降のものと考えられる。

65～70は丸瓦の破片である。厚さは1.5～2cm程である。凹面は布目压痕を残し、凸面は丁寧にナデ調整する。白灰色～灰色を呈し、いぶしは認められない。胎土に角閃石を含むもの（65・67・69・70）と、含まないもの（66・68）とがある。行基式の丸瓦であると考えられる。

71～75は平瓦の破片である。厚さは1.5～3cm程である。凹面に布目压痕を残し、凸面に繩目タタキ痕を残すものが多い。71のみ、凸面に格子目タタキ痕を残す。灰白色～灰色を呈し、いぶしは認められない。72と74は胎土に角閃石を含み、厚さ・色調・質感が似通っていることから、同一個体である可能性がある。

5)まとめ

法通寺跡は、白鳳時代から鎌倉時代に存続した法通寺を中心とした遺跡として周知されている。伽藍状況は明確ではないが、多量に出土した瓦や建物に伴う基壇状況などから、大寺院が造営されていったことがうかがえる。今回の調査地は、本遺跡の西端部に位置して中心伽藍からは大きく離れており、寺に関する遺構は見られず、主要遺構から平安時代以降においては耕作域であったことが知られた。ただ、遺構内理土および中・近世の整地層からは寺院活用時期の土器（須恵器・土師器・黒色土器・瓦器）、瓦（軒丸・丸・半瓦）などが出土し、寺廃絶後の整地状況を知ることができた。

【参考文献】

- 下村晴文 1985 「法通寺」 財團法人東大阪市文化財協会
- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念
論文集刊行会 同朋社
- 積山 洋 1993 「律令制期の製塙土器と塙の流通—揖河泉出土資料を中心に—」『ヒストリア』第141号
大阪歴史学会
- 奈良国立文化財研究所 1982 「平城宮発掘調査報告Ⅺ 本文」
- 森 隆 1995 「Ⅲ 土器・陶磁器 2. 黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
真陽社
- 森島康雄 1990 「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎的研究VI』 日本中世土器研究会



調査地機械掘削
(北より)



東壁面 - 部分 -
(西より)



南壁面 - 部分 -
(北より)

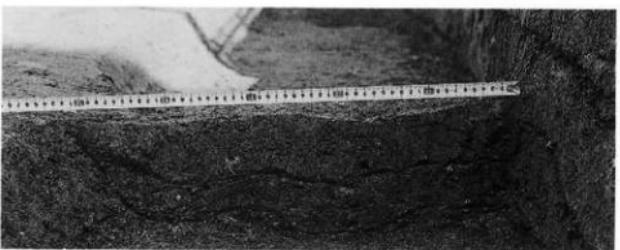
図版2 法通寺跡第5次調査 遺構



遺構検出状況
(南より)



遺構発掘状況
(南より)

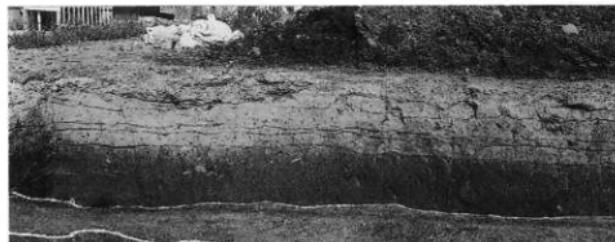


溝1断面
(南より)

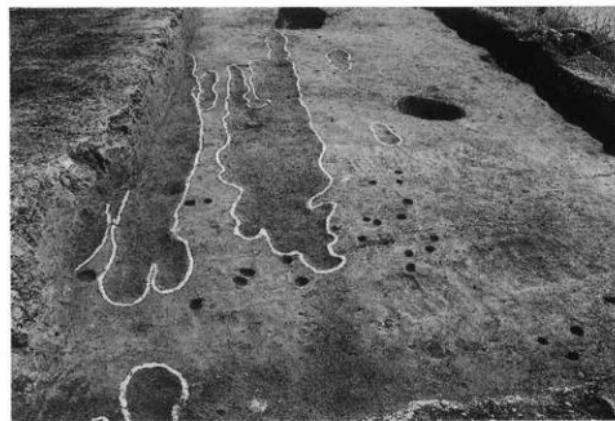
図版 3
法通寺跡第6次調査
遺構



調査地機械掘削前状況
(北より)



東壁断面 - 部分 -
(西より)



第7層上面造構完掘
状況 (北より)

第8層上面遺構検出
状況（東より）



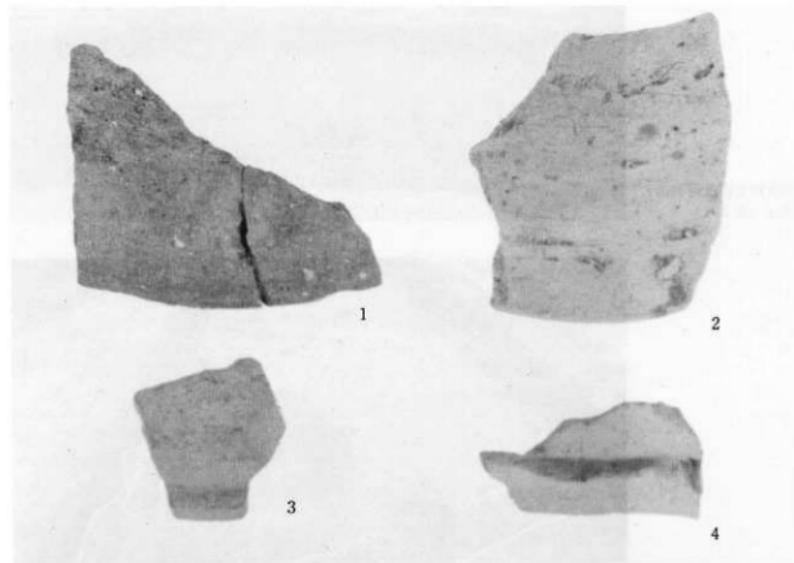
第8層上面遺構完掘
状況（南より）



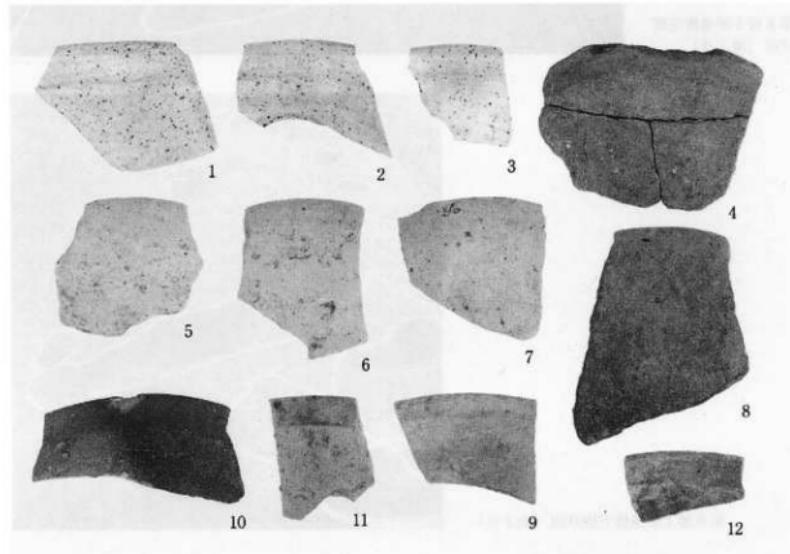
第8層上面遺構完掘状況（北より）



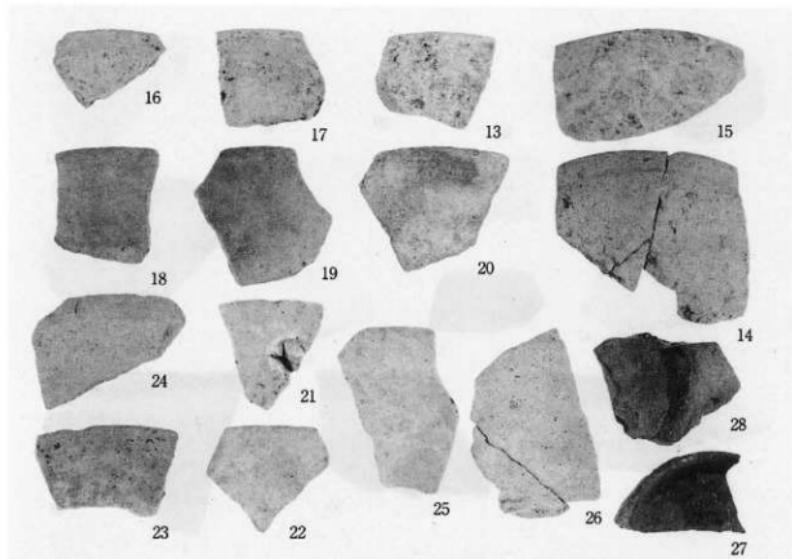
圖版 5
法通寺跡第5・6次調查
遺物



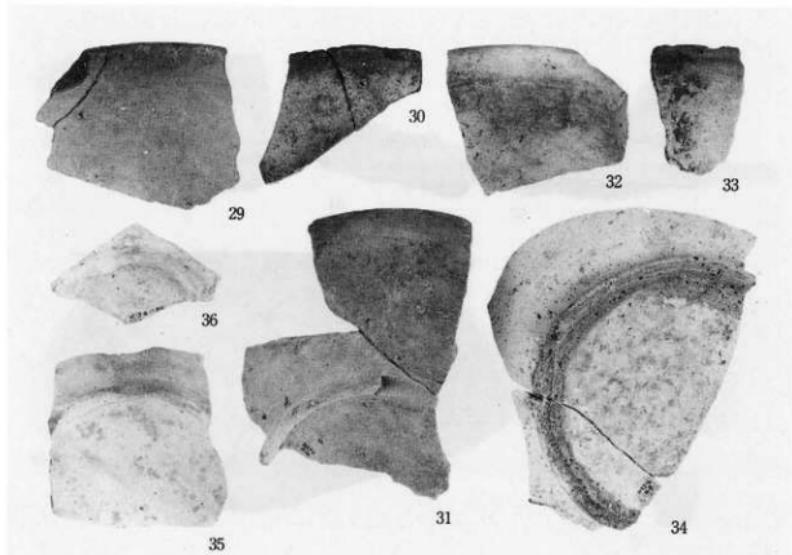
1. 第5次 須恵器杯蓋・杯身



2. 第6次 土師器皿・椀

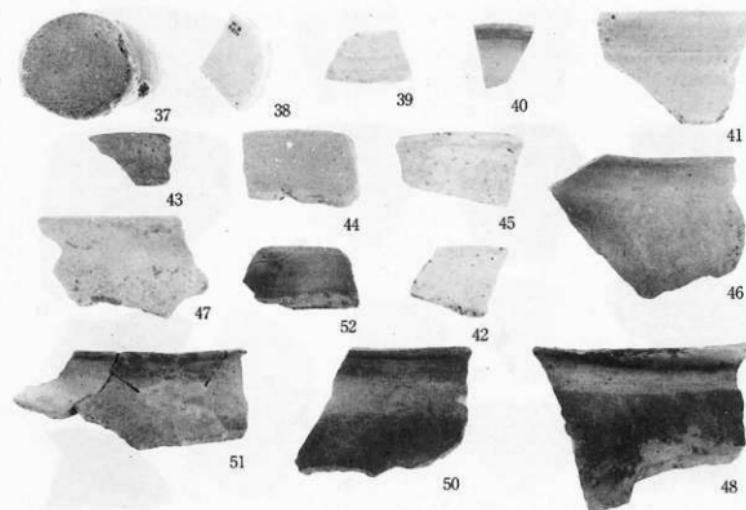


1. 第6次 土器碗・底部片

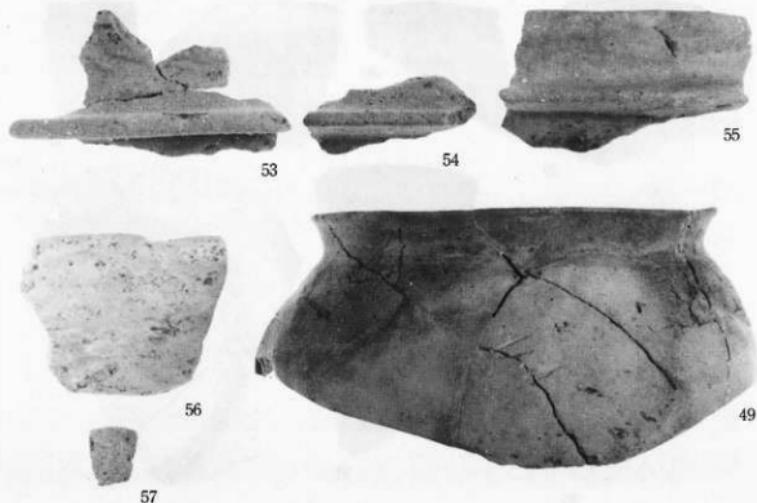


2. 第6次 黒色土器碗・底部片

圖版 7
法通寺跡第6次調査
遺物

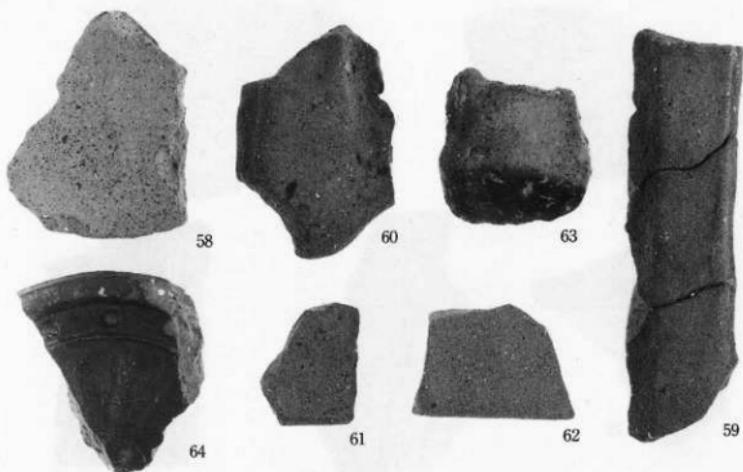


1. 第6次 須恵器底部片・杯蓋・杯身・甕、土師器壳

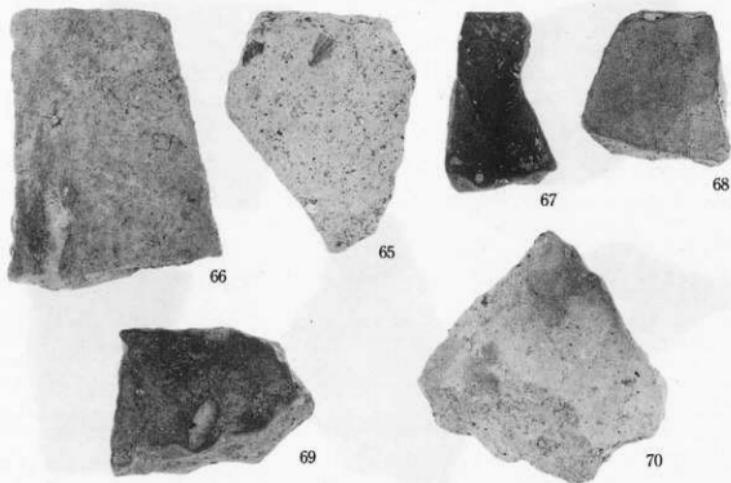


2. 第6次 土師器壳・羽釜、瓦質土器擂鉢、製塙土器

図版 8 法通寺跡第6次調査 遺物

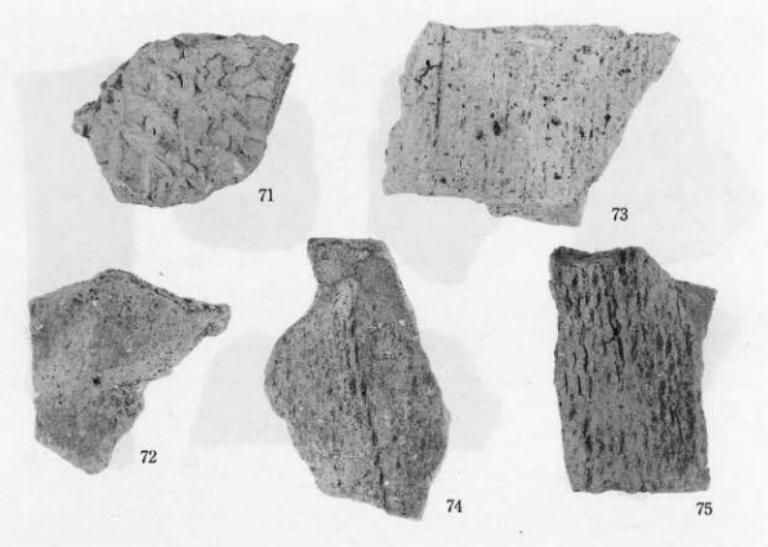


1. 第6次 移動式窯、軒丸瓦

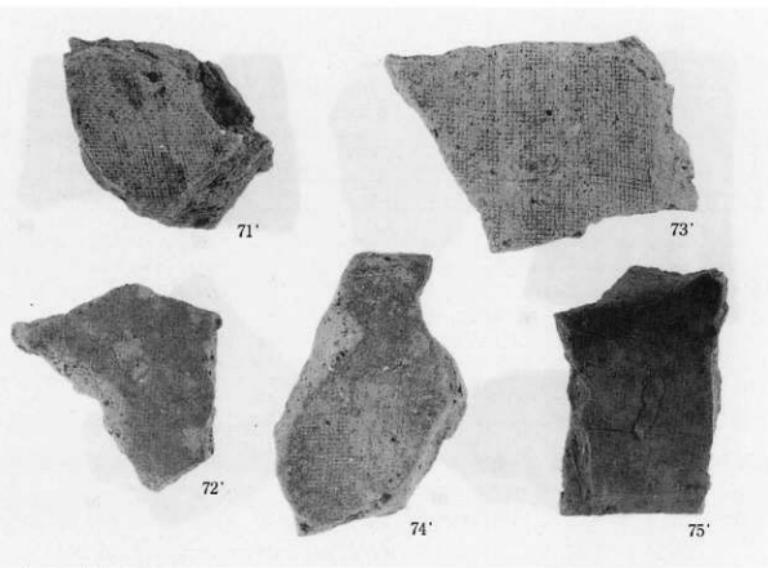


2. 第6次 丸瓦（凸面）

圖版 9
法通寺跡第6次調查
遺物



1. 第6次 平瓦(凸面)



2. 第6次 同上(凹面)

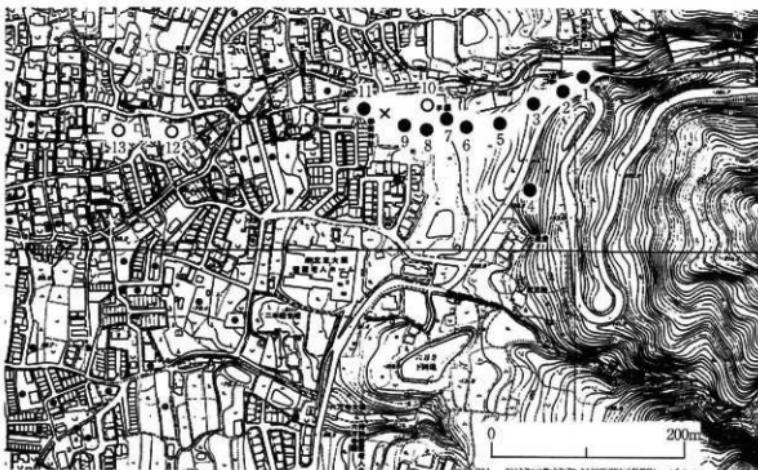
第4章 五里山古墳群第2・3・4次発掘調査

1)はじめに

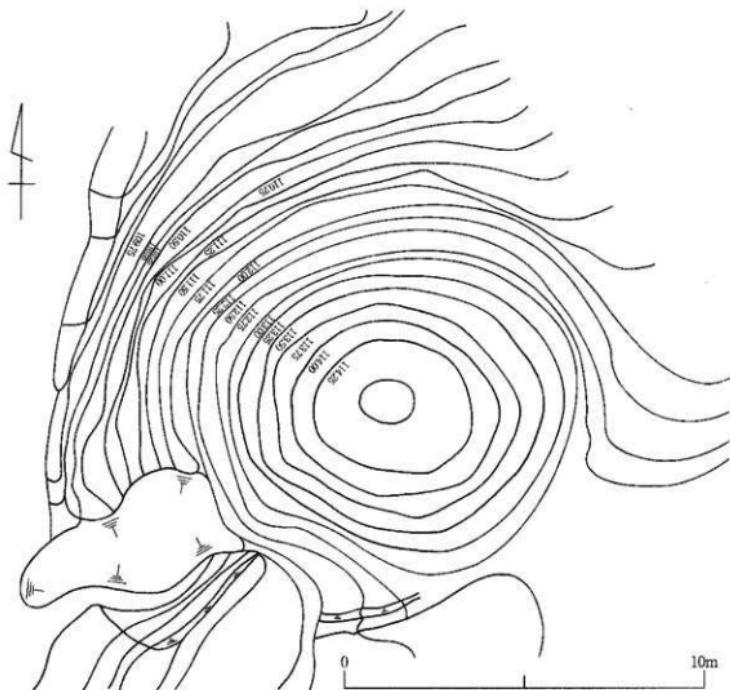
五里山古墳群は、上四条町・上六万寺町に広がる6世紀後半から7世紀前半にかけての群集墳である。これまで13基の古墳が確認されているが、後世、とくに近代以降の開墾などによりその多くは破壊・欠損し、現存しているのは半壊を含め5基にすぎない。古墳は径15m前後の円墳であるが、双円墳の存在も知られている（2号墳）。昭和41年に1～3号墳の発掘調査（第1次調査）が行なわれた。1号墳は石室底部部分を残すのみであったが、2・3号墳は墳丘・石室ともほぼ完存していた。主体部は横穴式石室で、石室内の埋葬は組合式石棺もあったが、多くは複数の木棺が納められていたようである（いずれも開口していた）。遺物は須恵器・土師器などの土器類をはじめ、環頭大刀柄頭（2号墳）・直刀・鉄鎌・鉄斧・尾錠・鉄釘などの鉄製品、耳環やガラス製の玉などの装身具類があり、轡などの馬具類も出土している。1～3号墳は昭和43年5月2日に市史跡として指定された。その後、らくらく登山道の整備に伴い、2号墳東部部分は埋没し、1・2号墳は大阪府の管理下にある。

平成19年1月17日付けで、上四条町1170番地3および上六万寺町1744番地2ほかにおいて個人施行による区画整理事業の届出があった。当該地は市史跡指定の3号墳と未確認の4～11号墳の古墳の存在が推定されることから、代理者および関係所管と協議を重ねた。3号墳および11号墳（旧春日神社社地）については整備・保存することが決まり、旧大阪府立蓄水池園内を除いた地域については2回に分けて確認調査を、旧学園内については建物等の解体工事時に確認調査を実施することにした。また、3号墳の古墳状況（墳丘規模など）と保存範囲を確認するため、平成19年1月30日～2月7日まで第2次調査を実施し、この結果に基づき、保存範囲を確定した。

また、平成19年3月19日から3月27日と、7月31日から8月3日に、旧学園建物群外での確認調査として第3・4次調査を実施した。以下、第2、第3、第4次調査の遺構・遺物の順で調査の概要を記述する。



第1図 五里山古墳群古墳分布図(1/5000)【×は1974年遺物出土地、○は消滅。】



第2図 3号墳墳丘測量図

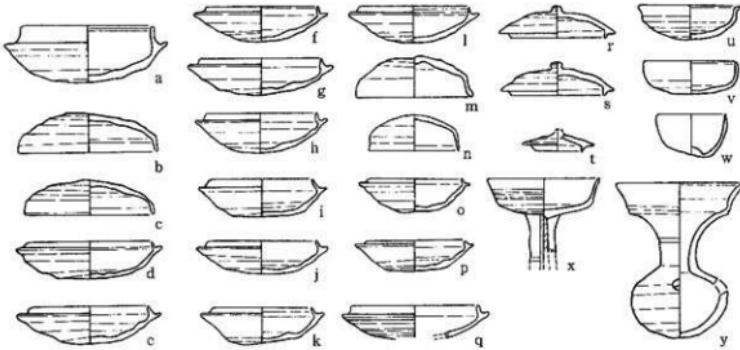
昭和41年当時は鳴川谷古墳群と称され、2号墳と3号墳の間にある大墓地を古墳の残骸として3号墳とし、現3号墳を4号墳として周知されていた〔文献1・2〕。

平成16年6月に大阪府健康福祉部と菊水学園跡地の取り扱いについての協議が行なわれており、それに関連して、大阪府教育委員会の一瀬和夫氏（現在、京都橘大学）より古墳分布位置概略図が送付されていたが、調査時点でのこの資料を前もって確認することができなかつた。

2) 第2次調査

第2次調査は、市史跡指定の3号墳の範囲と主体部である横穴式石室内の精査と羨道から前庭部にかけての確認を行なった。

第1次調査では主に石室内の調査が実施された。その結果、石室は南南西に開口する右片袖式の横穴式石室で、玄室床面には15~40cm大の石が一面に広がっていた。盜掘等によりかなり搅乱され、凝灰岩製組合式石棺（やや退化した家形式の蓋を有する）片が散乱していたものの、玄室奥壁沿いに須恵器2、金銅製馬具片、西壁沿いに鉄鏃や轡、東壁沿いから須恵器高杯2、杯2、直刀片、袖部から羨道付近にかけて須恵器縄1、高杯などが出土した。石室は長さ4.65m、幅1.9mの玄室に約2mの羨道を有し、玄室側壁の非対称、羨道が玄室主軸から「く」の字状に曲がっているとされた。



第3図 第1次調査出土器実測図 (S = 1/5) - 文獻8の図に追加 -

a. 遺構

第1次調査が石室内の調査であったことから、墳丘測量をはじめとして、墳丘状況・周濠の有無を確認するため、墳丘中腹部から裾部にかけて4本のトレンチ、石室内の精査および羨道部の確認などを対象とした。

[墳丘]

墳丘は灌木および笹の根に覆われ、上部などにいくつかの窪みはあるものの円墳状態をよく残している。西側の裾付近は切り通しの道があつて傾斜が急であり少し削られてはいるが、羨道付近を除きほぼ原形を止めているといえる。石室羨道前部は天井石がなく、右側壁1石1段、左側壁1石分（今回、2石目も存することを確認した）が現存するのみで、大きく口を開いて陥没した状態になっている。破損した左右側壁部は埋土で覆われ、とくに石室左側壁側・墳丘東南部は厚く埋積し、この埋土内から多量の須恵器壊片が出土した。

古墳は、ほぼ北東から南西方向にのびる尾根の北斜面に造営されており、東側はその鞍部側にあたり、北および西側にむかって高く盛土をして形成していた。

墳丘に沿って設定したトレンチ（幅0.65～1m）から、墳丘表面は笹などの根の周辺に腐食土が堆積し、それらを除去すると、その直下に墳丘土を確認できた。

第1トレンチ

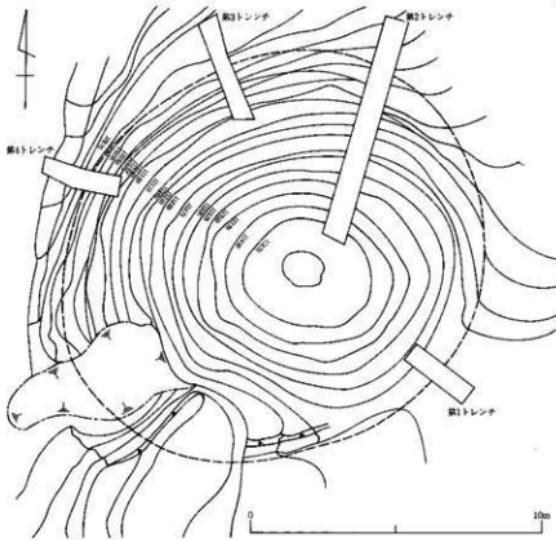
墳丘東南部、尾根側の裾付近に墳丘裾状況と周濠の有無確認のため設定した。深さは墳丘斜面で約5cm、裾部で約15cmの腐食土と埋土があり、須恵器小片が出土した。墳丘斜面は墳丘盛土のオリーブ黄色(5Y6/3)砂混じりシルト質土で、裾は地山の黄色(5Y7/6)砂混じりシルト質粘土。周濠などの人工的な窪みは見られなかった。

第2トレンチ（図版4）

墳丘北北東方向に墳丘状況および周濠の有無を確認するため設定した。腐食土を除去すると墳丘のオリーブ黄色砂混じりシルト質土面が現われ、3段の石列と3段の抜き取り跡を検出した。各石列は20～30cm大のものを墳丘円周に沿って、たて並べて貼り付けており、各段はやや平坦であった。裾は地山の黄色砂混じりシルト質粘土面で、周濠は見られなかった。

第3トレンチ（図版4）

墳丘北北西方向の中腹部から裾付近にかけて墳丘状況と周濠の有無確認のため設定した。腐食土を



第4図 第2次調査墳丘トレンチ位置図

除去すると墳丘のオリーブ黄色砂混じりシルト質土面が現われ、2段の石列と1段の抜き取り跡を検出した。各石列は30~20cm大のものを墳丘円周に沿って並べて貼り付けており、裾は地山の黄色砂混じりシルト質粘土面で、周濠は見られなかった。

第4トレンチ（図版4）

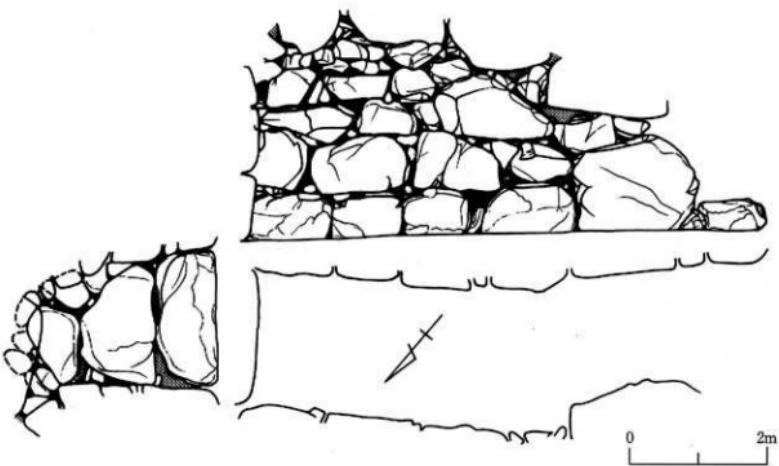
墳丘北西方向の裾付近から切通しを挟んでとくに周濠の有無確認のため設定した。腐食土を除去すると墳丘のオリーブ黄色砂混じりシルト質土面が現われ、1段の石列を検出した。裾から切通しにかけては地山の黄色砂混じりシルト質粘土面で、周濠は見られなかった。

墳丘は東北から南西に延びる尾根の北側斜面に形成されているため、尾根側の墳丘高は低い（1.75m）。各トレンチで1~3段の20~30cm大の列石を検出し、版築して形成した墳丘上面に3段以上の外護列石を廻らしていたと考えられる。周濠は伴わず、石室前面は既存物置などにより十分に確認することはできなかったが、墳丘裾はほほ知ることができ、墳丘は正円ではなく、石室長軸方向にやや長い、15m×13.5m、高さ3.5mの円墳であることが判明した。

〔石室〕

本石室は、玄室は奥壁3段、側壁4段からなり、右側壁がやや垂直に近く立ち上がっているのに対し、左側壁はゆるやかなカーブを描くように傾斜し、非対称になっている。さらに、玄室の天井は奥壁側に比して羨道側は低く下がり、底面敷石も大きさがまばらで敷き方も乱雑である。羨道は玄室長軸より東にゆるく「く」の字状に曲がっている。

第1次調査では、石室内から凝灰岩製組合せ石棺片とともに、須恵器杯蓋7、杯身11、脚付長頸瓶蓋1、瓶1、高杯1、土師器椀1と金銅製馬具片、馬具骨、鐵釘、直刀片などが出土した〔文献6等〕。また、個人蔵として須恵器杯身2〔第3図a・d、文献4等〕、探集資料として須恵器杯身1も報告されている〔第3図q、文献8〕。

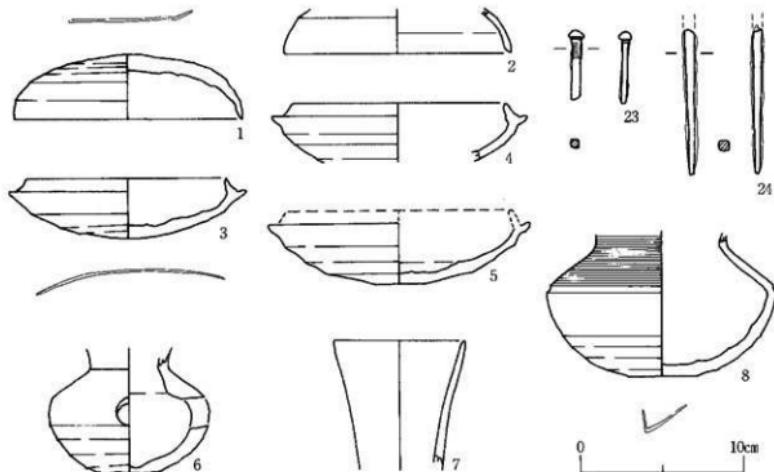


第5図 3号墳石室実測図

石室の玄室底面には5~40cm大の石群が敷石状に配されていたが、右袖付近には石はなく擾乱されていた。敷石面の清掃に伴い須恵器壺(10)、鉄釘(23・24)などが出土するとともに、擾乱部の埋土を除去したところ、ビー玉などとともに須恵器片と袖から漢道にわたる側壁付近から須恵器杯の蓋(1)・身(3)と竈(6)が出土した。また、漢道部の埋土を除去していくと、左側壁で最下部の2石、右側壁では抜き取り跡1箇所を確認した。しかし、漢道前面は後世の盛土と耕作作業に関わる位置の存在から、漢道端および前庭部は十分に確認することはできなかった。漢道部底面はかなり擾乱されていてほとんど旧状を保っていないかったが、埋土内からは須恵器杯蓋(2)、長頸壺(7)などの須恵器片とともに土師器片も出土し、とくに漢道左侧壁崩壊部の埋土内からは多量の須恵器壺片(9・11~18)などが出土した。

以前、石室には玄室に約2mの漢道を有するとされていたが、漢道左侧壁最下段1石(さらに1石あったが元位置を保ったものではない)と右側壁1石分の抜き取り跡を確認したことから、漢道は幅1.67~1.8m、高さ1.58m、長さ2.8m以上であったことを確認した。さらに、これまでの石室図は底面(敷石面)までのものではなく、玄室の測定は長さ4.90m、奥壁幅1.93m、高さ2.3~2.73mとなつた。

今回出土した須恵器はほとんど6世紀後半におさまるが、これまでの調査や採集された須恵器は6世紀後半から7世紀前半までのものであり(TK43~TK209とTK217)、木棺使用の鉄釘と破壊された凝灰岩製石棺の存在からも複数次の埋葬が知れる。ただ、杯身1点(第3図a)は6世紀前半に遡る。これは採集資料(個人蔵)で出土地の限定が難しく、石室状況からしても本古墳築造時とは異なるものと考えられる。玄室擾乱部分の埋土の除去に伴い、敷石断面を確認したところ、石室底面上に堆積した層の上部に位置し、敷石は石室築造当初のものではなく、追葬時のものであることを確認した。また、漢道左侧壁崩壊部の埋土内から出土した多量の須恵器壺片は墳丘裾部などにおける葬送祭祀に伴うものと思われる。



第6図 第2次調査出土遺物実測図(1)

b. 遺物(第6~8図1~24・図版9~11)

墳丘トレントからはほとんど出土しなかったが、石室の玄室内埋土、玄室袖付近、羨道埋土および墳丘東南部斜面埋土内から出土した。

須恵器、土師器、鉄釘がコンテナで約4箱出土した。出土量の約9割が須恵器である。土師器は図化できるものはなかった。遺物はすべて3号墳より出土した。

須恵器(第6~8図1~22・図版9~11)

杯蓋、杯身、甌、壺、高杯がある。高杯は図化できるものはなかった。田辺昭三氏編年『須恵器大成』1981年を参考にした(第3・4次調査も同じ)。

杯蓋(第6図1~2・図版9~11)

1・2は口縁端部が丸く終わる。内面と口縁部外面は回転ナデ調整する。天井頂部より約2/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。焼成は軟質である。1は完形である。天井部から口縁部にかけて丸みを持つ。ヘラケズリの方向は左回りである。天井部外面に幅0.2cm、長さ7.7cmの直線のヘラ記号を1本施す。口径は14.0cm、器高は4.0cmを測る。2は口縁部がやや外反する。口径は14.0cm、残存高は2.7cmを測る。1は羨道袖付近、2は羨道より出土した。

杯身(第6図3~5・図版9~11)

3・4は立ち上がり部が短く内傾し、口縁端部は丸く終わる。受部は外上方へ伸びる。内面と口縁部外面は回転ナデ調整する。底面中央部より約1/2~2/3の範囲を左回りの回転ヘラケズリ調整する。焼成は硬質である。3は完形である。底部外面に幅0.1cm、長さ11.7cmの直線のヘラ記号を1本施す。口径は12.2cm、器高は3.6cmを測る。4は口径が13.0cm、残存高は4.6cmを測る。5は立ち上がり部を欠損するが、3・4のように短く内傾すると考えられる。受部は外上方へ伸びる。内面は回転ナデ調整する。底面中央部より約1/4の範囲を回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。焼成は硬質である。口径は16.0cm、残存高は3.7cmを測る。3は羨道袖付近、4は玄室、5は羨道より出土した。

竈（第6図6・図版9）

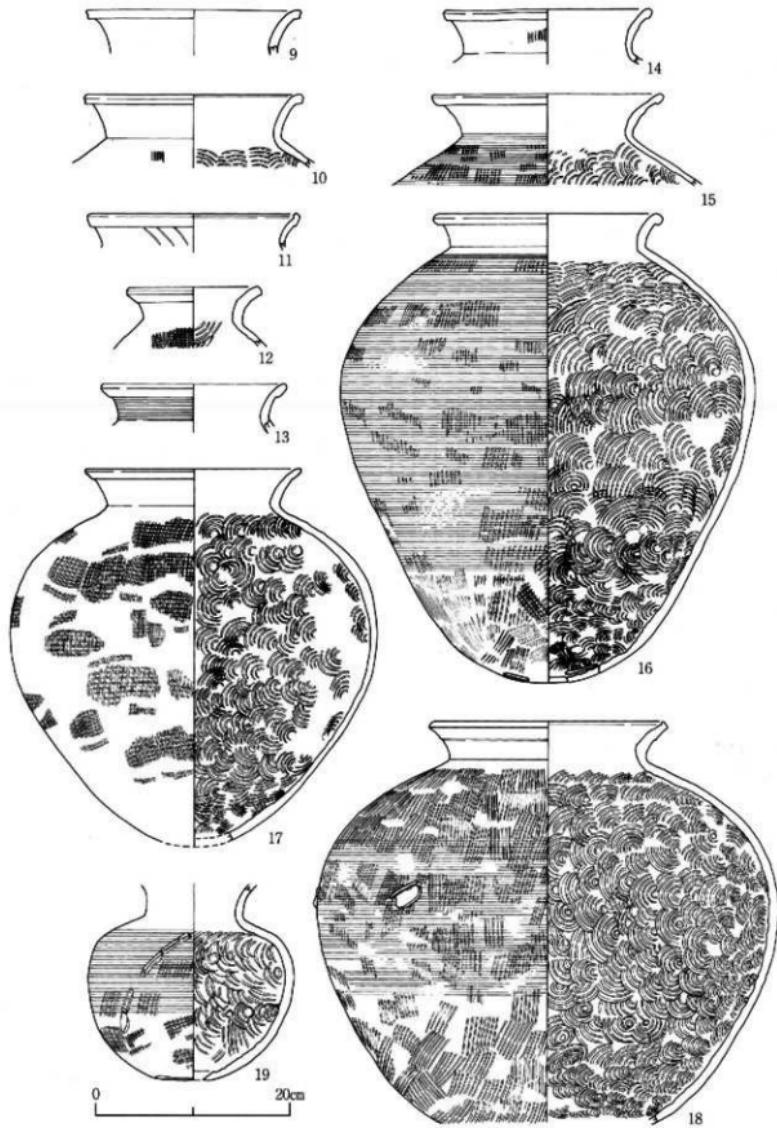
口頭部は欠損する。体部は小さく、球形を呈する。体部中ほどに径0.9cmの円孔を穿つ。内面と口縁部外面は回転ナデ調整する。底面中央部より約1/2の範囲を左回りの回転ヘラケズリ調整する。焼成は硬質である。体部最大径は9.9cm、残存高は7.7cmを測る。漢道袖付近より出土した。

竈（第6図7・8・図版9～11）

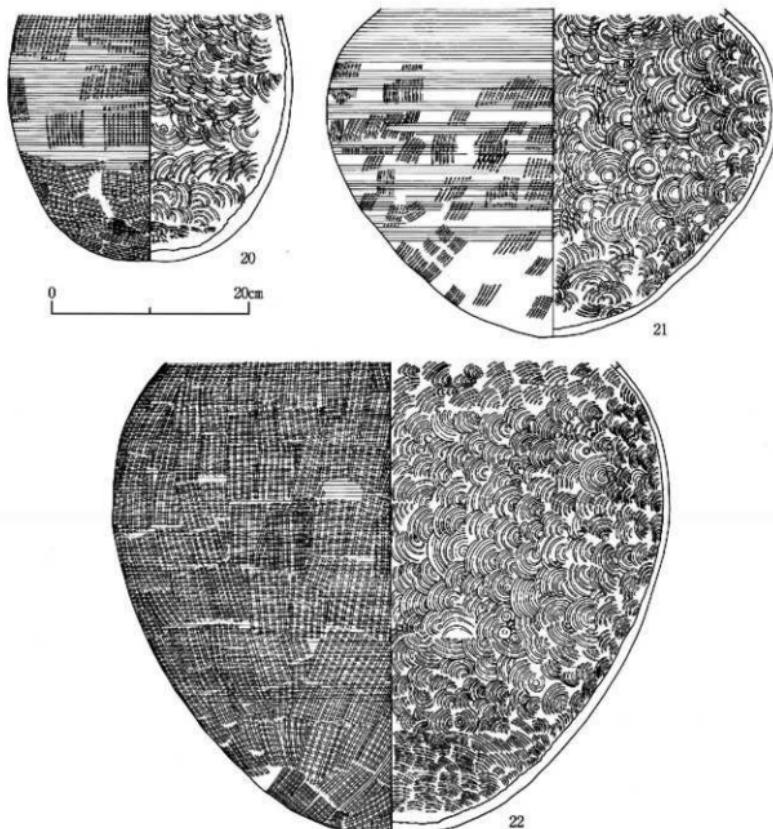
7は長頸壺である。口頭部は緩やかに外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。焼成は硬質である。口径は8.0cm、残存高は8.0cmを測る。8は長頸壺もしくは短頸壺と考えられる。口頭部は欠損する。体部は算盤の玉状を呈する。最大径の位置に沈線を1条施す。底部外面に幅0.15cmの「レ」の字状のヘラ記号を施す。内面は回転ナデ調整する。外面は体部上半をカキメ調整、下半は回転ナデ調整する。底部は右回りの回転ヘラケズリ調整する。焼成は軟質である。底径は4.0cm、体部最大径は14.0cm、残存高は8.9cmを測る。漢道より出土した。

竈（第7・8図9～22・図版9～11）

9～18は口縁部が残る。口縁端部の形態は、外側に折り返すもの（14～16）、折り返して凹面をなすもの（9・10）、内側に肥厚させ端面を持つもの（11・18）、外側に肥厚させるもの（12・13・17）などがある。9・10は内外面に暗黒色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が僅かに残る。9は風化が著しく調整法は不明である。口径は22.0cm、残存高は4.7cmを測る。10は口縁部内面を回転ナデ調整する。体部内面は同心円の当て具痕が残る。口縁部外面は風化が著しく調整法は不明である。体部はタタキ調整する。口径は22.0cm、残存高は7.6cmを測る。11は頭部に幅0.2cmの斜線状のヘラ記号を3本施す。内外面ともにヨコナデ調整する。口径は21.0cm、残存高は3.9cmを測る。12は口頭部を回転ナデ調整する。内面は同心円の当て具痕が残る。外面はタタキ調整する。口径は13.0cm、残存高は6.3cmを測る。13は口縁端部外面に暗黒色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が僅かに残る。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面は口縁端部を回転ナデ調整する。頭部はカキメ調整する。口径は18.6cm、残存高は5.0cmを測る。14は内面を回転ナデ調整する。外面はタタキ調整の後、ナデ調整する。口径は21.0cm、残存高は5.7cmを測る。15は口縁部内外面を回転ナデ調整する。体部内面は同心円の当て具痕が残る。外面はタタキ調整の後、カキメ調整する。口径は23.4cm、残存高は9.5cmを測る。16はほぼ完形である。底部に径3.2cmの円孔を穿つ。口頭部は回転ナデ調整する。内面は同心円の当て具痕が残る。外面は体部をタタキ調整の後、カキメ調整する。底部はタタキ調整する。口径は22.0cm、体部最大径は42.3cm、器高は48.5cmを測る。17・18は底部を欠損する。17は内面に同心円の当て具痕が残る。外面はタタキ調整する。全体的に風化が著しい。口径は22.0cm、体部最大径は30.0cm、残存高は38.4cmを測る。18は体部約2/3まで暗黒色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が残る。体部には焼成時に溶着した土器片が残る。口頭部は回転ナデ調整する。内面は同心円の当て具痕が残る。外面は体部をタタキ調整の後、カキメ調整する。底部はタタキ調整する。口径は23.4cm、体部最大径は47.2cm、残存高は47.2cmを測る。19は口縁部を欠損する。体部は球形を呈する。体部には焼成時に溶着した口縁端部片が残る。底部中央に径4.8cmの円孔を穿つ。内面は同心円の当て具痕が残る。外面は体部をタタキ調整の後、カキメ調整する。底部はタタキ調整する。残存高は20.1cmを測る。20～22は口頭部を欠損する。20は内面に同心円の当て具痕が残る。外面は体部をタタキ調整の後、カキメ調整する。底部はタタキ調整する。残存高は25.3cmを測る。21は内面に同心円の当て具痕が残る。外面は体部をタタキ調整の後、カキメ調整する。底部はタタキ調整する。体部最大径は45.8cm、残存高は38.9cmを測る。22は体部約2/3まで暗黒色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が残る。内面は同心



第7図 第2次調査出土遺物実測図（2）



第8図 第2次調査出土遺物実測図（3）

円の当て具痕が残る。外面は体部をタタキ調整の後、カキメ調整する。底部はタタキ調整する。体部最大径は56.4cm、残存高は48.7cmを測る。11・17は焼成が軟質、その他は硬質である。10は玄室、その他のは狭道より出土した。

鉄釘（第6図23・24・図版11）

断面は方形を呈する。23は先端部を欠損する。側面には木目が残る。残存長は4.5cm、断面長は0.5cmを測る。24は頭部を欠損する。木目は残らない。残存長は9.0cm、断面径は0.7cmを測る。玄室より出土した。

出土した須恵器の特徴から、遺物の時期は6世紀後半（TK43型式）に相当する。

3) 第3次調査

今回の区画整理地区の北側は旧菊水学園の敷地で、南側は山麓に沿ったほぼ南北方向の棚田を呈しており、旧学園境の高まり、棚田の斜面および平面に調査地を選定し、機械掘削および人力掘削によつて調査を行なつた。

a. 遺構

棚田面でのトレンチ6面8本（①～⑧トレンチ）と、菊水学園境界斜面地2箇所（斜面A・B）、棚田斜面地4箇所（斜面C～F）を調査した。

①トレンチ（0.5m×9m） 耕土および床土下は砂疊混じりのシルト質粘土層が1.4m以上づき（湧水）、南部にあった旧ため池の堆積層と考えられる。遺物出土せず。

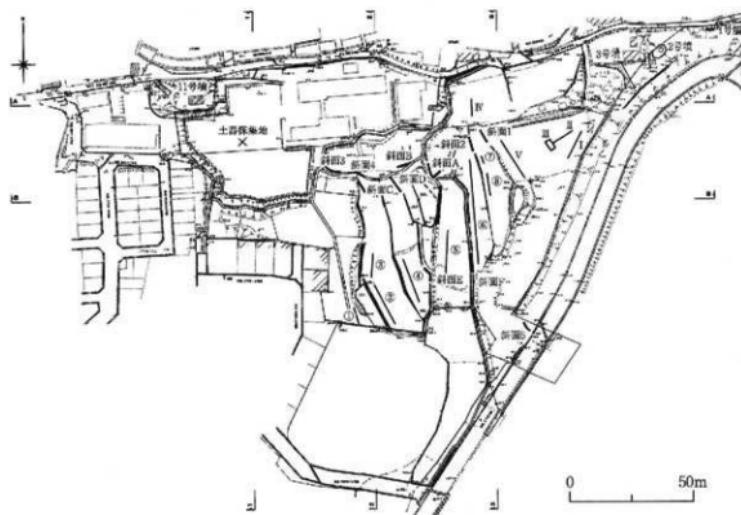
②トレンチ（0.5m×19.5m）・③トレンチ（0.5m×8.8m） ②トレンチは耕土および床土下（GL-25～35cm）で地山露呈。③トレンチは中央付近に若干の窪みはあったが耕土および床土下（GL-30～60cm）は地山が露呈。遺物出土せず。

④トレンチ（0.5m×17.5m） 耕土および床土下（GL-30～35cm）で地山露呈。遺物出土せず。

⑤トレンチ（0.5m×15m） 耕土および床土下（GL-20～40cm）で地山露呈。遺物出土せず。

⑥トレンチ（0.5m×43m） 北側で人頭大の石群が長さ1.5mに亘って埋没している部分と中央部で地山が約6mに亘って高くなっていたが、いずれの性格についても不明。遺物は出土せず。

⑦トレンチ（0.5m×3m）・⑧トレンチ（0.5m×9.4m） ⑦トレンチは耕土および床土下（GL-25～35cm）で地山露呈。⑧トレンチは北4.5mに人頭大からこぶし大の石群が埋没した状態を検出したが、遺物は出土せず、性格は不明。



第9図 第3・4次調査調査地等位置図 (1/2000)

斜面A 高く盛り上がり舌状形をなした場所の西から南斜面。上部約1.5mは廃棄自転車等を含む現在の盛土であったが、土師器楕（3）や須恵器の小・細片などをも包含していた。下部において石室東側壁2段分を検出し、埋土-灰オーリーブ色（5Y6/2）砂礫混じり土-内から須恵器片とともに石材と思われる凝灰岩片が出土した。東側壁は石室のどこの箇所になるかは不明であるが、南南西方向に開口する古墳=6号墳（図版5）。

斜面B 斜面A同様上部が盛り上がっていった場所の南斜面。露出していた石（元位置は保ったものではなかった）があった南斜面。上部約1.6mは学校建設時等における現在の盛土であった。下部は地山-明黄褐色（2.5Y7/6）砂混じりシルト質粘土-上面に0.5~0.6mの盛土-にい黄色（2.5Y6/4）砂礫混じり土があり、それを切り込んだ幅2.8m、深さ0.6~0.8mの落ち込みを検出した。埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）砂礫土で、須恵器壺片（1）などが出土した。落ち込みは袋状を呈し、両側は側壁の石の抜き取られた跡と考えられ、検出幅・両側壁行を考慮すると、葬道の一部と思われ、南西または南南西方向に開口する古墳=7号墳（図版5）。

斜面C 棚田南西から南斜面をL字形に5m設定。斜面を形成していた石垣等（現代）を除去。周辺部は荒廃し腐植土が上部0.3~0.5m蔵っていたが、下部は凸状に地山-明黄褐色（2.5Y7/6）砂混じりシルト質粘土-が盛り上がっていった。その間の暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じり土内からは須恵器、土師器（2）、瓦器の小・細片が出土し、古代後半~中世段階の整地土と考えられる。

斜面D 棚田南西斜面に4m設定。斜面を形成していた石垣等（現代）を除去し、断面を見ると、耕土および床土下に暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じり土が0.2~0.3mに亘ってあり（下部は地山）、須恵器・土師器の細片が出土。

斜面E 大石が露出していた溜池および棚田間の南西から西斜面に4m設定。腐食土を除去したり、その中から須恵器片が出土したが、下部は磁器片等を包含する溜池形成時の堤層-暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じり粘質土であり、上記の大石は堤の護岸用と判明した。

斜面F 大石が4個点在する棚田東南部端の崖西斜面に6m設定。崖頂の腐食土を除去すると地山が露呈。大石群も元位置を保ったものではなく現代（登山道形成時）に落下してきたものと判明。

今回、2基の古墳（6・7号墳）を確認した。

b. 遺物（第10図1~3・図版11）

須恵器、土師器、瓦器が出土した。細片が多く、図化できたのは3点である。瓦器は図化できるものはなかった。

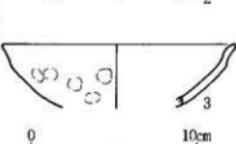
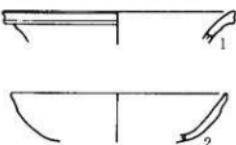
須恵器（第10図1・図版11）

壺である。口縁部は外上方へ伸びる。口縁部下方に1条の突線を巡らせる。口縁端部は外側へ折り返して凹面をなす。内外面は回転ナデ調整する。焼成は硬質である。口径14.0cm、残存高2.0cmを測る。6世紀後半（TK43型式）のものである。斜面Bより出土した。

土師器（第10図2・3・図版11）

2は杯である。口縁部は内湾しながら外上方へ伸びる。口縁端部は内側へやや肥厚し、丸く終わる。内外面はナデ調整する。口径は13.0cm、残存高は3.0cmを測る。3は楕である。口縁部はやや外反する。

口縁端部は尖り気味に終わる。内面はナデ調整する。外表面は口縁部をナデ調整する。体部は指ササエ調整する。口径は14.0cm、残存高は4.0cmを測る。10世紀のものである。2は斜面C、3は斜面Aより出土した。



0 10cm

4) 第4次調査

旧学園と棚田境界の高まり、棚田・畑の斜面および平面などで、第3次調査において確認できなかつた場所を機械掘削および人力掘削によって調査を実施した。

a. 遺構

棚田面でトレンチ4本（I～III・Vトレンチ）、棚田斜面地3箇所（斜面1・2・5）と旧学園境界斜面地2箇所（斜面3・4）、旧学園内でトレンチ1本（IVトレンチ）を調査した。

Iトレンチ（1m×11m）、IIトレンチ（1m×9m）、IIIトレンチ（2m×4m） 3トレンチ設定地は、3号墳南西部の鞍部であるが、現状は畑として使用され、フラットになっていた。Iトレンチは、耕作土の直下は地山塊・石・礫を含む整地土および地山で、遺物・遺構とも確認できなかつた。IIトレンチでは南西部が大きく搅乱されていることを確認したことから、直行する形でIIIトレンチを設け、搅乱部分を中心に機械掘削したところ、北東部が大きく搅乱土で埋もれていたが、石室側壁の2石、石室底部、石室内堆積土・埋土の一部と南西側で古墳に伴う版築土層を検出した。2石間は2mを測ることから、検出主体部は玄室の一部と思われ、南西方向に開口する古墳であることを確認した=5号墳（図版7）。

Vトレンチ（1m×18m） 耕作土直下は地山塊・石・礫を含む整地土および地山で、整地土内から貿易磁器片（5）、須恵器壺片（2・4）などが出土したが、明確な遺構はなかつた。

IVトレンチ（1m×6m） 学園内東部の高まり部に設定し、深さ1.5mまで確認した。すべて建設時の整地に伴う盛土であった。

斜面1（幅9m）、斜面2（幅5.5m）ともに棚田南西面に設定したが、棚田形成時の石垣・埋土除去面はいずれも地山が露呈し、遺物・遺構とも確認されなかつた。

斜面3（幅10m） 学園校舎の南部の高まりの西端部南面に設定。上部は建設時における盛土であつたが、下部で落した石と石室両側壁石の1石ずつ、閉塞石と思われる石群、石室底面および須恵器片などの遺物を検出した。両側壁間は1.27mを測ることから漢道部の可能性があり、開口は南西方向となる=9号墳（図版7）。

斜面4（幅10m） 斜面3の東側に設定。上部は建設時における盛土であつたが、下部で石室側壁石の1石、石室底面および須恵器壺片（1・3）、鉄釘（6）などの遺物を検出した。検出した石が石室のどこの箇所になるかは不明であるが、南南西に開口する古墳と考えられる=8号墳（図版8）。

斜面5（幅3m） 石塊が点在し、「東大阪市の古墳」などで4号墳となっている場所。石塊群下から現在の廢材が出土するなど、古墳でないことを確認した。この石塊群は登山道東部上に存する古墳（4号墳）の石室に使用されていた石材である可能性が考えられるが不明である。石塊群および廢材包含土下は黄色（5Y7/6）砂礫混じり粘土質シルトで、この層上面にサヌカイト塊および同剥片を検出した（図版8・12）。これらには風化面を有するものがあるとともに、サヌカイト塊には人為的に手が加えられており=石器材確保のための敲打による剥離痕が見られ（石器原材）、その剥離状況から弥生時代の手法であると考えられる（松田順一郎氏教示）。これは南接する岩滝山遺跡で確認されている弥生時代の高地性集落との関係が想起できる。

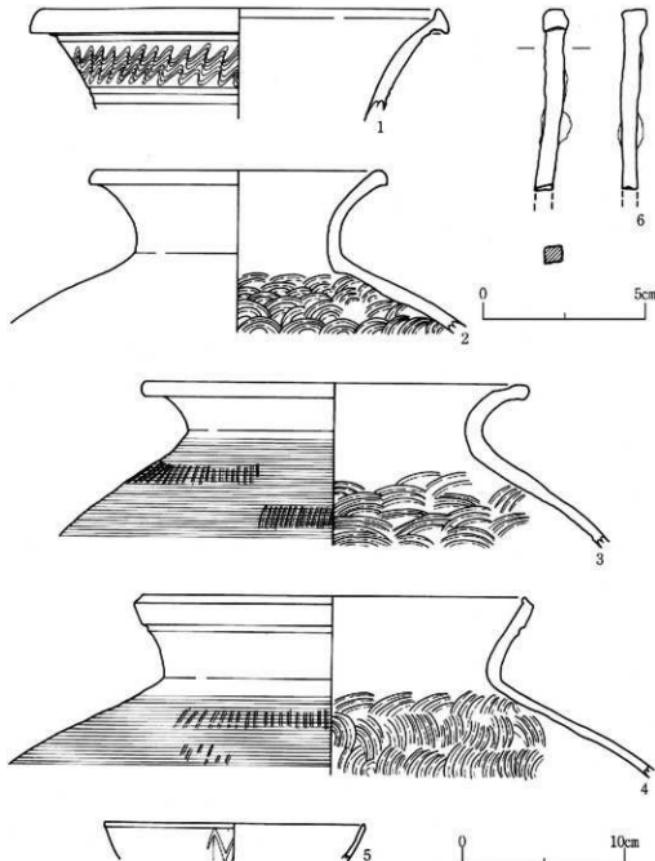
今回の調査では、古墳3基（5・8・9号墳）、弥生時代の石器石材の点在地および中世の遺物を確認することができた。8・9号墳は第3次調査の6、7号墳を含め、それぞれ一部の確認であるが、極めて密集度が高いことから、2・3号墳に比して小規模なものと思われる。ただ、当該地が学園建設時などにおける盛土であることから、破壊された石室石材の散乱・集積されたものもある可能性も考えられる。

b. 遺物(第
11図 1 ~ 6 ·
図版12)

須恵器、土
師器、貿易陶
磁器、鉄釘、
石器原材が出土
した。図化でき
たのは6点である。
土師器は図化で
きるものはな
かなかった。石器
原材は図版の
み掲載する。
貿易陶磁器は
『概説 中世
の土器・陶磁
器』1995年を
参考にした。

須恵器(第
11図 1 ~ 4 ·
図版12)

壺である。
口縁部から体
部が残る。1
は口縁部直下
と体部に2本
ずつ沈線を巡
らし、その間



第11図 第4次調査出土遺物実測図

に波状文(原体数23本)を施す。口縁端部は上下へ拡張し、丸みを帯びた面を持つ。内面は回転ナデ調整する。口径は24.2cm、残存高は7.0cmを測る。2は口縁端部を外側へ肥厚させる。内外面に暗黒色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が僅かに残る。内面は口縁部を回転ナデ調整する。体部は同心円の當て具痕が残る。外面は風化が著しく調整法は不明である。口径は17.5cm、残存高は10.0cmを測る。3は口縁端部を外側へ肥厚させる。口縁部は回転ナデ調整する。体部内面は同心円の當て具痕が残る。外面はタタキ調整の後、カキメ調整する。口径は23.3cm、残存高は10.0cmを測る。4は口縁端部を内側へ肥厚させ、端面を持つ。口縁部は回転ナデ調整する。体部内面は同心円の當て具痕が残る。外面はタタキ調整の後、カキメ調整する。口径は23.5cm、残存高は11.0cmを測る。焼成はすべて硬質である。6世紀後半(TK43型式)のものである。1・3は8号墳、2・4はVトレンチより出土した。

貿易陶磁器（第11図5・岡版12）

龍泉窯系青磁の椀である。口縁部が残る。0.5~1.0mmの釉を施す。外面は鎌蓮弁文を施す。口径は16.0cm、残存高は2.3cmを測る。13世紀前半のものである。Vトレンチより出土した。

鉄釘（第11図6・岡版12）

断面は方形を呈する。先端部を欠損する。木目は残らない。残存長は5.6cm、断面長は0.5cmを測る。8号墳より出土した。

石器原材（岡版12）

サヌカイトの原石と剥片である。大小あわせて13点あり、そのうちの10点を岡版に載せた。最大の原石は、残存長は15.2cm、残存幅は9.1cm、厚さ7.1cmを測る。斜面5より出土した。

5)まとめ

今回の調査は、3号墳の保全および古墳を中心とする遺跡状況の確認を主体としたものであり、今後、当該地における区画整理事業が実施されることにより、本格的な発掘調査が行なわれることが考えられ、詳細についてはその報告にゆだねることにしたい。

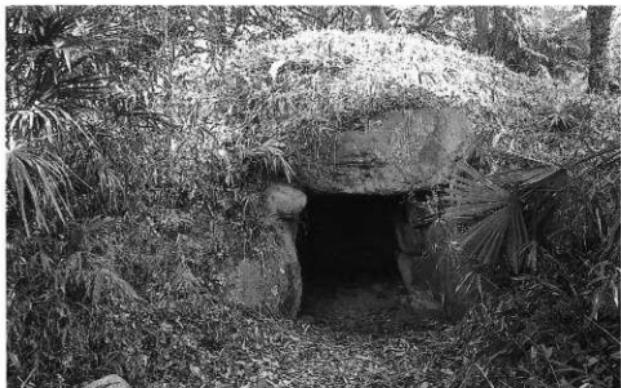
3号墳は13.5m×15m、高さ3.5mの円墳で、主体部は玄室の長さ4.90m、奥壁幅1.93m、高さ2.30~2.73m、後道の幅1.67~1.80m、高さ1.58m、長さ2.80m以上の横穴式石室で、6世紀後半に築造され、7世紀前半まで追葬が行なわれていたことを再確認できた。また、墓前祭祀に使用されたと思われる須恵器羣が出土した。

これまで五里山古墳群は13基の古墳の存在が知られている。旧菊水学園地周辺について、校舎渡り廊下付近の1基（10号墳）以外は、4基の存在が指摘・想定され（文献5・6・8など）、グランド整備時における須恵器の出土報告（文献7）がなされているだけであった。前述したように、瀬和夫氏の分布調査において具体的な位置が教示され、今回、ほぼその示唆に沿う形で4基（6~9号墳）の古墳を確認し、東部に1基（5号墳）を検出することができ、ほぼ既出の数に合う形となった。4号墳はらくらく登山道西沿にある石塊群を認知していたが、これらの石塊群は道路建設時に周辺に散乱していた石が集められたもので、本来のものは東上部に存在していることをも確認した。

当該地は数段の棚田（畑）状をなしているが、その形成時期は不明である。ただ、点数も少なく小・細片ではあるが瓦器・貿易磁器などが出土し、造構は確認できなかったが、鎌倉時代を中心とする時期になんらかの開発がなされた可能性は考えられる。また、東南部には弥生時代の石器材＝サヌカイトの散布を確認した。

【文献】

1. 「枚岡市史」第1巻 本編 枚岡市役所 1967、「古墳時代の枚岡」
2. 「枚岡市史」第3巻 史料編1 枚岡市役所 1966、「考古資料 古墳時代」
3. 「河内四條史」第1冊 本編 四条史編さん委員会 1981、「古代の四条」
4. 「河内四條史」第2冊 史料編I 四条史編さん委員会 1977、「考古資料 古墳時代」
5. 「東大阪遺跡ガイド」 東大阪市遺跡保護調査会 1978
6. 「わが街再発見 東大阪市の古墳」 東大阪市教育委員会 1996、改訂版 2001
7. 木建正宏「菊水学園探査の古墳時代遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.5.No.4 財團法人東大阪市文化財協会 1992
8. 秋山浩三・池谷梓「五里山古墳群・花草山古墳群と探査資料の検討－生駒山西麓部における群集墳の形成過程等をめぐって－」『大阪府文化財研究』第19号 財團法人大阪府文化財調査研究センター 2000



3号墳調査前状況（南西より）



3号墳石室羨道東壁崩壊部分および墳丘南東部埋土状況（北東より）



3号墳石室羨道東壁残存および墳丘南東部埋土掘削状況（北東より）



3号墳石室状況（南西より）

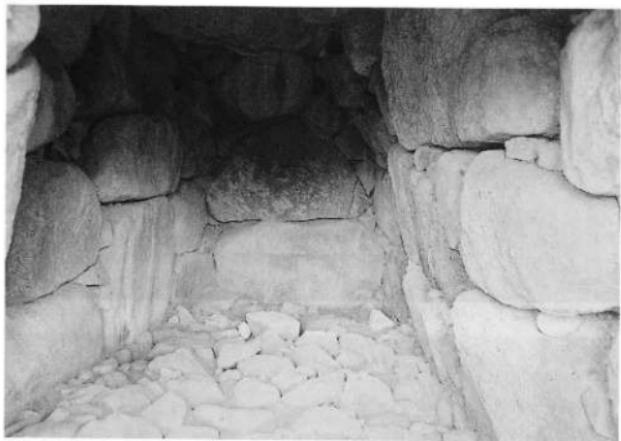


3号墳石室内床断面状況（南西より）



3号墳石室内遺物出土状況（東南より）

図版3
五里山古墳群第2次調査
遺構



3号墳玄室状況（南西より）



3号墳石室床面状況（南西より）



3号墳墳丘南東部埋土内遺物出土状況（南東より）

図版 4
五里山古墳群第2次調査
遺構



3号墳墳丘第2トレンチ完掘状況（北北東より）



3号墳墳丘第3トレンチ完掘状況（北西より）



3号墳墳丘第4トレンチ完掘状況（西より）



調査地調査前状況（東より）



6号墳石室側面（一部）検出状況（西より）



7号墳墳丘および石室掘形検出状況（南南東より）



⑥トレンチ完掘状況（北より）



②トレンチ完掘状況（北東より）



斜面F完掘状況（西より）

図版7
五里山古墳群第4次調査
遺構



斜面1完掘状況（西南西より）



5号墳検出状況（南西より）



9号墳検出状況（南西より）

図版 8
五里山古墳群第4次調査

遺構



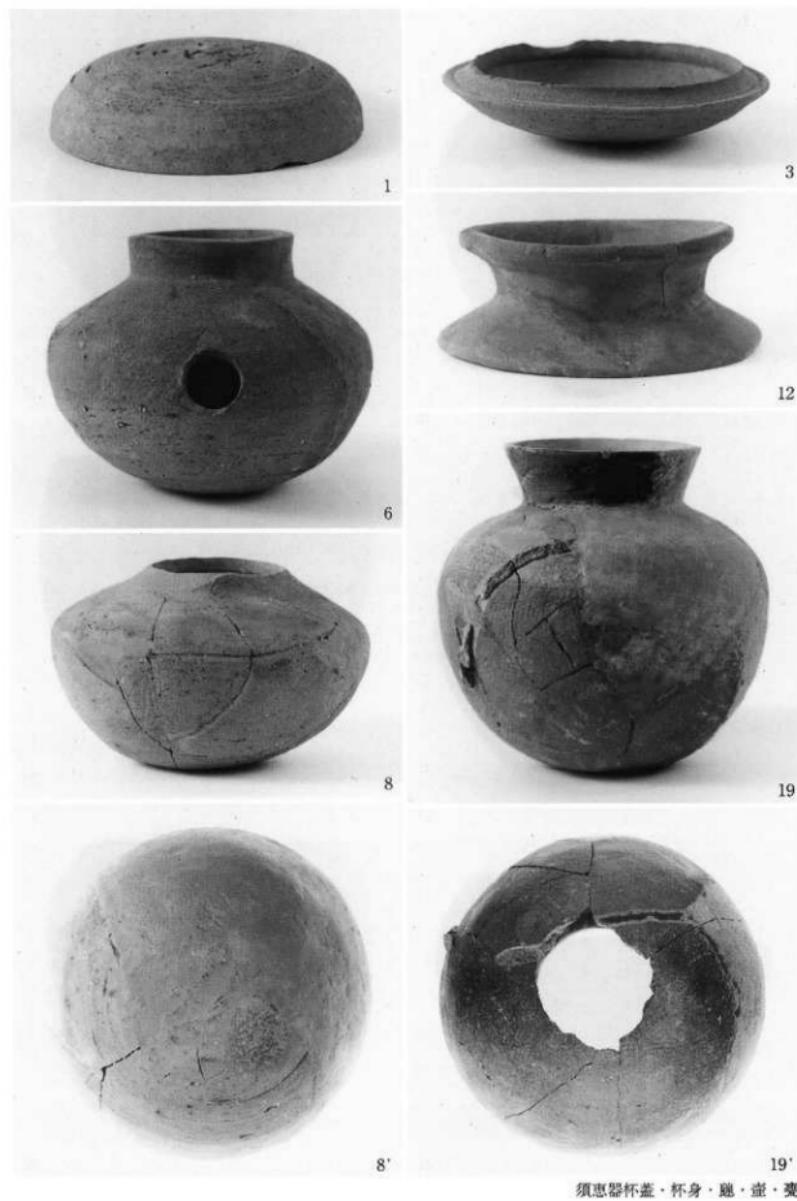
8号墳西部検出状況（南南西より）



8号墳東部検出状況（東南東より）



斜面5完掘状況（南西より）



須惠器杯蓋・杯身・甌・壺・甕



16



17



18



20



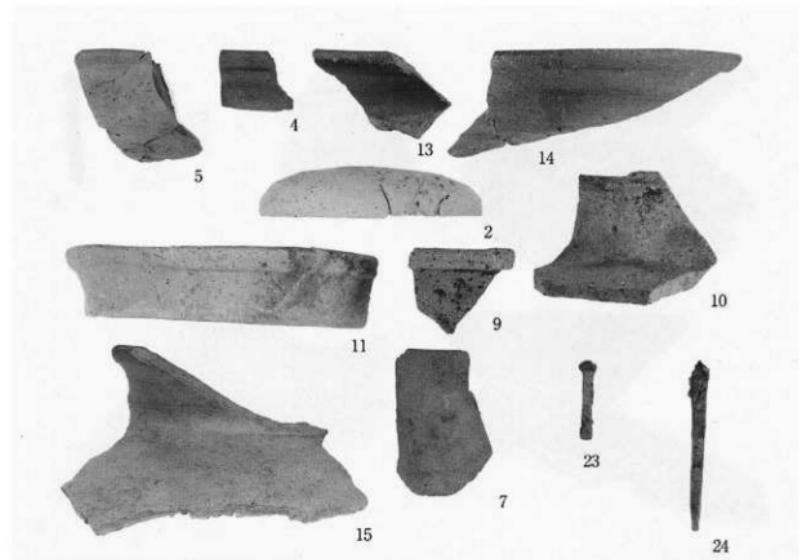
21



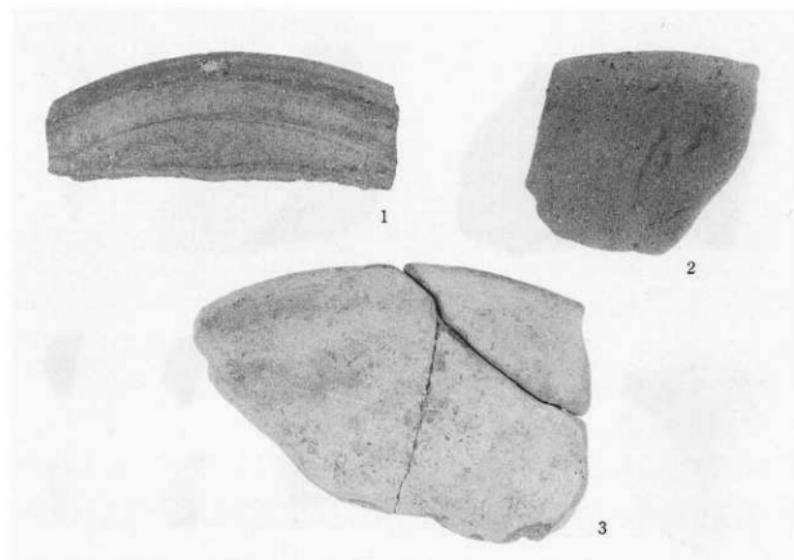
22

須惠器壺

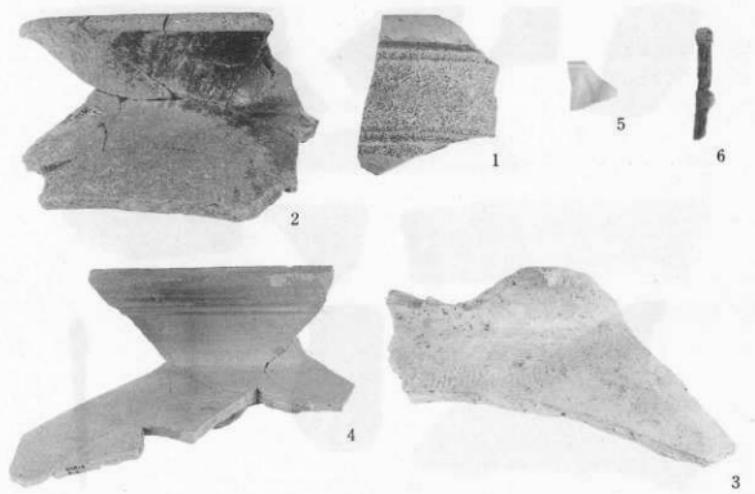
圖版 11
五里山古墳群第2・3次調査
遺物



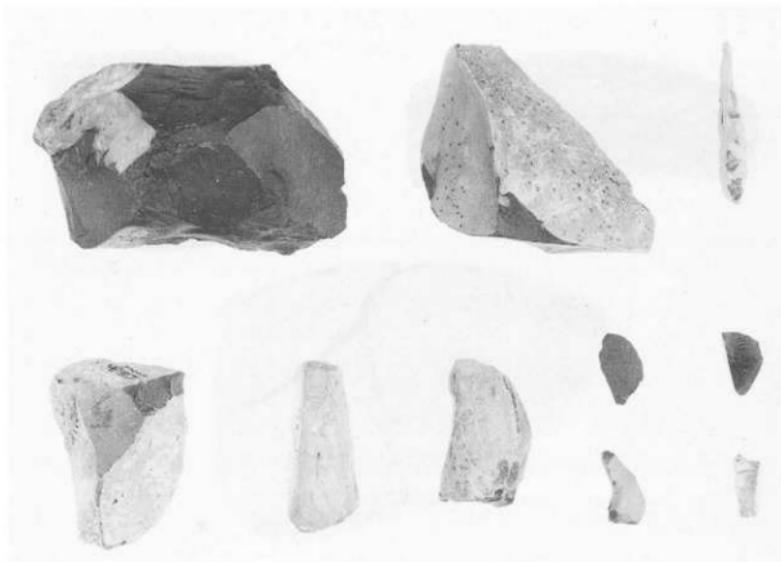
1. 穀器器蓋・杯身・底・沿、鐵釘



2. 須惠器蓋、土師器杯・碗



1. 須恵器壺、青磁椀、鉄釘



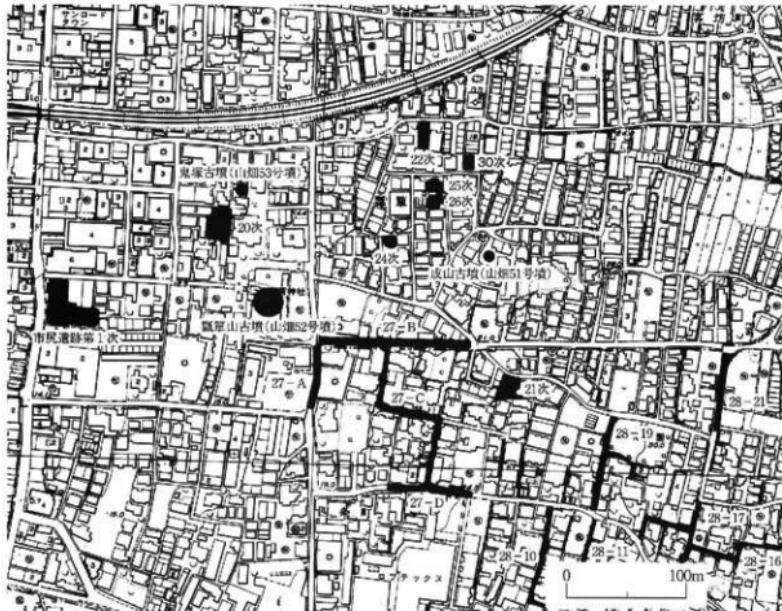
2. 石器原石 サヌカイト

第5章 山畠古墳群第30次発掘調査

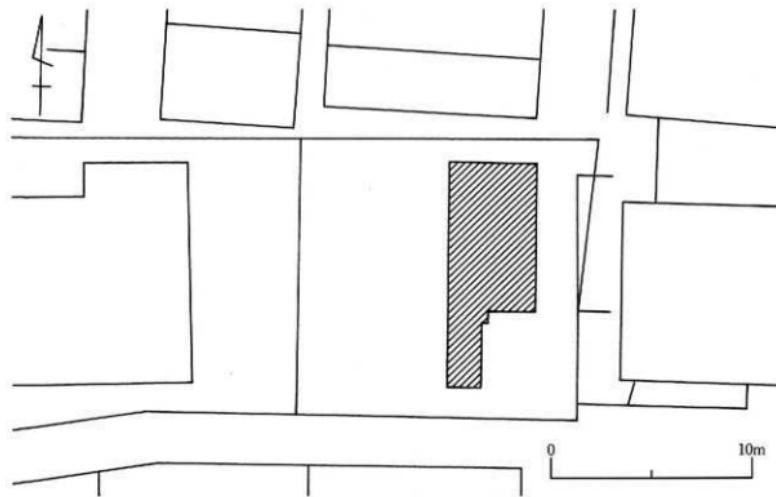
1)はじめに

山畠古墳群は、瓢箪山町・上四条町・客坊町に広がる6世紀前半から7世紀初頭にかけての群集墳で、その中に弥生時代後期の山畠遺跡を内在している。これまで68基の古墳が確認されているが、後世、とくに近代以降の開墾などによりその多くは破壊・欠損し、現存しているのは半数以下の約30基にすぎない。古墳の多くは径10~15mの円墳であるが、中には瓢箪山古墳などの双円墳や方墳、上円下方墳もみられる。蓋形・人物などの形象埴輪や円筒埴輪の出土しているものもあるが、それほど多くない。墳丘上などに小堅穴式石室・羽釜棺を伴うものも知られているが、主体部の大半は横穴式石室である。石室内には組合式石棺もあったが、多くは複数の木棺が納められていたようである。遺物は須恵器・土師器などの土器類をはじめ、大刀・鉄鎌・刀子・工具などの鉄製品、耳環や石製・ガラス製の玉などの装身具類があり、特に杏葉・轡など馬具類の出土割合の多いことが注目されている。郷土博物館の西方部一帯からは後期旧石器時代のナイフ型石器、縄文時代早期の押型土器とともに弥生時代後期の堅穴住居や弥生土器・石器が検出されており、高地性集落と考えられている。

平成18年12月21日付けで、瓢箪山町58-6番地における個人住宅建設に伴う届出があった。当該地は成山古墳に近接することなどから、平成19年1月19日に確認調査を実施し、須恵器と溝状遺構を検出した。この結果に基づき、代理者を通して協議を行ない、埋蔵文化財に影響する範囲を対象として2月5日から2月8日までの間、第30次調査として発掘調査を実施した。



第1図 調査位置図



第2図 調査トレンチ位置図

予定建物は逆ベタ基礎で、ベタ部分は確認調査で検出した遺物包含層および遺構に抵触しないが、柱廻り補強部分が影響を及ぼした。西と北側の柱廻りは隣接地と近接することから、北側は敷地境界より1m控えるとともに西側部分については調査範囲から除外することになった。本来、東側の調査対象域は部分的となるが、調査深度が浅く、除外した西・北側の影響範囲をも考慮し、調査範囲は東西4.5m、南北11.6mの鉤状域、約41m²とした。

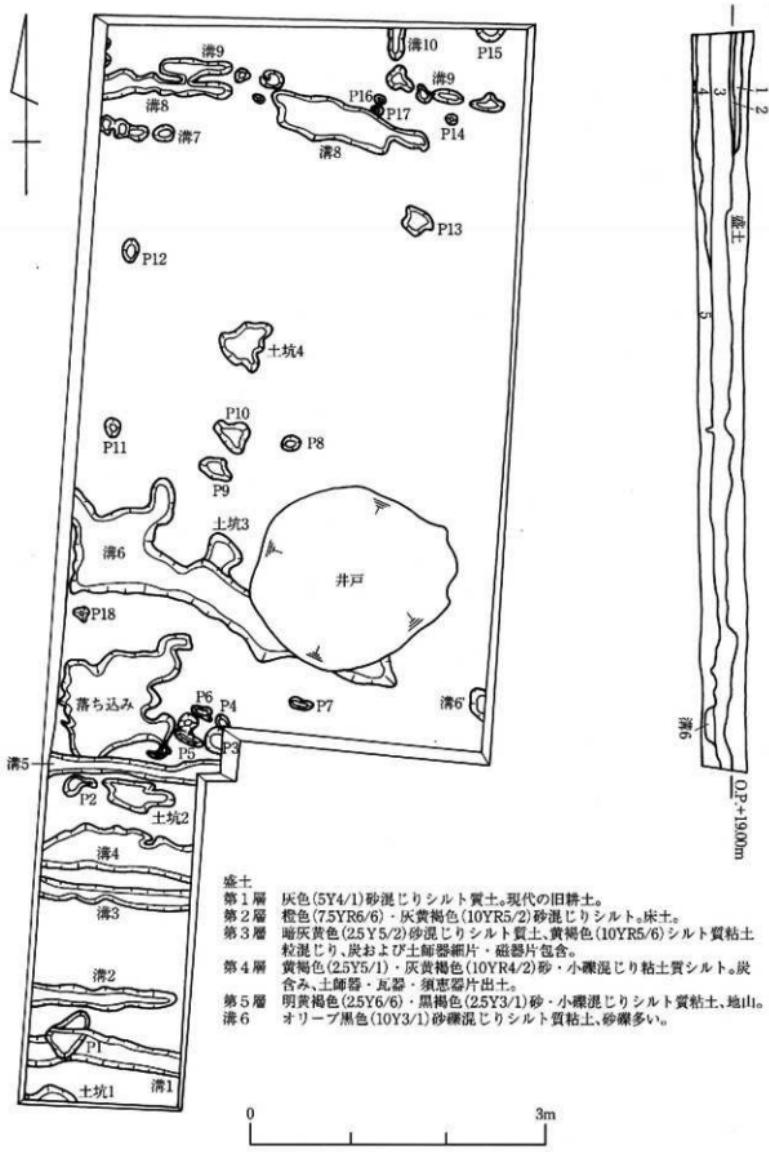
層位は第3図参照（図版2）。

2) 遺構（第3図 図版1・2）

調査は、中央東よりあった現代の井戸を残し、盛土および第1層の耕土、第2層の床上、第3層近世以降の整地土および現代の搅乱土坑の大半を機械掘削と人力掘削によって除去し、第4層以下は人力掘削により遺物の検出および遺構の検出を行なった。遺構としては第5層上面において溝、ビット、土坑、落ち込みを検出した。第3・4層からは須恵器、埴輪（1）、土師器（3など）、瓦器、黒色土器、陶磁器片などが出土したが、量はさほど多くなかった。以下、第5層上面遺構を記す。

溝は耕作に伴うもので、南北2群（北群・南群）に分かれる。北群（溝7～9）は、第4層下で溝状および掘削削跡からなり、幅4～30cm、深さ2～5cmを測る。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトで土師器・瓦器の小・細片がごく少量出土した。中世前半。南群（溝1～6）は、第3層下で、溝1～5は幅11～32cm、深さ2～5cmを測り、埋土は灰色（5Y5/1）粘土質シルト。溝6は幅28～80cm、深さ5～12cmを測り、埋土はオリーブ黒色（10Y3/1）砂疊混じりシルト質粘土。土師器の小・細片がごく少量出土した。近世前半以降。

ビットは18個（P1～18）、土坑は4基（土坑1～4）検出し、P1は溝1に南上部が削平されていて、幅50×35cm、深さ7cmを測り、黒褐色（7.5YR3/1）砂混じりシルト質粘土で、須恵器杯蓋（2）と須恵器の小・細片が出土、飛鳥時代。P3・8・11～15は深さ4～8cmを測り、埋土は黒褐色



第3図 第5層上面遺構平面・東壁断面実測図

(7.5YR3/1) 砂混じりシルト質粘土。土坑4・P16は深さ6~10cmを測り、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂混じりシルト質粘土。P2・土坑2は不整形で、深さ3~6cm、埋土は灰色(7.5Y5/1)砂混じり粘土質シルト。P4~8・10は深さ4~10cmを測り、埋土は灰色(5Y4/1)砂疊混じりシルト質粘土。ピット・土坑の性格は不明。

落ち込みは不整形で底面が不正の凹凸をなし、埋土は灰色(10Y5/1)砂疊混じり粘土質シルト。第3層が整地層で、地山(第5層)の塊・粒を包含しており、近世の整地時に掘り起こされた跡と考えられる。

3) 遺物(第4・5図1~3)

埴輪、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器が出土した。図化できたのは3点である。黒色土器、瓦器は図化できるものがなかった。須恵器は田辺昭三氏編年『須恵器大成』1981年を参考にした。

1は円筒埴輪である。低く平らなタガを持つ。タガの上部に透かし穴を穿つ。内外面はナデ調整する。残存高は5.0cmを測る。古墳時代のものである。4層上面より出土した。

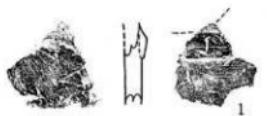
2は須恵器の杯蓋である。口縁部内面に短いかえりを持つ。

口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。焼成は硬質である。口径は16.0cm、残存高は1.5cmを測る。7世紀前半~中頃(TK217~TK46型式)のものである。土坑1より出土した。

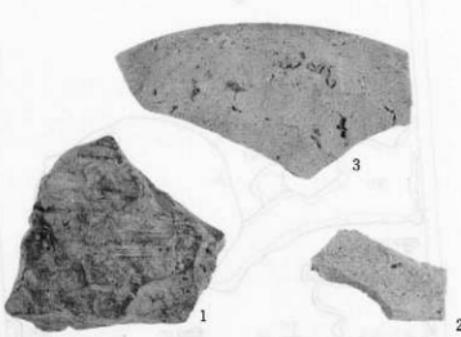
3は土師器の椀である。口縁端部はやや尖り気味に終わる。内面はナデ調整する。外面は口縁部をヨコナデ調整する。体部は指オサエ調整する。口径は13.0cm、残存高は3.3cmを測る。10世紀のものである。4層上面より出土した。

4)まとめ

今回、古代から近世にわたる整地・耕作状況を確認することができた。北西部の第21次調査地などにおいて10~15世紀にわたる土器が出土しており、本遺跡は古墳群として周知されているが、平安時代以降も人跡の絶えることがなかったことを示している。今回は耕作跡のみであったが、周辺の調査状況から(第17次等)集落の存在も十分うかがえる。また、1点ではあるが埴輪片が出土し、近辺に埴輪を伴う古墳が存したことを示唆している。本古墳群内での近年の調査において埴輪の出土が報告されており(第21、23、24、25、26次調査など)、これまで埴輪を伴う古墳は少ないとされてきたが、平野部を中心に埴輪をもつ古墳が複数基存在していたことが明らかとなった。



第4図 出土遺物実測図



第5図 出土遺物写真



遺構検出状況(東より)



溝6断面(西より)



遺構完掘状況(北より)

図版2
山畑古墳群第30次調査
遺構



遺構完掘状況（部分）（南より）



土坑4断面（東より）



東壁（部分）（西より）

第6章 繩手遺跡第20次調査

1)はじめに

繩手遺跡は、東大阪市南四条町を中心に末広町・六万寺町3丁目にかけて広がる、縄文時代中期から江戸時代に及ぶ集落跡である。遺跡は生駒山地西麓部で発達する扇状地上、標高15~22mに立地している。

本遺跡は、とくに縄文時代後期前半の大集落として学史的に著名であり、過去の調査で該期の住居址・炉址・石組構造・土坑墓・埋甕などが検出されている。出土遺物には、縄文土器のほか、石鎌・石匙・石斧・石錘・磨石・石皿などの石器が多く見られる。これらの遺物から、縄文時代後期に河内湾を前面に控え、活発な生業活動を展開していたことが窺われる。いっぽう、遺跡の範囲内には径30mを測る円墳のえの木塚古墳が所在し、主体部は未確認であるものの、該期の土師器・須恵器のほか鏡付円筒埴輪や子持勾玉が見つかっている。

平成18年12月、東大阪市南四条町780~2番地の一部において、分譲住宅の建設会社から宅地造成工事（位置指定道路下の排水管埋設工事）に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。申請地は縄文土器が多い量に出土した繩手遺跡第18次調査地の北に隣接した箇所にあたることから、事前の確認調査が必要な旨、建設会社に通知した。確認調査は平成18年12月12日に実施した（第2図のNo.1~No.4の4箇所）。調査の結果、後述のように、遺存状態の良好な遺物包含層を検出した。排水管埋設工事については掘削幅が1m以内であったため立会調査を実施した。いっぽう、遺物包含層の層準が現



第1図 調査位置図



第2図 調査箇所位置図

地表面から浅いため、分譲住宅の建設工事が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが懸念され、その取扱いについて協議を重ねた。結果、大阪府の基準に合致した基礎設計が行われることになった。

同じく平成18年12月に、上記と同会社から東隣地（南四条町780番地の12～15）において、分譲住宅の建設工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当初は表層地盤改良を予定されていたことから、事前の確認調査を実施することになった。確認調査は平成19年2月28日に実施した（第2図のNo.5・6の2箇所）。同町780番地の2と同様の遺物包含層が検出されたため、その取扱いをめぐつて協議を重ねた。協議の結果、前記と同じく大阪府の基準に合致した基礎設計に変更された。

以上のように、今回の届出工事では本発掘調査は実施していないが、第18次調査と関連する調査成果が得られたため、ここに報告する。なお、発掘の届出書が2通に及ぶため、遺構・遺物の説明にあたっては、平成18年12月12日に実施した調査を第20-1次、平成19年2月28日に実施した調査を第20-2次と便宜的に区別して記述することがある。

2) 調査の概要

① 第20-1次調査

まず、試掘坑ごとの層位をみておきたい。煩雑さを避けるため、盛土層は省略した。

[No.1] 第1層 オリーブ黒色（5Y3/2）中疊混じり砂質シルト。

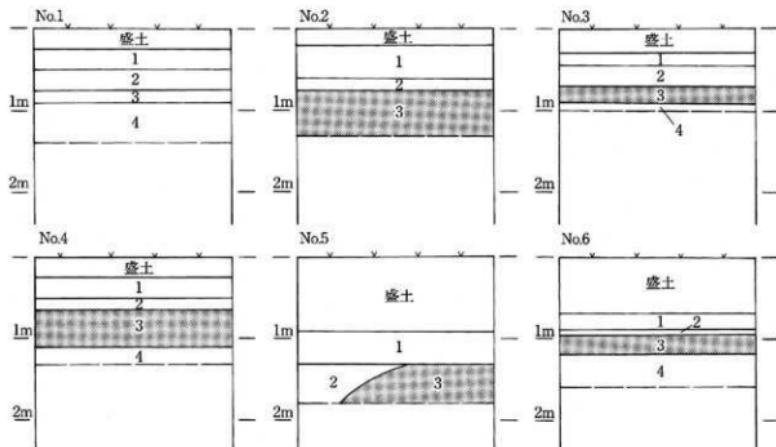
第2層 オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト。 第3層 オリーブ黒色（7.5Y3/1）砂。

第4層 灰色（N4/0）粘土。

No.1では遺物包含層は検出されず、遺物の出土がなかった。

[No.2] 第1層 オリーブ黒色（5Y3/1）砂質シルト。 第2層 オリーブ黒色（7.5Y3/2）砂。

第3層 暗灰色（N3/0）粘土。古墳時代の遺物包含層。蓋形埴輪が出土。混入品として縄文土器



No.1 1 オリーブ黒色(5Y3/2)中疊混じり砂質シルト
2 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト
3 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂
4 暗灰色(N3/0)粘土。
No.2 1 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト
2 オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂
3 暗灰色(N3/0)粘土。
No.3 1 オリーブ黒色(5Y3/1)中疊混じり砂質シルト
2 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト
3 暗灰色(N3/0)細疊混じり粘土
4 暗灰色(N3/0)粘土。

No.4 1 オリーブ黒色(5Y3/2)中疊混じり砂質シルト
2 オリーブ黒色(7.5Y3/1)細疊混じり砂質シルト
3 黒色(7.5Y2/1)シルト。古墳時代の遺物包含層
4 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂疊混じり粘土。
No.5 1 田耕上層
2 暗青灰褐色(SBG3/1)中粒砂～粗粒砂混じり粘土
3 暗黒色(SR2/1)粗粒砂混じり粘土
4 暗青灰褐色(SBG3/1)細疊混じり粘土。
No.6 1 田耕土層
2 緑灰褐色(SGS1/1)中粒砂
3 暗灰褐色(N3/0)細粒砂混じり粘土
4 暗青灰褐色(SBG3/1)細疊混じり粘土。

第3図 各調査箇所断面柱状図

を含む。

【No.3】 第1層 オリーブ黒色(7.5Y3/1) 中疊混じり砂質シルト。

第2層 オリーブ黒色(5Y3/2) 砂質シルト。

第3層 暗灰色(N3/0) 細疊混じり粘土。古墳時代の遺物包含層。混入品として縄文土器を含む。

第4層 暗灰色(N3/0) 粘土。

No.3 では第4層の暗灰色粘土から遺物は検出されなかった。

【No.4】 第1層 オリーブ黒色(5Y3/2) 中疊混じり砂質シルト。

第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/1) 細疊混じり砂質シルト。

第3層 黒色(7.5Y2/1) シルト。古墳時代の遺物包含層。

第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/1) 砂疊混じり中疊。

次にNo.1 からNo.4 までの層位の対応関係をみておく(第1表参照)。

各試掘坑とも盛土下にオリーブ黒色砂質シルトが堆積するのは共通する(I層)。旧耕土や床土など耕作に伴う土層は削平されている。

第1表 第20-1次調査各試掘坑の層位対応関係

基本層位	No.1	No.2	No.3	No.4
I	第1層	第1層	第1層	第1層
	第2層		第2層	第2層
II	第3層	第2層		
III		第3層	第3層	第3層
IV				第4層
V	第4層		第4層	

No 1・No 2ではその下部に同色砂が介在する(Ⅱ層)。No 1を除く各試掘坑では、この下部に遺物包含層であるⅢ層が堆積している。遺物包含層のベース層は(暗)灰色粘土と考えられる。No 4で遺物包含層がシルト層であり、その下部に砂混じり中疊層が堆積する理由として、No 1・No 3の層位との比較から、申請地の西側に溝ないし自然流路が流下することが推定される。

② 第20-2次調査

第20-1次調査地と東に接しているが申請地の北にある東西道路に沿って、旧地形は急激に高くなり西への傾斜面を形成する。このため、No 5・6では旧耕土層が遺存したとみられる。

【No 5】 第1層 旧耕土層。 第2層 暗青灰色(5BG3/1) 中粒砂～細粒砂混じりの粘土。

第3層 赤黒色(5R2/1) 細粒砂混じり粘土。 繩文時代～弥生時代の遺物包含層。

【No 6】 第1層 旧耕土層。 第2層 緑灰色(5G5/1) 中粒砂。

第3層 暗灰色(N3/0) 細粒砂混じり粘土。 繩文時代～弥生時代の遺物包含層。

第4層 暗青灰色(5BG3/1) 細疊混じり粘土。

遺物包含層である第3層で、No 5とNo 6の土色が異なるが、土質は共通しており、No 5では暗灰色の粘土層が火災により赤変したものと考えられ、同一層と捉えられる。またNo 5の地表面はNo 6のそれより約40cm高く、このため第3層上面のレベルが違うが、旧耕土層以下の層準はほぼ同じ状況であったとみられる。出土遺物の量は、第20-1次が多く、第20-2次は比較的少なかった。

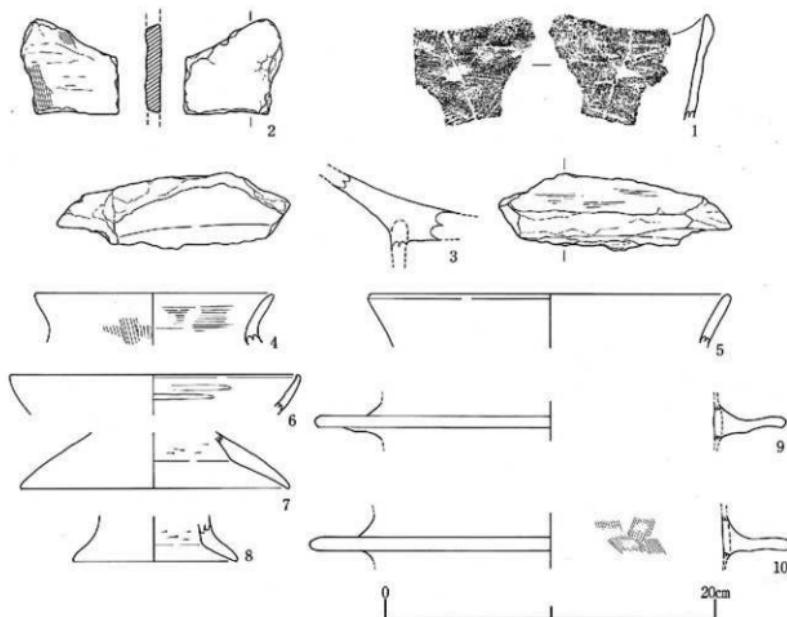
3) 出土遺物(第4・5図)

本資料は、古墳時代の遺物が中心であるが、一部に繩文土器の混入が見られる。以下の遺物は第20-1次調査分である。埴輪片は第2～3層、その他は第3層から出土した。以下、口縁部のヨコナデ調整と焼成が良好な場合は説明を省く。

1は繩文土器の深鉢である。繩文時代後期中葉の北白川上層式2期に該当する。口縁部は、外面がやや肥厚する波状口縁である。波頂部は少なくとも4単位以上になる。波頂部を除く口縁端部は軽く面取り調整し、頭部は横向方向に幅細のミガキ調整をする。胴部はやや膨らむ可能性があるが、欠損のため詳しく述べない。口縁部と胴部の外面には無節Lの繩文を横向方向に回転施し、内面に粗いナデ調整を施す。灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、胎土に径1～2mm程の長石・角閃石を多く含む。生駒西麓産の胎土である。やや摩滅している。

(1) 2・3は形象埴輪である。胎土・色調と赤色顔料の塗布が共通していることから、同一個体の可能性がある。2は部位・正位置が不明である。板状を呈する破片である。文様は確認できない。外面は丁寧にナデ調整し、水銀朱と思われる赤色顔料を塗布する。内面は指オサエ成形による指頭圧痕が残り、その上をハケメ調整する。外面はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)、内面は暗灰色(N3/0)を呈する。胎土に石英・長石を含む。3は蓋形埴輪の笠部である。軸受部より上と笠部先端を欠き、円筒部との接合部分がわずかに残る。笠部下半内面は、円筒部への取り付けを補強するために器壁が厚くなる。外面は横向方向に板ナデ調整し、赤色顔料を塗布する。内面はナデ調整する。外面はにぶい橙色(5YR7/4)、内面は暗灰色(N3/0)を呈する。胎土に石英・長石を含む。

4・5は土師器の壺である。4は口縁部片で、やや緩やかに「く」の字状に屈曲し、口縁端部に向けて器壁が薄くなる。口縁端部は尖り気味である。口縁部内面は横向方向にハケメ調整し、体部外表面は縱方向にハケメ調整する。にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土に石英・長石・角閃石を含む。5は開く口縁部片で、若干外反する。口縁端部は丸く納める。摩滅のため、外表面の調整は不明である。にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土に長石・角閃石を含む。4・5は生駒西麓産の胎土であり、



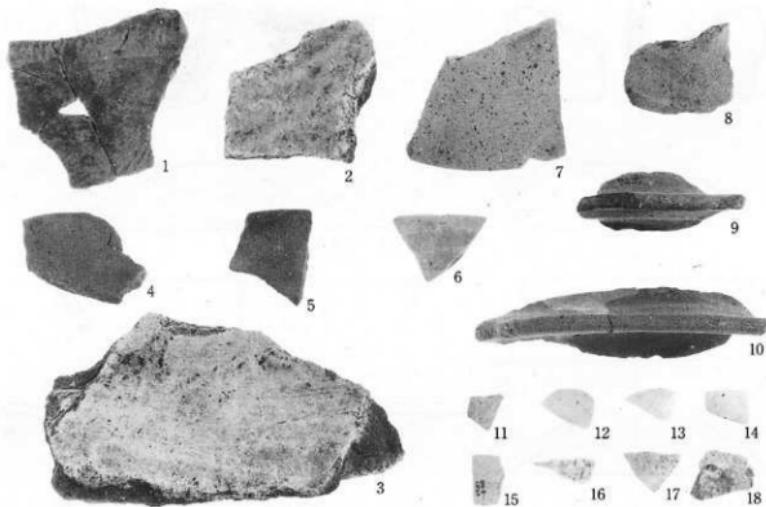
第4図 出土遺物実測図

5世紀中葉～後半のものと考えられる。

6～8は土師器の高杯である。6は開く口縁部片で、やや内縁気味に立ち上がる。口縁端部は内側に小さく摘み上げられる。内面はヘラミガキ調整する。にぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土に長石・雲母を含み緻密である。質感は軟質である。7・8は裾部片であり、裾端部に向けて開く。裾端部は尖り気味である。外面はナデ調整し、内面上半はヘラケズリ調整する。にぶい褐色（7.5YR5/3、5/4）を呈し、胎土に石英・長石・角閃石を含む。生駒西麓産の胎土である。5世紀代のものと考えられる。

9・10は土師器の羽釜である。鋸部のみが残るため、上下の向きは判断が難しい。鋸部は長い。ナデ調整のために断面が緩やかに蛇行する。端部は丸く納める。9の内面はナデ調整し、10の内面はハケメ調整する。9はにぶい黄褐色（10YR5/3）、10はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土に石英・長石・角閃石を含む。生駒西麓産の胎土である。正確な帰属時期は不明だが、5世紀代の土師器の毫・高杯が出土していることから、概ね同時期のものと考えられる。

その他の出土遺物としては、製塩土器がある⁽²⁾（第5図）。口縁部片を含む15点を確認した。固化できるものはない。口縁部は直立気味に立ち上がり、体部には緩やかな起伏がある。全体の器形は復元できない。摩滅のために成形技法や器面調整が不明なものもある。多くは手づくね成形である。内外面はナデ調整する。胎土は長石を含むものもあるが、砂礫を含まないものが多く、概して緻密である。質感が軟質なものが多い。5世紀中葉～後葉頃のものと考えられる。



第5図 出土遺物写真

(1) 過去の縄手遺跡の発掘調査では、えの木塚古墳の周濠から赤色顔料が施された鰐付の円筒埴輪が出土している（縄手遺跡調査会1971）。出土地点は縄手小学校敷地内である。えの木塚古墳の埴輪は、川西宏幸による円筒埴輪編年では第Ⅱ期に位置付けられている（川西1978）。川西の第Ⅱ期は、和田晴吾による古墳様式編年における前期後半～中期初頭に対応し（和田1987）、和田の年代觀に基づけば4世紀の半ば前後のものになる（和田1994・1999）。よって、2・3も、えの木塚古墳に伴う、同じ時期のものと考えられる。ただし、えの木塚古墳の周濠からは、5世紀半ばのTK207型式の須恵器と土師器の羽釜も出土している（中西1988）。古墳の南端部からは5世紀中頃～7世紀に見られる子持勾玉が出土しており（縄手遺跡調査会1971）、埴輪以外の出土遺物の帰属時期は5世紀半ば以降にまとまる。過去の発掘調査では、古墳の築造年代と出土遺物との間に時期差があることから、古墳築造後の祭祀や追葬の可能性が指摘されている（縄手遺跡調査会1971）。いずれにしても、えの木塚古墳の築造年代・埴輪の帰属時期と埴輪以外の出土遺物の帰属時期の違いをどのように解釈するかという問題は、今後も検討する必要がある。同時に、えの木塚古墳の築造年代や埴輪の帰属時期についても、再検討する必要もある。

(2) 広瀬和雄による丸底I式（広瀬1994）や、積山洋による大阪湾Ⅱ式中のF2a類（積山2007）に該当する。

4)まとめ

今回の調査成果について、周辺の調査状況を踏まえてまとめておきたい。

南に隣接する第18次調査では、幅の狭いトレンチ調査であったが、現地表下30cmで縄文時代の遺物包含層を検出した。包含層中には後期の縄文土器以外認められず、該期の堆積層と捉えられた（東大阪市教育委員会2006）。ただし遺物包含層の検出面は現在の地表面から浅く、その確定には検討が必要であった。今回の調査で遺物包含層としたⅢ層は第18次調査の遺物包含層と同質でありこの層に相

当する。従って第18次調査の遺物包含層は古墳時代の二次堆積層であることが判明した。

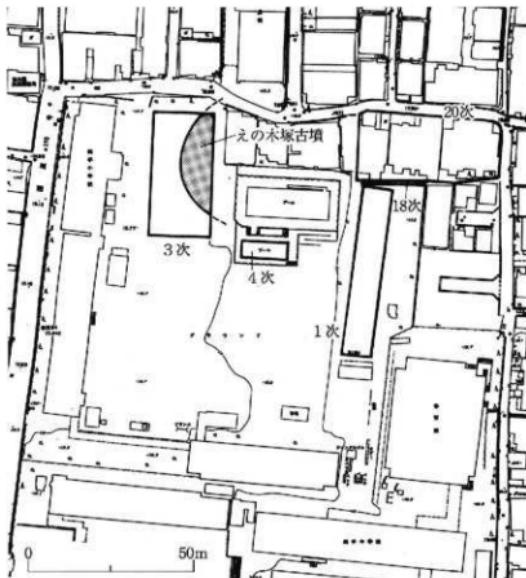
今回出土した遺物で注目されるものに蓋形埴輪がある。第20次調査地と周辺の調査地の位置関係は第6図のとおりで、蓋形埴輪はえの木塚古墳に伴う可能性が高い。えの木塚古墳出土の鱗付円筒埴輪は、川西編年では前記のように第Ⅱ期に属する。

いっぽう生駒山西麓の円筒埴輪を通覧した閔氏は須恵器出現を画期として2時期に区分された(閔2007)。同氏に拠れば円筒埴輪の初現期に次ぐ位置付けが行われ川西編年を支持している。今回出土の蓋形埴輪は、笠部の小破片であり遺物属性からの明確な所属時期は決しがたい

が、鱗付円筒埴輪の年代観と同一時期の可能性がある。しかし、伴出の土師器は羽釜にみられるように5世紀代のもので、前記の年代観と隔絶する。今回の遺物包含層の状況からみて、古墳時代の遺物は西側に広がるものと思われる。調査地周辺での調査の進展が期待されるところである。

【参考文献】

- 積山 洋2007「大阪湾沿岸の漁撈・製塩集団と広域交流」『第56回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の海人集団を再検討する—「海の生産用具」から20年—発表要旨』埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 広瀬和雄1994「近畿～東海 6 大阪府」『日本土器製塩研究』近藤義郎編 青木書店
- 中西克宏1988「把手付瓶形土器について」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 3 No. 3 財團法人東大阪市文化財協会
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 閔真一2007「生駒山西麓における円筒埴輪の様相」『埴輪論叢』第6号 埋輪検討会
- 縄手遺跡調査会1971『縄手遺跡』(リーフレット)
- 東大阪市教育委員会2006『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成17年度－』
- 和田晴吾1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会
- 和田晴吾1994「古墳時代築造の諸段階と政治的階層構造—5世紀代の首長制の体制に触れつつ—」『ヤマト王権と交流の諸相』(古代王権と交流5) 荒木敏夫編 名著出版
- 和田晴吾(作図:藤井幸司)1999「日本史備要 古墳時代編年表」『岩波日本史辞典』石上英一他編 岩波書店



第6図 縄手遺跡第1・3・4・18・20次調査地の位置関係
50m

第7章 皿池遺跡第9次調査

1)はじめに

皿池遺跡は、東大阪市河内町を中心に喜里川町・本町に広がる、弥生時代から鎌倉時代の集落跡・官衙跡である。遺跡は、東西約300m、南北約400mの範囲に広がると推定されている。遺跡は客坊谷を中心とした山あいを流下する河川が形成する扇状地上、標高15~30mに立地している。

北に孤塚遺跡（古墳時代～中世）、南に河内寺跡が皿池遺跡に接している。河内寺廃寺跡は飛鳥時代後期（630~640年代）に創建され鎌倉時代まで存続した、四天王寺式伽藍配置をとる寺院跡である。河内直（連）氏の氏寺として出発した河内寺廃寺跡は、のち郡衙に付属する寺院（郡寺）の性格をもつようになつたと考えられている。また東には客坊山遺跡群や山畠古墳群（ともに古墳時代後期）が所在し、集落・寺院・墓地がセットで捉えられる地帯となつてゐる。

皿池遺跡は河内国河内郡の中心地、大字郷に位置すること、南方に河内寺廃寺跡が所在することから、河内郡の郡衙跡に比定されてきた。現在まで8次の調査が行なわれている。第3次調査では弥生時代後期の竪穴住居跡、飛鳥～平安時代のピットなどが見つかったが、郡衙跡に相当する明確な遺構は検出されなかつた。ところが、近年の調査で重要な遺構、遺物の発見が相次いでいる。第7次調査では古墳時代後期の総柱建物、第8次調査では渤海三彩の可能性がある三彩陶が出土した。これらは河内郡衙の様相を間接的に示すもので注目される。この点については後段で詳述したい。

平成19年4月、東大阪市河内町458-3番地において、分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査依



第1図 調査地位位置図

頼書が提出された。分譲住宅の詳細設計は未定で、申請地での埋蔵文化財の状況を把握し詳細設計に反映させるため調査が依頼されたものであった。確認調査は平成19年4月16日に実施した。調査の結果、後述の成果が得られたため、直ちに協議に入った。協議を重ねた結果、大阪府の取扱い基準に合致する設計で埋蔵文化財発掘の届出が提出された。本市ではその設計の確認のため立会調査を実施した。立会調査を経て建築工事が行なわれた。

2) 調査の概要

調査は重機を使用し遺物が最大限に採集できるよう慎重に行なった。調査面積は1.5m²である。確認した層位は次のとおりである（盛土層は略す）。

第1層　褐色（10YR4/4）細繊混じりシルト。床土状を呈する。層厚20~40cm。

第2層　暗灰色（N3/0）粗粒砂混じり粘土質シルト。炭化物中量含む。古墳~奈良時代の遺物包含層。層厚40cm以上。第2層の上面は現地表下35cm~55cmであった。

確認調査の箇所は第2図のとおりである。第2層から古墳時代から奈良時代の遺物が多量に出上した。コンテナ約2箱分に及ぶ。試掘坑の大きさからいえば、遺物の出土量は極めて多い。当初、申請地の埋蔵文化財の状況を把握するため、さらに深く調査する予定であったが、調査に同席した依頼者から、埋蔵文化財への影響を小さくする基礎設計を行なうことを見事に現地で伝えられたため、現地表下0.75mまでの調査掘削にとどめた。遺物包含層はさらに下部に続くもようである。また遺物の出土状態から見て、遺物包含層が溝や土坑など遺構の埋土となる可能性が考えられる。

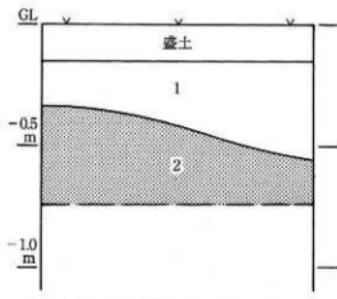
3) 出土遺物（第4~7図）

遺物は全て第2層から出土した。古墳時代後期（6世紀中頃）~中世（鎌倉時代初頭）のものである。中でも土器類の食膳器などは、奈良時代（8世紀）後半の平城宮IV・V期（西1986）に併行するものが主体を占める。以下の解説では、口縁部のナデ調整と焼成が良好なものについては説明を省く。

1~3は須恵器の杯蓋である。1は口縁部がやや内彎しながら上向きに立ち上がる。口縁端部は若干外反する。口縁部と天井部との境に稜が巡る。稜より上の天井部を欠く。内外面は回転ナデ調整し、自然釉が付着する。灰白色~灰色を呈し、胎土に若干の石英を含む。TK10型式に該当する、6世紀中頃のものである。2・3は器形全体が扁平化している。口縁端部は面を持ち、下に短く摘む。2は天井部を欠く。3は天井部が一部残り、口縁部との境が段をなす。内外面は回転ナデ調整する。灰色を呈し、胎土に若干の砂礫を含む。TK7型式に該当する、8世紀後半のものである。

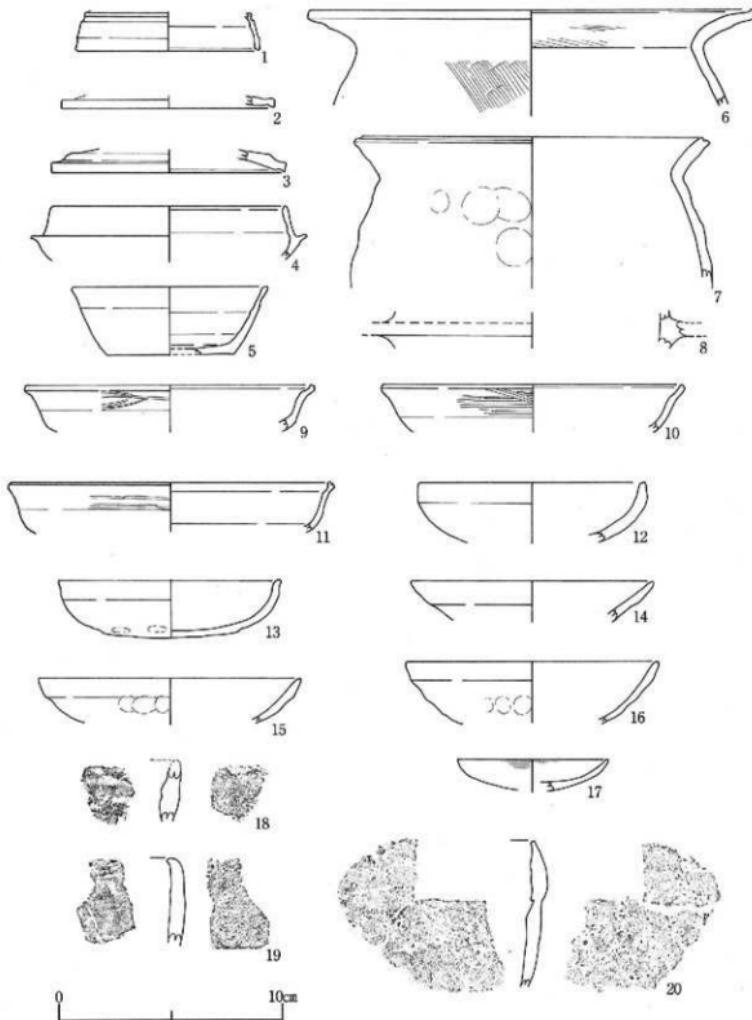


第2図 調査箇所位置図



1 褐色(10YR4/4)細繊混じりシルト
2 暗灰色(N3/0)粗粒砂混じり粘土質シルト

第3図 確認調査断面柱状図



第4図 須恵器・土師器・製塙土器実測図

4・5は須恵器の杯身である。4は蓋杯の杯身である。体部は丸味を帯び、下半を欠く。受部は短く水平方向に伸びる。口縁部は直線的に内傾して立ち上がる。口縁端部は尖り気味で、内面に段を持たない。内外面は回転ナデ調整する。灰白色を呈し、胎土に若干の石英を含む。TK10型式に該当す

る、6世紀中頃のものである。5は無蓋の杯身である。底部は平底である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は若干器壁が口縁部よりも厚くなり、丸く納める。底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整する。体部内外面は回転ナデ調整する。灰白色を呈し、胎土に若干の長石・雲母を含む。TK 7型式に該当する、8世紀後半のものと考えられる。

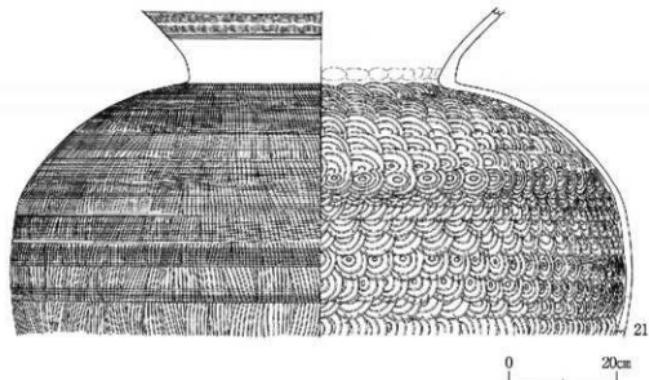
6・7は土師器の壺である。6は口縁部が「く」の字状に屈曲し、やや外反する。体部下半を欠く。口縁端部は面をなし、内面を短く摘み上げる。体部内外面はナデ調整する。口縁部内面は横方向にハケメ調整する。浅黄色を呈し、胎土に長石・雲母を多く含む。8世紀のものと考えられる。7は丸みを帯びた胴部を持ち、口縁部が「く」の字状に屈曲する。口縁端部は面取りする。体部外面は指オサエ成形による指頭圧痕を顕著に残す。体部内面は丁寧にナデ調整する。橙色を呈し、胎土にやや大振りの石英・長石を含む。胎土はやや粗い。山田幸弘による8～9世紀の「南河内型」壺に該当すると考えられる（山田1996）。

8は土師器の羽釜である。鍔部の根元部分のみが残る。鍔部は水平方向に伸びるようだが、先端を欠く。摩滅が激しく、詳しい器面調整は不明である。にぶい橙色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石を含む。胎土はやや粗く、生駒西麓産のものである。詳しい帰属時期は不明である。

9～16は土師器の食器である。17の灯明皿を含め、器種の分類は奈良国立文化財研究所1982に、帰属時期は西弘海1986と小森俊寛1992に従った。

9～11は土師器の杯である。体部へ口縁部が緩やかな「S」の字形の器形を呈する。底部を欠く。口縁端部は内面を短く摘み上げる。11は口縁端部に沈線が巡る。いずれも外面はナデ調整の後に、横方向にヘラミガキ調整する。内面は丁寧にナデ調整する。橙色～黄橙色を呈し、胎土に若干の石英・長石・雲母を含む。胎土は緻密である。杯Aに該当する。平城宮IV・V期に併行する、8世紀後半のものと考えられる。

12～16は土師器の碗である。平たい丸底を呈し、体部は丸味を帯びる。口縁部は直立気味もしくは斜め上方向へ立ち上がる。口縁端部は丸く納める。12の器壁が7mm程とやや厚い。その他は、薄手である。体部外面はナデ調整するが、指オサエ成形による指頭圧痕を顕著に残すものもある。いわゆる「e手法」である。体部内面は丁寧にナデ調整する。橙色もしくは褐色味を帯び、胎土は緻密で若



第5図 須恵器大壺実測図

干の石英・長石を含むものがある。椀Cに該当するもの(13)と、椀Dに該当するもの(14~16)とがある。平城宮IV・V期に併行する、8世紀後半のものと考えられる。

17は土師器の灯明皿である。平たい丸底を呈し、口縁部は斜め上方向に伸びる。口縁端部は丸く納め、内外面に焼き焦げた痕を残す。器壁の厚さが一定せず、器形が歪む。手づくね成形である。橙色味を帯び、胎土に大振りの石英・長石を多く含む。胎土はやや粗い。皿Cに該当する。

18~20は製塙土器である。18は端部を欠くが、口縁部付近の破片と考えられる。口縁部は直線的に立ち上がるが、傾きは不明である。体部以下を欠く。器壁は1cmあり、厚い。内外面はナデ調整し、内面は強くヨコナデ調整する。淡黄色を呈し、胎土に大振りの石英・長石を多く含む。胎土は粗い。積山洋による8世紀の4a類もしくは4b類に該当する(積山1993)。19は口縁部が直立する。体部下半~底部を欠く。本来は筒状に近い砲弾形を呈すると考えられる。外面は比較丁寧にナデ調整する。内面は布目圧痕を残す。橙色味を帯び、胎土に長石・雲母・角閃石を含む。胎土は粗い。積山による8世紀の6a類もしくは6b類に該当する(積山1993)⁽¹⁾。20は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は若干内彎する。口縁部の正確な傾きは不明である。口縁端部は尖り気味である。体部下半~底部を欠く。器壁は6~10mmとやや厚い。大型の土器と考えられる。外面は粗いナデ調整をし、粘土紐積み上げ痕が残る。内面のナデ調整は特に粗く、起伏が顕著に残る。にぶい橙色を呈し、胎土に石英・長石を含む。積山による1b類に該当する(積山1993)⁽²⁾。

21は須恵器の大甕である。体部は丸味を帯び、肩がやや張る。頸部は「く」の字状に屈曲し、外反気味に立ち上がる。口縁部を欠く。体部下半~底部片が出土しているが、体部上半とは接合しない。体部はタタキ成形し、外面はタタキ目が、内面は充て具痕が残る。タタキ板は小振りの格子目状の溝を持つ。タタキ成形は下から上への順で行っている。体部外面はタタキ成形後、横方向に数段のカキメ調整をする。頸部外面は回転ナデ調整の後、沈線で区画した中に粗い2列の樹脂波状文を施す。頸部内面はナデ調整する。灰白色を呈し、胎土に石英・長石を含む。正確な帰属時期は不明だが、6世紀末~7世紀前半頃のものと考えられる。

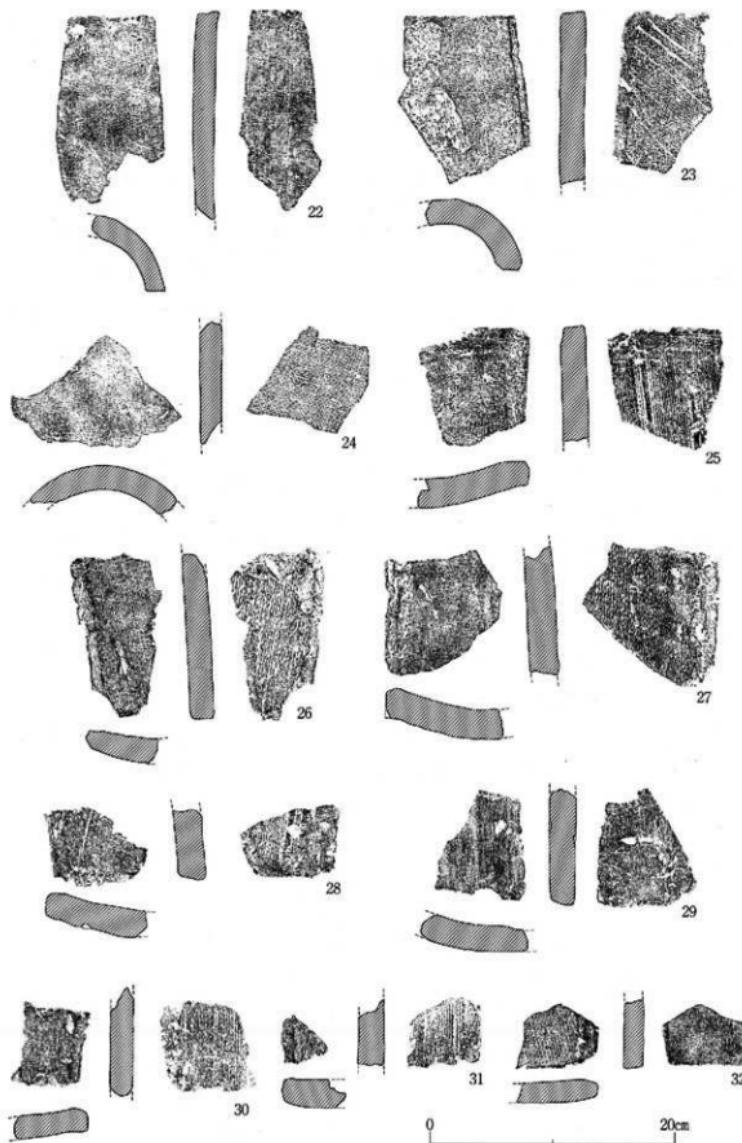
22~24は古代の丸瓦である。凹面は布目圧痕が残り、凸面と端面は丁寧にナデ調整する。狹壠面が残るもの(22・23)は行基式の丸瓦である。いずれも完形品ではなく、本來のサイズは不明である。器壁の厚さは1.8~2.0cm程度である。灰色を呈し、胎土に石英・角閃石が目立つもの(22・23)と、暗褐色を呈し、石英・長石・大振りの角閃石が目立つもの(23)とがある。いぶしは認められない。

25~31は古代の平瓦である。凹面は布目圧痕が残り、凸面は繩目タタキ板痕が残る。完形品ではなく、本來のサイズは不明である。破片が小さく、正位置が不明なものが多い。色調は褐色味を帯びたものや、灰色味を帯びたものなど多様である。胎土は石英・角閃石を含むものが多く、粗い。このほか破片には凹面に成形台に敷かれた布の端部の圧痕が残るものがある。一枚作りによる、奈良時代~平安時代のものと考えられる(森1986)。25以外の平瓦と22~24の丸瓦も同時期のものと考えられる。

32は中世の平瓦である。凹面は布目圧痕が残る。凸面は繩目タタキ板痕を丁寧にナデ消している。黒褐色を呈し、胎土に石英・長石を含む。鎌倉時代初頭のものと考えられる(森1986、市本1995)。



第6図 須恵器大甕写真



第7図 九瓦・平瓦実測図

註(1) 類例は神並遺跡でも出土しており、奈良時代のものとされる（才原1985）。

(2) この1b類の継続時期は長い。鬼塚遺跡の第13次発掘調査では、8世紀前葉の平城宮Ⅰ～Ⅱ期に併行する1b類の製塙土器が出土している（（財）東大阪市文化財協会1999）。20は、口縁部の内壁が弱いことから、鬼塚遺跡の事例よりも新しいものと考えられる。1b類の生産地は淡路と播磨に比定されており、206 淡路・播磨方面から持ち込まれた可能性がある。大阪府内の遺跡から出土する奈良時代の製塙土器は、ニガリなどの不純物を取り除くために塙の結晶を焼き固める際に用られ、「交易」を通じて、圓型塙（焼き塙）と共に大阪府内の集落に持ち込まれたと考えられている（積山1993）。

4)まとめ

今回調査した河内町458番地付近（以下458と略す）は、過去の調査で遺構・遺物を密に検出している箇所である（第8図）。第9次調査地の南に接する宅地（河内町458-5）では、舟形埴輪を伴う古墳の周溝が発見され、皿池1号墳と命名された。古墳周溝から舟形埴輪のほか、家形埴輪片・朝顔形埴輪片が出土し、埴輪に伴うと考えられる韓式系土器壺や土師器高杯・壺もみつかっている。これらの土器の年代観は5世紀後半に属する。

今回の調査地の西に接する南北道路（河内町458）下で公共下水道工事に伴う立会調査が実施され（第8次調査、第8図のA-1～A-12地区、東大阪市教育委員会2007）、多量の遺物が出土した。とくに皿池1号墳の西に接するA-6～A-8地区では顯著であった。今回の調査地はA-8地区と接する。第8次調査の報告書をみると、第3層から第5層まで奈良時代の遺物が出土し、土層の漸移的な変化に伴い、下部に進むに従い古相を示していた。南北道路路面と試掘坑とは平坦で、ほぼ同レベルであった。A-8地区的土層図をみると、現地表下55cmで第3層、同80cmで第4層、同110cmで第5層の各上面を検出している。このことから今回の調査地の第2層はA-8地区的第3層に対応すると考えられる。今回の調査で出土した奈良時代の土器は、概ねその後半に属するのが特徴である。第8次調査と今回の調査の成果を総合すると、A-8地区周辺では遺物の出土が濃密であり、前記のように、出土した土層が単なる遺物包含層ではなく溝や土坑などの埋土に相当することが推定される。いっぽうA-7地区から渤海三彩の可能性がある三彩陶が出土とともに、河内町458付近は河内寺跡に接した地域である。これらのことから、寺院・官衙に関連した奈良時代集落が調査地付近に広がっていた可能性が高い。今後調査が進展すれば皿池遺跡の様相が次第に明らかになるものと考えられる。

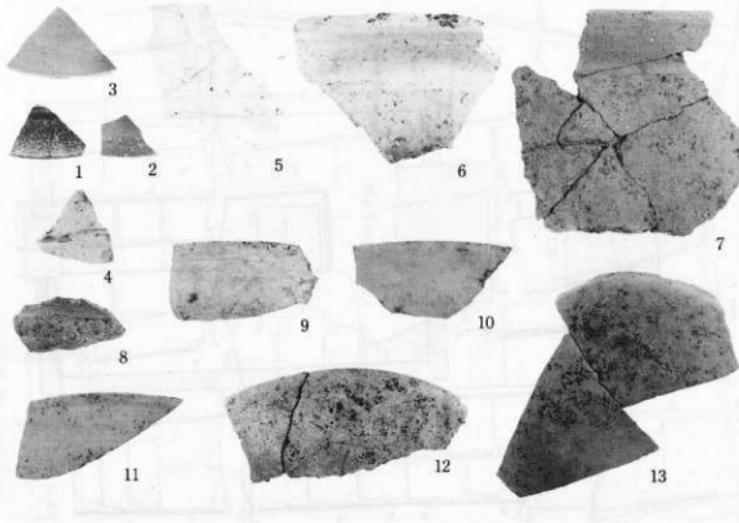
【参考文献】

- 市本芳三1995「12. 瓦」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真陽社
小森俊寛1992「概説」「古代の土器1 郡都の土器集成」古代の土器研究会
才原金弘1985「東大阪市内出土の製塙土器II」「財団法人東大阪市文化財協会紀要」I （財）東大阪市文化財協会
積山 洋1993「律令制期の製塙土器と塙の流通—攝河岸出土資料を中心に—」「ヒストリア」第141号 大阪歴史学会
奈良国立文化財研究所1982「平城宮発掘調査報告XII 本文」
西 弘海1986「平城宮の土器」「土器様式の成立とその背景」真陽社（西弘海1976「平城宮出土土器の編年とその性格」「平城宮発掘調査報告VII」奈良国立文化財研究所を再掲）
（財）東大阪市文化財協会1999「鬼塚遺跡第13次（遺物編）15次発掘調査報告書」
森 郁夫1986「瓦」（考古学ライブラリー43）ニュー・サイエンス社
山田幸弘1996「南河内」「古代の土器4—煮炊具（近畿編）—」「古代の土器研究会編」
東大阪市教育委員会2007「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成18年度－」

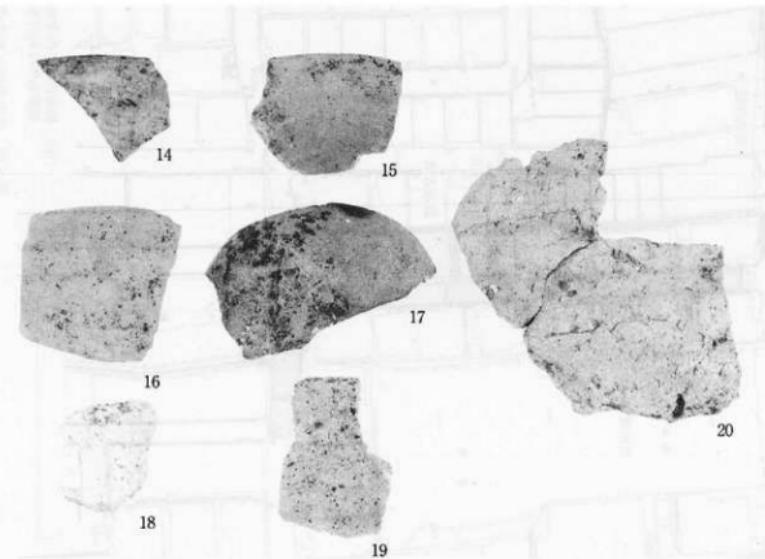


（注） 他處内は河内寺廬寺跡、周知の
遺跡名跡は河内寺跡としている。

第8図 河内寺跡と三池古墳跡8・9水門跡との位置関係

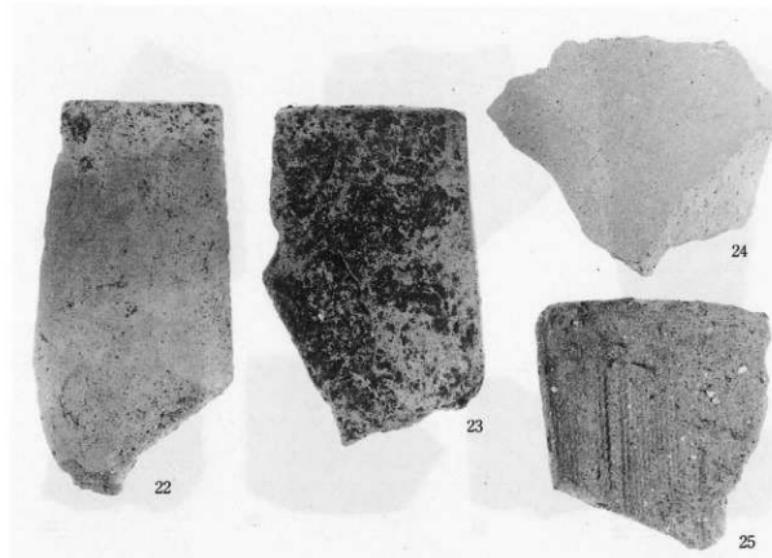


1. 犀惠器杯蓋・杯身、土師器甕・羽釜・杯・椀

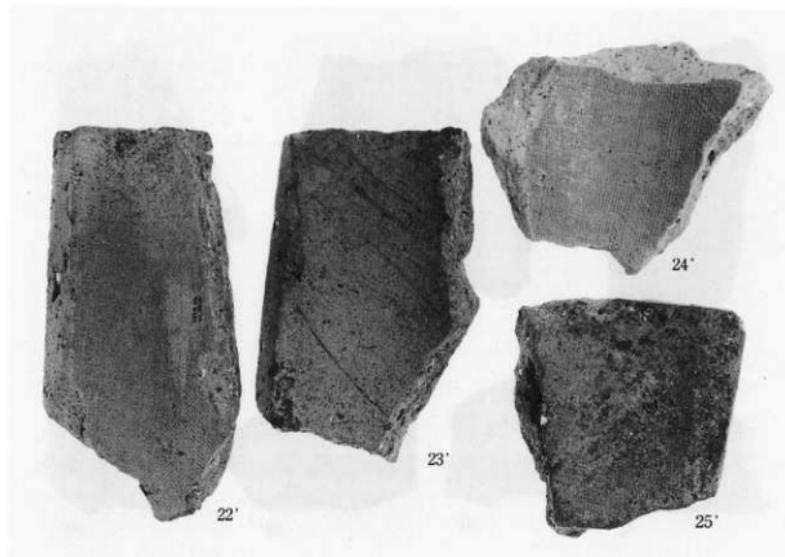


2. 土師器椀・灯明皿・製塙土器

圖版2
皿池遺跡第9次調查
遺物

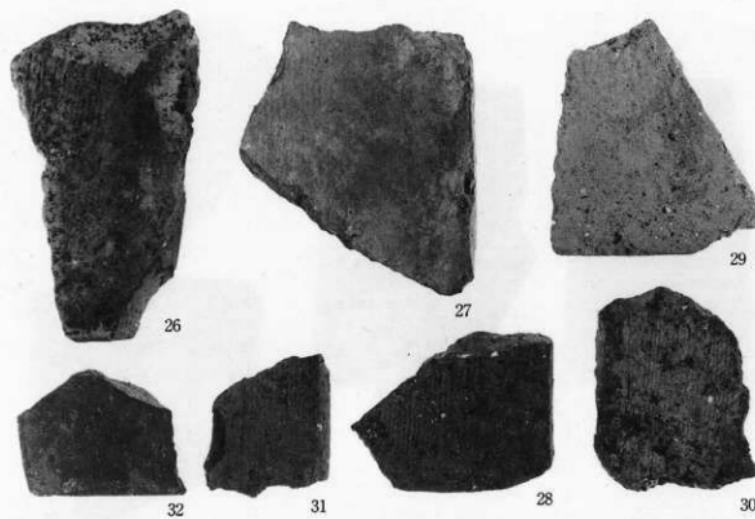


1. 丸瓦・平瓦 (凸面)

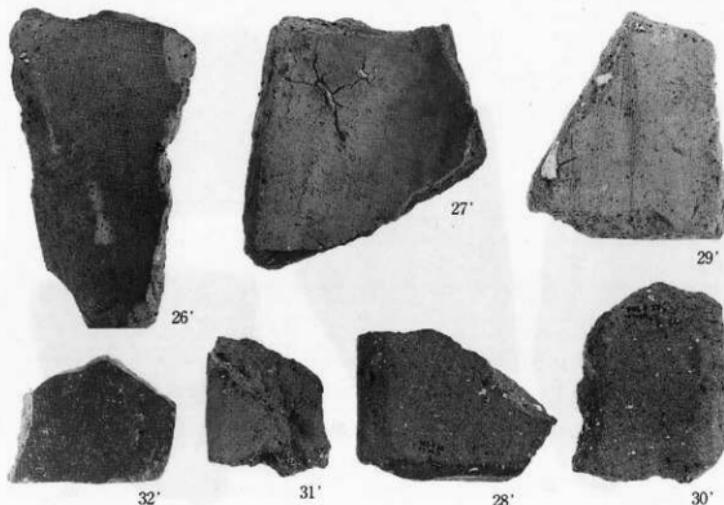


2. 同上 (凹面)

圖版 3
皿池遺跡第9次調查
遺物



1. 平瓦（凸面）



2. 同上（凹面）

第8章 善根寺遺跡第3次発掘調査

1) はじめに

善根寺遺跡は善根寺町2丁目から池之端町の一部に広がる、弥生時代から中世期にかけての集落跡である。遺跡は生駒山地西麓の小河川から流れ出た土砂により形成された扇状地上にある。標高は約20mを測る。本遺跡では大規模な開発がなく、最近まで本格的な調査は行われてこなかった。しかし、施設や住宅建設などの開発が進み、調査が増加する傾向にある。

縄文時代前期の河内湾海岸線が鬼虎川遺跡で発見されている。その北方には日下遺跡がある。貝塚とともに土塙墓・壺棺墓・竪穴住居跡が見つかっている。大阪府で数少ない貝塚として貴重な遺跡である。善根寺遺跡の東には善根寺山遺跡があり、中期の縄文土器が採集されている。遺物は採集品のため遺跡の詳細な性格は不明である。

弥生時代になると淡水化が進み、河内潟を経て河内湖となる。善根寺遺跡周辺では中垣内遺跡がある。前期の方形竪穴住居跡や溝、土坑などが確認されている。前期～後期の土器や木製杓の未製品、石庖丁などが出土している。善根寺遺跡でも後期の弥生土器が発見されている。

古墳時代になると河内湖は淀川や大和川などの河川から土砂が運ばれて徐々に小さくなり、平野部が広がってくる。日下遺跡では竪穴住居や溝、馬を埋葬した土壙などが確認されている。韓式系土器や製塙土器なども出土している。また、善根寺遺跡の北東には尊上山古墳が、東方には坊主山古墳がある。坊主山古墳の墳丘には円筒埴輪片が一定の間隔で散在していたとされている。坊主山古墳のさらに東方には戎山古墳があり、副葬品と考えられる須恵器が発見されている。これらの古墳は全て6世紀代に造られた、横穴式石室をもつ单独墳である。善根寺遺跡の南方では尾根ごとに群集墳を形成していることと対照的である。

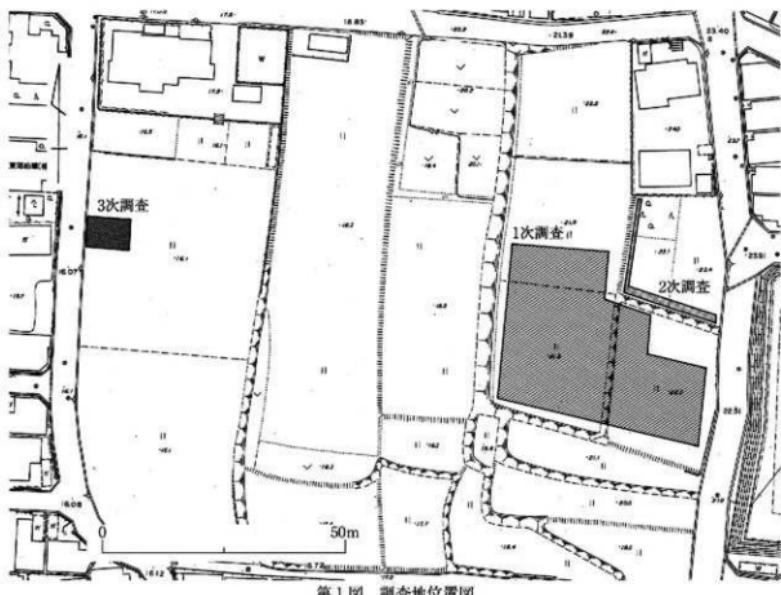
奈良時代以降では、行基建立の四十九院の一つ、石渠寺が善根寺遺跡の南方にある。善根寺遺跡の東には池端遺跡がある。墓域内に藏骨器が埋置されていた。藏骨器内には多量の火葬骨が収められ、中には釘状鉄製品が入っていた。

善根寺遺跡ではこれまで2度、発掘調査が実施されている。第1次調査では奈良時代中期・末期、平安時代前～中期の掘立柱建物が計6棟確認されている。掘立柱建物は軸が全て真北を向いて建てられていた。第2次調査では調査地の北端部で自然河川が確認された。自然河川は建物群の北に位置し、集落の北限を示すと考えられる。徐々に奈良～平安時代の集落の様相が明らかになりつつある。

2) 調査の概要（第1回）

今回の第3次調査は個人住宅建設に伴う調査である。平成18年12月に「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、平成19年1月に確認調査を実施した。調査の結果、GL-25cmから古墳時代の遺物包含層、GL-50cmからピットを検出した。この結果を踏まえて届出者と協議を行い、平成19年3月5日～22日まで事前の発掘調査を実施することになった。なお、同じ場所で擁壁工事に伴って「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、立会調査を実施した。その結果、GL-30cmで奈良～平安時代の遺物包含層を検出した。

今回の調査では掘削した残土を敷地内に仮置きする場所がなかったことから、調査区を東西に分けて調査した。調査は西区の調査を終了した後に反転し、東区の調査を実施した。調査面積は68.65m²である。



3) 層位 (第2図)

今回の調査で検出した層位は以下のとおりである。

第1層 緑灰色 (5G5/1) 中～細粒砂混じり粘土。耕土。

第2層 黄褐色 (10YR5/6) 中～細粒砂混じりシルト。床土。

第3層 黄灰色 (2.5Y4/1) 中～細粒砂混じりシルト。調査区全体に厚く堆積しているが、西側では比較的薄い。層厚は5～35cmを測る。奈良～平安時代の遺物包含層であり、土師器、須恵器などが出土した。遺構面Iである。

第4層 明黄褐色 (2.5Y7/6) 中～細粒砂混じりシルト。西側では厚く堆積し、東側に行くにしたがい薄くなる。層厚は10～24cmを測る。弥生～古墳時代の遺物包含層であり、弥生土器、布留式土器、製塩土器、埴輪などが出土した。遺構面IIである。

S D21 第①層 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中～細粒砂混じりシルト。奈良～平安時代の遺物が出土した。北側では厚く堆積し、南側に行くにしたがい薄くなる。層厚は8～24cmを測る。

S D21 第②層 明黄褐色 (2.5Y7/6) 中～細粒砂混じりシルト。南側に薄く堆積する。層厚は6～8cmを測る。

S D21 第③層 灰色 (N4/0) 細粒砂混じり粘土。南側では厚く堆積し、北側に行くにしたがい薄くなる。S D21内の堆積土である。層厚は12～30cmを測る。

S D21 第④層 灰色 (N4/0) 中～細粒砂混じりシルト。北側では厚く堆積し、南側に行くにしたがい薄くなる。弥生土器、布留式土器が出土した。層厚は10～24cmを測る。

S D21 第⑤層 灰色 (N4/0) 細粒砂混じり粘土。南側では厚く堆積し、北側に行くにしたがい薄くなる。弥生土器、布留式土器が出土した。層厚は10～18cmを測る。

4) 遺構

遺構面は2面検出した。遺構面Ⅰは中世～近世期の面である。調査区西側に効溝、東側に



第2図 土層断面実測図

ピットや土坑が集中していた。遺構面Ⅱは奈良～平安時代の面である。調査区西側にピットや土坑が集中していたが、東側は希薄だった。溝、土坑、ピットの規模や形状は表1～3に掲げた。以下に主な遺構について記す。

遺構面Ⅰ（第3図）

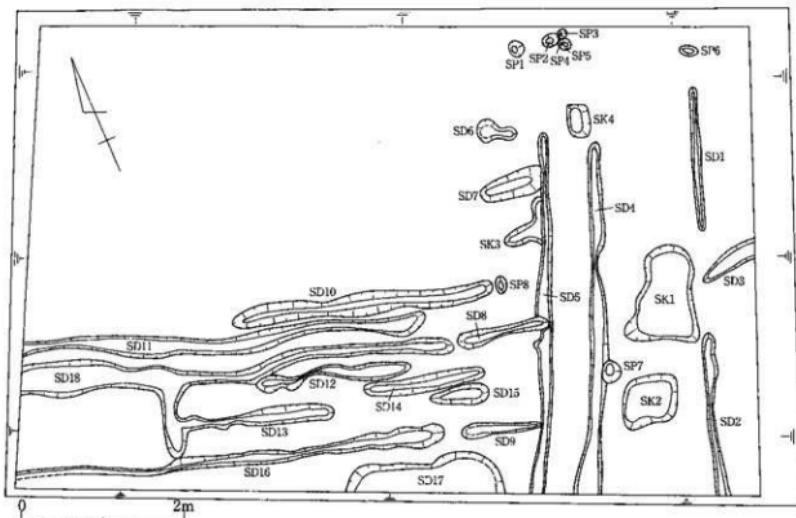
溝、土坑、ピットを検出した。溝は18条、土坑は4基、ピットは8基検出した。中世～近世期の遺構である。

溝はSD1～18がある。耕作時の鈍溝である。

SD3は東西方向へ伸びる溝である。溝の東端が調査区外へ伸びる。断面形は皿状を呈する。遺構の深さは浅い。製塩土器、土師器の皿、甕、須恵器の椀、瓦器の椀が出土した。SD11は東西方向へ伸びる溝である。断面形は皿状を呈する。遺構の深さは浅い。埴輪、土師器の皿、椀が出土した。

土坑はSK1～4がある。

SK1は、平面形は不整形である。断面形は鉢状を呈する。遺構の深さは浅い。土師器の椀、瓦器の椀が出土した。SK2は、平面形は方形である。断面形は鉢状を呈する。遺構の深さは浅い。土師



第3図 遺構平面実測図（遺構面Ⅰ）

器、須恵器、瓦器が出土した。SK3は東側をSD5に切られており規模や形状は不明である。平面形は不整形である。断面形は鉢状を呈する。遺構の深さは浅い。土師器、須恵器が出土した。SK4は、平面形は方形である。断面形は鉢状を呈する。遺構の深さは浅い。土師器、須恵器、黒色土器が出土した。

ピットはSP1～8がある。平面形はSP1・3が円形、それ以外は梢円形である。断面形はU字形を呈する。遺構の深さは全体的に浅い。SP1～4・6からは土師器、須恵器が出土した。

遺構面II（第4・5図）

溝、土坑、ピット、井戸を検出した。溝は3条、土坑は5基、ピットは24基、井戸は1基検出した。奈良～平安時代の遺構である。詳細な時期がわかるものは世紀を記述する。

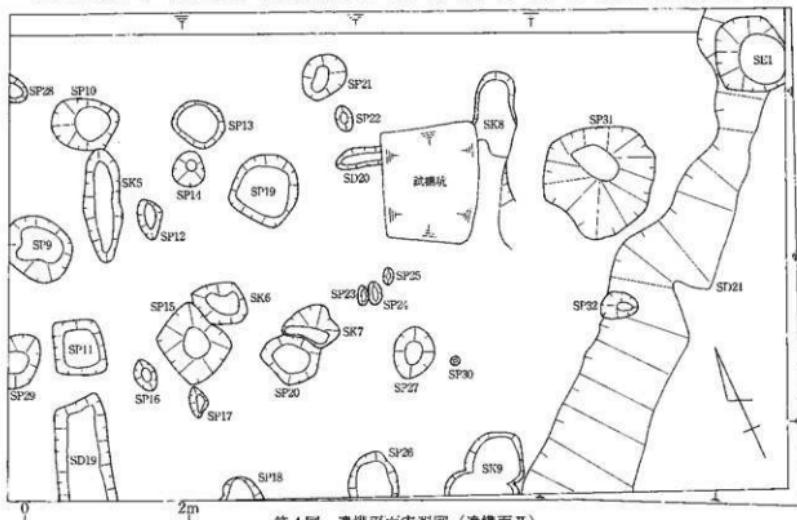
溝はSD19～21がある。

SD19は南北方向へ伸びる溝で、南端が調査区外へ伸びる。断面形は皿状を呈する。遺構の深さは浅い。埴輪、土師器の椀が出土した。SD20は東西方向へ伸びる溝である。東側を試掘坑に切られており規模は不明である。断面形は皿状を呈する。遺構の深さは浅い。土師器、須恵器が出土した。SD21は南北方向へ伸びる溝である。断面形はゆるやかな逆台形を呈する。埋土は5層に細分でき、第①～⑤層（層位参照）である。溝の東側は調査区外へ伸びるため、詳細な規模は不明である。遺構の深さは他に比べて深く70cmを測る。出土遺物は弥生土器、布留式土器の甕、円筒埴輪、製塩土器、土師器、須恵器、瓦が出土した。

土坑はSK5～9がある。断面形はSK5が浅い鉢状を呈し、それ以外はU字形を呈する。

SK7は、平面形は不整形である。断面形はU字形を呈する。奈良時代の土師器の高杯が完形に近い状態で出土した。8世紀。SK9は平面形が不整形である。断面形はU字形を呈する。黒色土器の椀の底部が出土した。

ピットはSP9～32がある。平面形はSP9・10・13・14・19～22・27・30が円形、SP11・15が



第4図 遺構平面実測図（遺構面II）

表1 溝計測表

遺構名	遺構面	方向	最小~最大 幅(cm)	長さ(cm)	深さ(cm)	地上	出土遺物
SD 1	I	南北	10~12	180	6	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸・陶
SD 2	I	南北	9~19	260	6	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 3	I	東西	15~23	(65)	4	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	塩・上・陶・ガ
SD 4	I	南北	7~20	(427)	4	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・鉢
SD 5	I	南北	10~20	(430)	5	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 7	I	東西	20~35	(75)	3	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 8	I	東西	10~14	(75)	3	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 9	I	東西	7~19	(85)	2	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	黒
SD 10	I	東西	10~32	(307)	3	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・瓦
SD 11	I	東西	15~30	(500)	9	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	埴・上・頸・黒
SD 12	I	東西	6~22	(192)	5	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土
SD 13	I	東西	8~22	(168)	2	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 14	I	東西	16~22	(145)	11	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土
SD 15	I	東西	15~27	(60)	5	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 16	I	東西	13~27	(531)	5	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸・黒
SD 17	I	東西	(15~30)	(154)	2	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・黒
SD 18	I	東西	13~47	(569)	8	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・陶
SD 19	II	南北	58~71	(140)	7	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	埴・上
SD 20	II	東西	13~15	(55)	2	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SD 21	II	南北	(80~322)	(514)	70	層位参考(第1~5層)	赤・布・埴・土・頸・塩・ガ

表2 土坑計測表

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	地土	出土遺物
SK 1	I 不整形	118	57	12	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・ガ
SK 2	I 方形	58	58	7	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸・ガ
SK 3	I 不整形	(50)	(50)	3	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸
SK 4	I 方形	42	26	8	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸・黒
SK 5	II 不整形	146	48	9	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・ガ・カ
SK 6	II 不整形	60	51	21	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・黒
SK 7	II 不整形	70	54	21	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土
SK 8	II 不整形	105	55	26	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	訂
SK 9	II 不整形	93	(71)	15	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸・黒

表3 ピット計測表

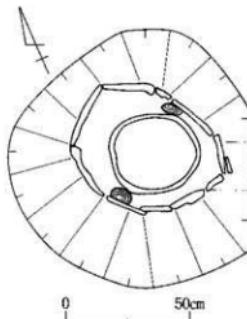
遺構名	遺構面	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	地土	出土遺物
SP 1	I 円形	20	17	4	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 2	I 構造形	20	17	5	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	灰	
SP 3	I 円形	11	11	2	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸	
SP 4	I 構造形	5	3	3	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・頸	
SP 5	I 構造形	17	15	3	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 6	I 構造形	22	12	4	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 7	I 構造形	30	23	14	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 8	I 構造形	23	13	3	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 9	II 円形	83	(73)	21	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩	
SP 10	II 円形	83	62	27	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩・黒	
SP 11	II 方形	69	62	14	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 12	II 構造形	52	32	7	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩・黒	
SP 13	II 円形	62	60	41	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩・黒	
SP 14	II 円形	44	39	20	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩	
SP 15	II 方形	100	84	19	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 16	II 構造形	38	26	14	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 17	II 小整形	41	24	16	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩	
SP 18	II 不整形	56	(35)	16	オーリーブ色(5Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	灰・土	
SP 19	II 円形	93	84	16	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 20	II 円形	75	64	38	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・黒	
SP 21	II 円形	55	54	28	黒褐色(25Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩	
SP 22	II 円形	31	21	33	灰色(5Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・灰・黒	
SP 23	II 構造形	56	14	6	黒褐色(25Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	灰・土・塩	
SP 24	II 構造形	30	16	9	オーリーブ色(5Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	黑	
SP 25	II 構造形	20	13	5	オーリーブ色(5Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 26	II 不整形	60	(47)	12	オーリーブ色(5Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 27	II 円形	64	46	14	オーリーブ色(5Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 28	II 不整形	34	(20)	13	オーリーブ色(5Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 29	II 不整形	63	(34)	32	黒褐色(25Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土・塩	
SP 30	II 円形	11	11	14	黒褐色(25Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 31	II 不整形	138	132	40	黄灰色(25Y4/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	
SP 32	II 構造形	45	31	39	黒褐色(25Y3/1) 中~細粒砂混じりシルト	土	

出土遺物	赤土土器…赤	土器…土器	土器…土器	陶器…陶器	陶器…陶器	陶器…陶器	陶器…陶器
	布質式土器…赤	須恵器…灰	須恵器…灰	瓦…カ			
	埴輪…箱	黑色土器…黒	黑色土器…黒	瓦…灰			
	製土器…堆	瓦器…ガ	瓦器…ガ				

※()内の数値は遺構の全体が判明していない為、残存値である。

方形、S P 12・16・23～25・32が椭円形、S P 17・18・26・28・29・31が不整形である。断面形はU字状を呈する。S P 10は、平面形は円形である。断面形はU字状を呈する。土師器の楕が出土した。S P 13は、平面形は円形である。断面形はU字状を呈する。土師器の皿・楕、黒色土器の楕の底部が出土した。S P 21は、平面形は円形である。断面形はU字状を呈する。土師器の杯・壺が出土した。S P 22は、平面形は円形である。断面形はU字状を呈する。土師器の皿が出土した。

井戸はS E 1がある。S D 21が埋まつた後にS E 1は造られている。東区の北東で検出した。平面形は楕円形である。断面形はU字状を呈する。掘形埋土は内側が暗灰色(N3/0)中～細粒砂混じりシルト、外側が灰色(7.5Y4/1)中～細粒砂混じりシルトである。掘形はほぼ垂直に掘られており、長軸は94cm、短軸は81cm、検出面からの深さは61cmを測る。井筒は底にやや大きめの曲物を据え、その上に削り抜いた丸太を二段積み上げたものである。井筒の直径は下から40、35、34.5cmで、高さは10、22、29cmである。井筒は上に向かうほど径の小さい物を使用している。井筒の周囲には8枚の縦板が楕円形状に配置されていた。縦板の長さは36～80cmを測る。掘形と縦板の間、井筒と縦板の間には埋土が入れられていた。また、井筒と縦板の間のはば相対する位置に杭が2本打ち込まれていた。杭の長さは75cmと92cm、直徑は5cmと4cmを測る。縦板と井筒を支える役割があったものと思われる。出土遺物は掘形埋土から弥生土器の壺、布留式土器の壺、須恵器の蓋、土師器の杯・皿が出土した。井戸内から製塩土器、須恵器の杯の底部、土師器の楕・皿、黒色土器の底部、縁釉陶器の皿・瓦、櫛が出土した。出土遺物などからS E 1は10世紀に造られている。



5) 出土遺物

弥生土器、布留式土器、奈良～平安時代の土器、中世期の土器、
製塩土器、埴輪、瓦、木製品などが出土した。遺物は奈良～平安

第5図 S E 1 平面実測図

(遺構面II)

時代のもののが特に多い。本文中に調整法を記しているが口縁部と裾端部のヨコナデ調整は普遍的なの
であえて記さない。土器は遺構・遺物包含層に分けて説明を記す。

遺構出土の土器

遺構出土の土器は遺構面IとIIに分けて説明を記す。

遺構面 I

遺物は下記の遺構より出土した。

S D 3 (第6図 1・2)

土師器と瓦器がある。土師器は壺、瓦器は楕の器種がある。

1は土師器の壺である。口縁部は強く外反する。口縁端部はやや摘み上げ、面を持つ。8世紀。

2は瓦器の楕である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に1条の沈線を残す。体部外面は粗い、内面は密なハラミガキ調整する。所謂、大和型の楕である。12世紀。

S D 4 (第6図 3)

3は土師器の楕である。底部は平底に近い丸底を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に

至る。口縁端部は丸く終わる。風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

S D10 (第6図 4)

4は土師器の皿である。口縁部は強く外反する。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く終わる。10世紀。

S D11 (第6図 5)

5は土師器の皿である。体部はゆるく内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。10世紀。

遺構面II

遺物は下記の遺構より出土した。

S K 7 (第6図 7)

7は土師器の高杯である。脚部は柱状部がゆるく広がり裾部に至る。裾端部は丸く終わる。杯部は浅い椀状を呈する。口縁端部は丸く終わる。杯部外面の下部に段が付く。杯部内面に放射状、見込み部に連結輪状の暗文を施す。脚部内面はユビオサエ調整する。柱状部内面にしづら痕が残る。他はナデ調整する。8世紀。

S K 9 (第6図 8)

8は黒色土器の椀である。底部に断面形が三角形を呈するやや高い高台を貼り付ける。内外面はナデ調整する。内面の色調は黒色を呈する。所謂、内黒の椀である。10世紀。

S P 10 (第6図 9)

9は土師器の椀である。底部は丸底に近い平底である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。10世紀。

S P 13 (第6図 10~13)

土師器と黒色土器がある。土師器は皿・椀、黒色土器は椀の器種がある。

10・11は土師器の皿である。10は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。11は体部がゆるく内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。10は8世紀、11は10世紀。

12は土師器の椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

13は黒色土器の椀である。底部に断面形が三角形を呈する高台を貼り付ける。見込み部に平行線の暗文を施す。外面はナデ調整する。内面の色調は黒色を呈する。所謂、内黒の椀である。10世紀。

S P 21 (第6図 14・15)

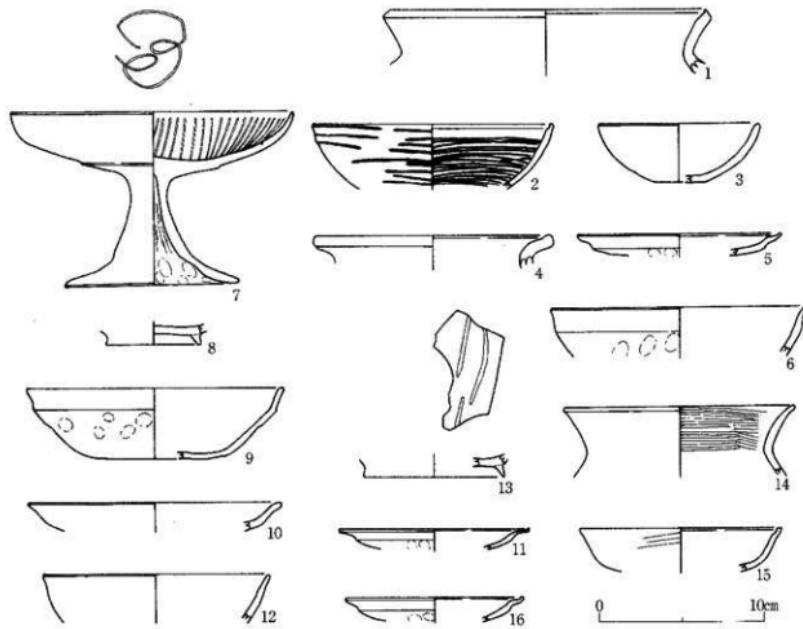
土師器は甕・皿の器種がある。

14は甕である。体部の張りは大きく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。8世紀。

15は皿である。体部がゆるく内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。8世紀。

S P 22 (第6図 16)

16は土師器の皿である。体部がゆるく内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。10世紀。



第6図 SD 3・4・10・11・19、SK 7・9、SP 10・13・21・22出土土器尖端圖
SD 21・第①層（第7～10図 17～117）

弥生土器・布留式土器・土師器・須恵器がある。

17～19は弥生土器の壺である。17は口縁端部の下端を欠損する。口縁端部に3条の擬凹線文を施し、円形浮文を貼り付ける。円形浮文には竹管文を加える。18は口縁端部が面を持つ。口縁端部に竹管文を施す。19は口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に2条の擬凹線文を施し、2ヶ所に細長い刻み目を加える。口縁部内面に樹描波状文を施す。風化が著しく調整法は不明である。弥生時代後期。

20～23は布留式土器の壺である。底部は丸底であり、体部が球形を呈する。口縁部は大きく外反する。20・21は口縁端部が面を持って内側へ肥厚する。20は体部外面をナデ調整、内面をヘラケズリ調整する。21は体部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリ調整する。22・23は口縁端部が丸く終わる。22は体部外面をナデ調整、内面をヘラケズリ調整する。23は風化が著しく体部外面の調整法は不明である。内面はヘラケズリ調整する。布留式期。

土師器は鍋・甕・高杯・鉢・杯・椀・皿・蓋・壺の器種がある。

24・25は鍋である。体部の張りは少なく、口縁部が大きく外反する。24は口縁端部を内側へやや摘み上げ、面を持つ。体部外面はハケメ調整する。内面は下半をハケメ調整、上半をナデ調整する。25は口縁端部が面を持つ。体部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面は口縁部を横方向のハケメ調整、体部をナデ調整する。8世紀。

26～35は壺である。26～29は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ摘み

上げ、面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。30~32は体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。30は体部外面をハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。他は風化が著しく調整法は不明である。33~35は体部の張りが少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外尚はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。26~32は8世紀、33~35は10世紀。

36は高杯である。裾部はゆるく立ち上がり、柱状部が上方へ伸びる。杯部はほぼ水平方向へ伸びる。裾端部は丸く終わる。杯部は風化が著しく調整法は不明である。柱状部外面は10面の面取りをする。裾部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。8世紀。

37は鉢である。底部は平底に近い丸底を呈する。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く終わる。風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

38~70は杯である。38~63は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反するものと直線的に伸びるものがある。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。38~45・62は体部内面に放射状の暗文を施す。1帯と2帯のものがある。体部外面はヘラミガキ調整する。44は体部下半をヘラケズリ調整する。47・48は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。46・49~59は体部内外面をナデ調整する。40・42・55・60~63は風化が著しく調整法は不明である。64~66は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。底部に断面形が三角形を呈する低い高台を貼り付ける。64は体部外面をナデ調整する。65・66は風化が著しく調整法は不明である。67~70は体部が内湾気味に立ち上がり口縁部がやや外反する。口縁端部は丸く終わる。67・69は体部外面をナデ調整する。68・70は風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

71~76は椀である。71は口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く終わる。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。72~76は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反するものと内湾するものがある。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整する。74は風化が著しく調整法は不明である。72は体部外面に放射状の暗文を1帯施す。8世紀。

77~85は皿である。77~83は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反するものと内湾して終わるものがある。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。体部外面はナデ調整する。77・78の外面と83は風化が著しく調整法は不明である。77・78は体部内面に放射状の暗文を1帯施す。84・85は口縁部がわずかに外反し、口縁端部が丸く終わる。体部外面はナデ調整する。風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

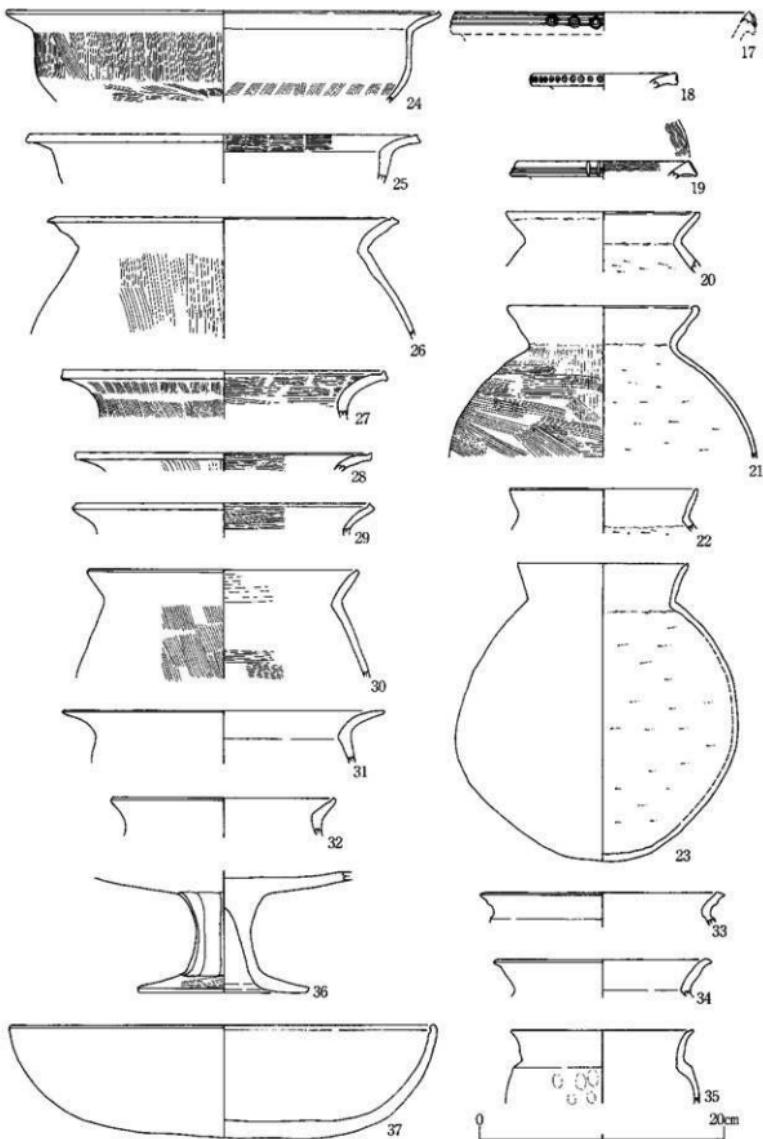
86~89は蓋である。体部の立ち上がりはゆるい。口縁部はやや外反するものと内湾するものがある。口縁端部は内側へ肥厚し丸く終わる。88・89は円形のつまみが付く。86・88は外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。87は内外面をナデ調整する。89は風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

90は壺である。体部の張りは少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。8世紀。

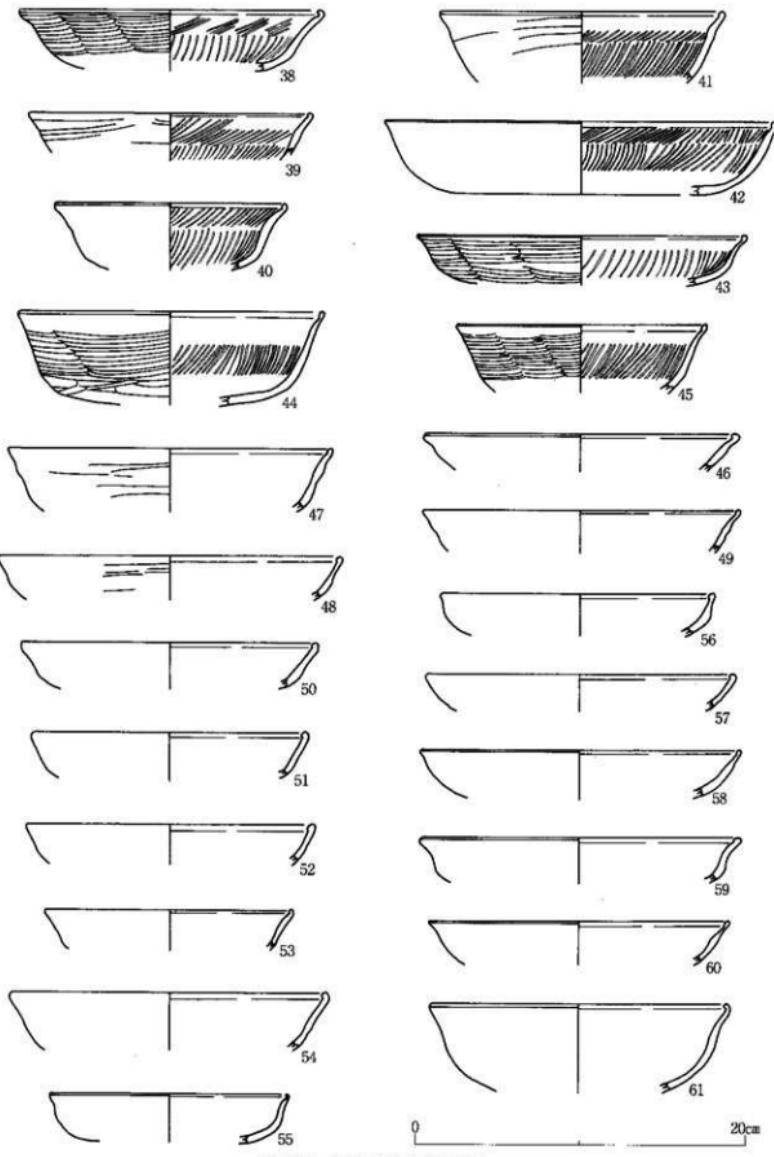
91~94は底部である。底部に断面形が三角形や台形を呈する高台を貼り付ける。91は体部内面に放射状の暗文を施す。外面はナデ調整する。92~94は風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

須恵器は蓋・壺・鉢・杯・壺の器種がある。

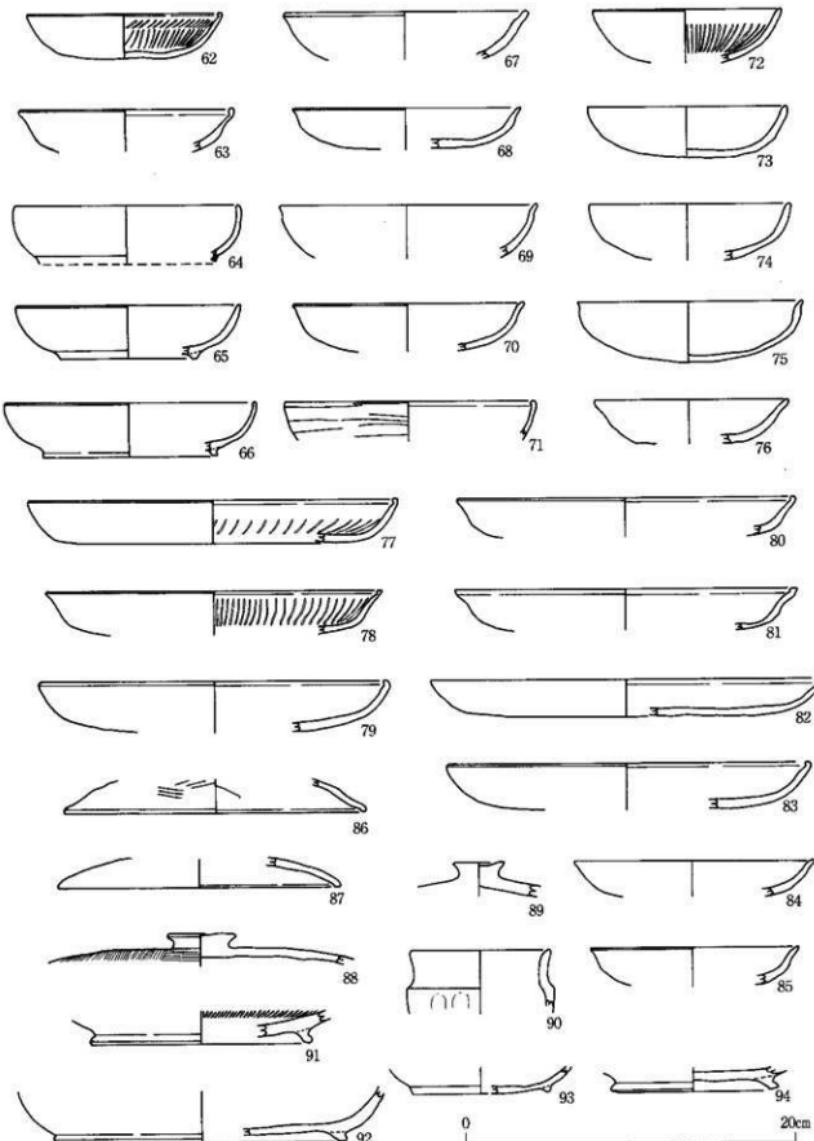
95・96は蓋である。体部はゆるく立ち上がり、天井部は低い。口縁部はゆるく外反し、口縁端部を擒み上げる。天井部中央に円形のつまみが付く。95は天井部外面の約1/3を回転ヘラケズリ、他を回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。96は内外面を回転ナデ調整する。8世紀。



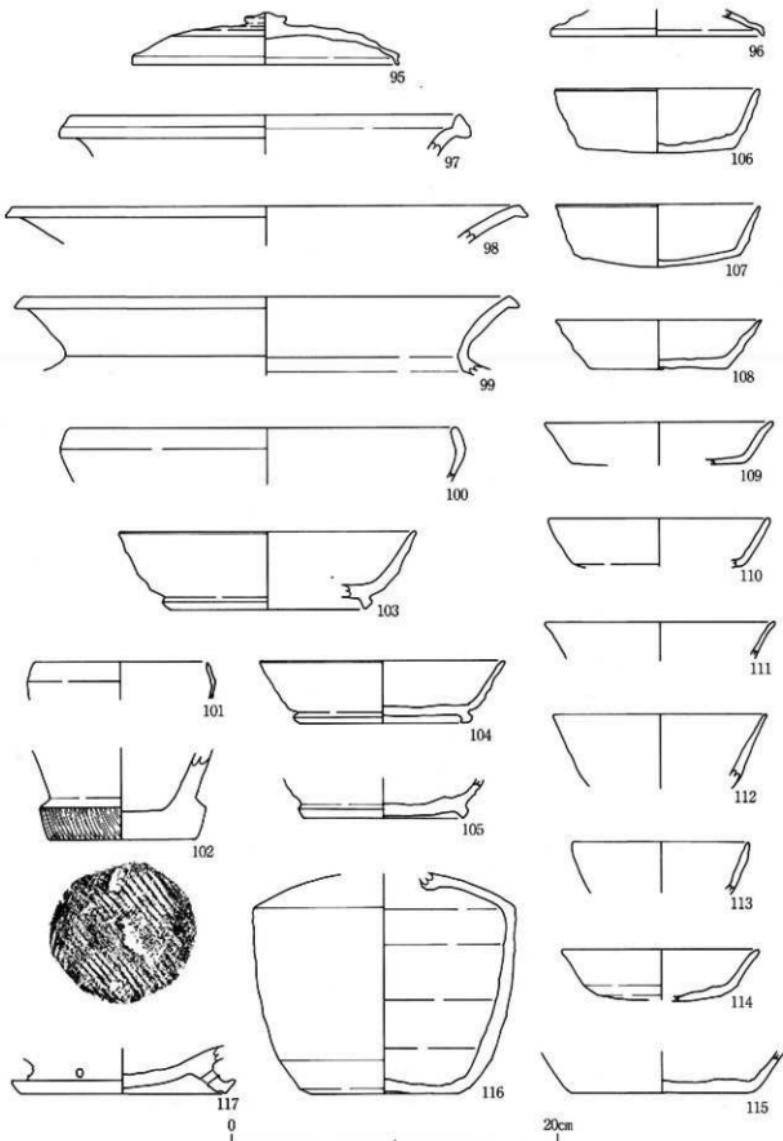
第7図 SD21出土土器実測図



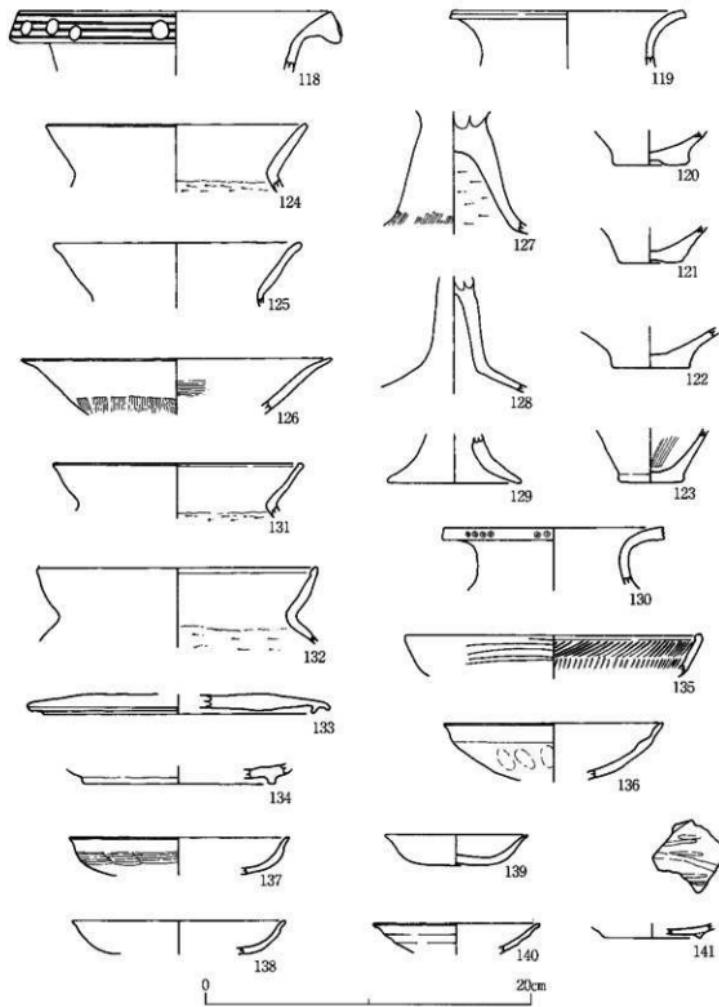
第8図 S D21出土土器実測図



第9図 S D21出土土器実測図



第10図 SD21出土土器実測図



第11図 SD21・SE1出土土器実測図

97~99は甕である。97は口縁端部を上下へ拡張し、面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。98・99は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。内外面は回転ナデ調整する。97は8世紀、98・99は10世紀。

100~102は鉢である。100・101は口縁部が強く内湾し、口縁端部が丸く終わる。内外面は回転ナデ

調整する。102は平底の厚い底部より体部が外上方へ伸びる。底部外面と底面はタタキ調整する。体部内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

103～115は杯である。103～105は底部が平底を呈する。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は丸く終わる。底部に断面形が台形を呈する高台が付く。内外面は回転ナデ調整する。106～115は底部が平底を呈する。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

116・117は壺である。116は底部が平底を呈する。体部は外上方へ伸びた後、強く内傾する。内外面は回転ナデ調整する。117は底部である。断面形が長方形の高台が付く。高台に小円孔を穿つ。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

S D21・⑤層（第11図 118～129）

弥生土器と布留式土器がある。

118・119は弥生土器の壺である。口頸部が大きく外反する。118は口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に4条の擬凹線文を施し、円形浮文を貼り付ける。119は口縁端部が面を持つ。風化が著しく調整法は不明である。弥生時代後期。

120～123は器種を決定できないが弥生土器の底部である。底面がやや凹むものと平底のものがある。風化が著しく調整法は不明なものが多いが123は内面をハケメ調整する。弥生時代後期。

布留式上器は壺・壺・高杯の器種がある。

124は壺である。口縁部は大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。布留式期。

125は壺である。口縁部は大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。布留式期。

126～129は高杯である。126は杯部、127・128は柱状部、129は裾部である。126は杯部が大きく広がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。127・128はゆるく裾部へ広がる。127は外面をハケメの後、ナデ調整する。内面はヘラケズリ調整する。128は内外面をナデ調整する。129は立ち上がりが急である。裾端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。布留式期。

S D19（第6図 6）

6は土師器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。10世紀。

S E 1（第11図 130～141）

弥生土器・布留式土器・須恵器・土師器・縄釉陶器・黒色土器がある。

130は弥生土器の壺である。口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部に4個1対の竹管文を施す。風化が著しく調整法は不明である。弥生時代後期。

131・132は布留式土器の壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を持って内側へ肥厚する。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。布留式期。

須恵器は蓋と杯の器種がある。

133は蓋である。体部はゆるく立ち上がり、天井部は低い。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。口縁部内面にかえりが付く。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

134は杯である。底部に断面形が台形の高台が付く。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

土師器は杯・椀・皿の器種がある。

135は杯である。口縁部は直線的に伸び、口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。体部内面に放

射状の暗文を施す。2帯が残る。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。8世紀。

136は椀である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部が丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。10世紀。

137～139は皿である。丸底に近い平底の底部より口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。137は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。138・139は体部内外面をナデ調整する。8世紀。

140は綠釉陶器の皿である。体部はゆるく立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉する。色調は濃緑色を呈する。10世紀。

141は黒色土器の碗である。底部に断面形が三角形を呈する低い高台を貼り付ける。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。内面の色調は黒色を呈する。所謂、内黒の碗である。10世紀。

遺物包含層出土の土器

第3・4層より土器は出土した。各層に分けて説明を記す。

第3層（第12～14図 142～211）

弥生土器・布留式土器・土師器・黒色土器・須恵器・綠釉陶器がある。

166～168は器種を決定できないが弥生土器の底部である。底面がやや凹むものと半底のものがある。風化が著しく調整法は不明なものが多いが167は外面をタクタキ調整する。弥生時代後期。

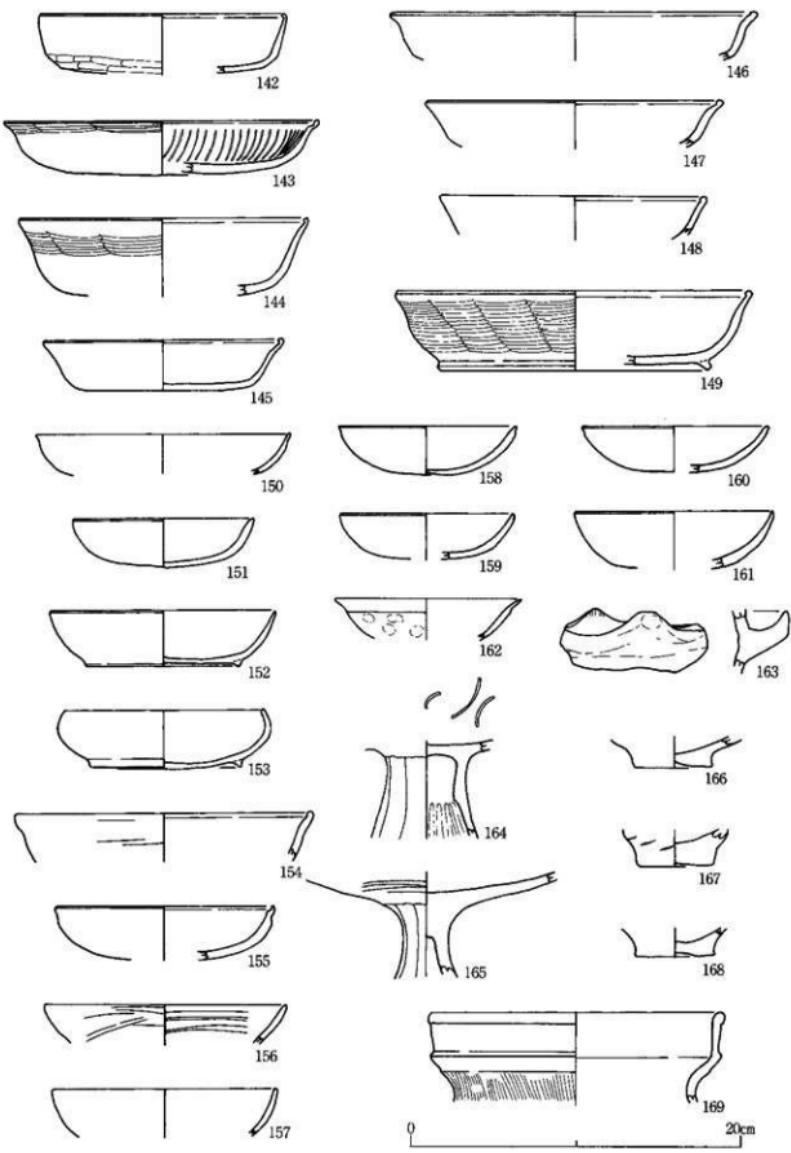
169は布留式の壺である。頭部が外反した後、口縁部は上方へ伸びる。口縁端部は外側へ肥厚し、丸く終わる。頭部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。布留式期。

土師器は杯・椀・高杯・鍋・羽釜・壺・皿・壺・蓋がある。他に器種が不明の把手と底部がある。

142～153は杯である。142～148は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反するものと直線的に伸びるものがある。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。142は体部外面の下半をヘラケズリ調整、上半をナデ調整する。143・144は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。145は風化が著しく調整法は不明である。146～148は体部内外面をナデ調整する。149は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反する。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。底部に断面形が台形を呈する高台を貼り付ける。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。143の内面は放射線状の暗文を施す。150・151は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。152は丸底に近い平底の底部より体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。底部に断面形が三角形を呈する低い高台を貼り付ける。体部内外面はナデ調整する。153は丸底に近い平底の底部より体部が内湾して立ち上がる。口縁部は内傾する。口縁端部は丸く終わる。底部に断面形が三角形を呈する低い高台を貼り付ける。風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

154～162は椀である。154・155は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く終わる。154は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。155は体部内外面をナデ調整する。156～161は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反するものと内湾するものがある。口縁端部は丸く終わる。156は内外面をヘラミガキ調整する。157～161は風化が著しく調整法は不明である。162は底部が丸底に近い平底である。体部は外上方に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。154～161は8世紀、162は10世紀。

163は把手である。先端部に向かって細くなり、ゆるく上方へ湾曲する。8世紀。



第12図 第3層出土土器実測図

164・165は高杯である。杯部の一部と柱状部が残る。柱状部はゆるく広がる。164は見込み部に暗文が残る。柱状部外面は10面の面取りをする。内面はナデ調整する。165は柱状部外面に9面の面取りをする。柱状部内面はナデ調整する。杯部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。8世紀。

170は鍋である。体部の張りは少なく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は内側へやや摘み上げ、面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。8世紀。

171は羽釜である。体部の張りは少なく、口縁部が上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。鍔は水平方向へ伸びる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。10世紀。

172～174は壺である。172・173は口縁部が大きく外反する。口縁端部は内側へ摘み上げ、面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。174は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。8世紀。

175～180は皿である。175は体部がゆるく内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へわずかに巻き込み、丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。176・177は口縁端部が丸く終わる。風化が著しく調整法は不明である。178～180は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反するものと内湾して終わるものがある。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。179は体部外面をナデ調整する。178・180は風化が著しく調整法は不明である。175は10世紀、176～180は8世紀。

181は壺である。体部の張りは大きく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部上半に把手を施す。内外面はナデ調整する。8世紀。

182～185は蓋である。体部の立ち上がりはゆるい。口縁部はやや外反するものと内湾するものがある。口縁端部は丸く終わるものと内側へ肥厚するものがある。182は円形のつまみが付く。182・185は内外面をナデ調整する。183は外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。184は風化が著しく調整法は不明である。8世紀。

186～190は器種が不明であるが底部である。底部に断面形が三角形や台形を呈する高台を貼り付け。186は体部内面に放射状の暗文を施す。外面はナデ調整する。187・190は風化が著しく調整法は不明である。188・189は内外面をナデ調整する。8世紀。

191は黒色土器の鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はヘラミガキ調整する。内外面の色調は黒色を呈する。所謂全黒の鉢である。10世紀。

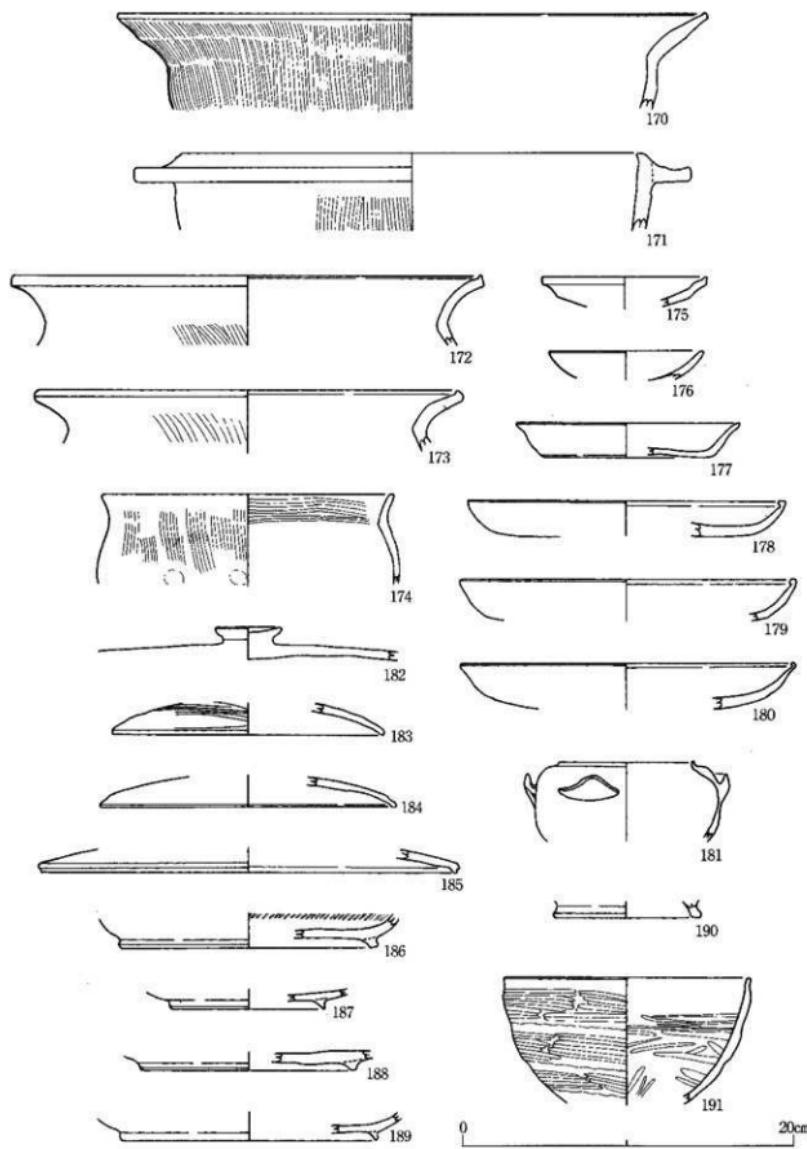
須恵器は壺・鉢・蓋・杯・壺・碗の器種がある。

192・209は壺である。192は口縁部が大きく外反する。口縁端部は上下へ拡張し、面を持つ。209は体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁部は面を持つ。体部外面はタタキ調整する。内面に同心円の当て具痕が残る。192は8世紀、209は10世紀。

193は鉢である。体部がゆるく立ち上がり、口縁部が内湾する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

194～196は蓋である。194は体部がゆるく立ち上がり、天井部は低い。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。口縁部内面にかえりが付く。内外面は回転ナデ調整する。195・196は体部はゆるく立ち上がり、天井部は低い。口縁端部を摘み上げる。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

197～205は杯である。197～200は底部が平底を呈する。体部は外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁部は丸く終わる。底部に断面形が台形を呈する高台が付く。内外面は回転ナデ調整する。201～205は底部が平底を呈する。体部は外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナ



第13図 第3層出土土器実測図

テ調整する。8世紀。

206・207は盃である。206は口縁端部を上方へ挿み上げ、面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。207は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。

208は椀である。底部に断面形が三角形を呈するやや低い高台が付く。内外面は回転ナデ調整する。所謂、山茶椀である。10世紀。

綠釉陶器は皿と碗の器種がある。

210は皿である。体部はゆるく立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉する。色調は濃緑色を呈する。10世紀。

211は椀の底部である。断面形が台形を呈する幅広の高台を削りだす。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉する。色調は淡緑色を呈する。10世紀。

第4層（第14図 212～215）

弥生上器と布留式土器がある。

212・213は器種を決定できないが弥生土器の底部である。底面がやや凹む平底である。212は内外面をナデ調整する。213は外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。弥生時代後期。

214・215は布留式土器の型である。体部の張りは強く、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。布留式期。

製塙土器（第15図 216～245）

216～245は製塙土器である。細片のため全形は不明であるが砲弾型を呈すると考えられる。口縁端部は尖り気味に終わる。外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。216～241は器壁が薄いものである。216～230は口縁部、221～241は体部である。242～245は器壁が厚いものである。242が口縁部、243～245は体部である。220はS E 1、216～218・221・222・225・226・230・236・241～243はS D 21の第①層、233・235は第4層、他は第3層より出土した。8世紀。

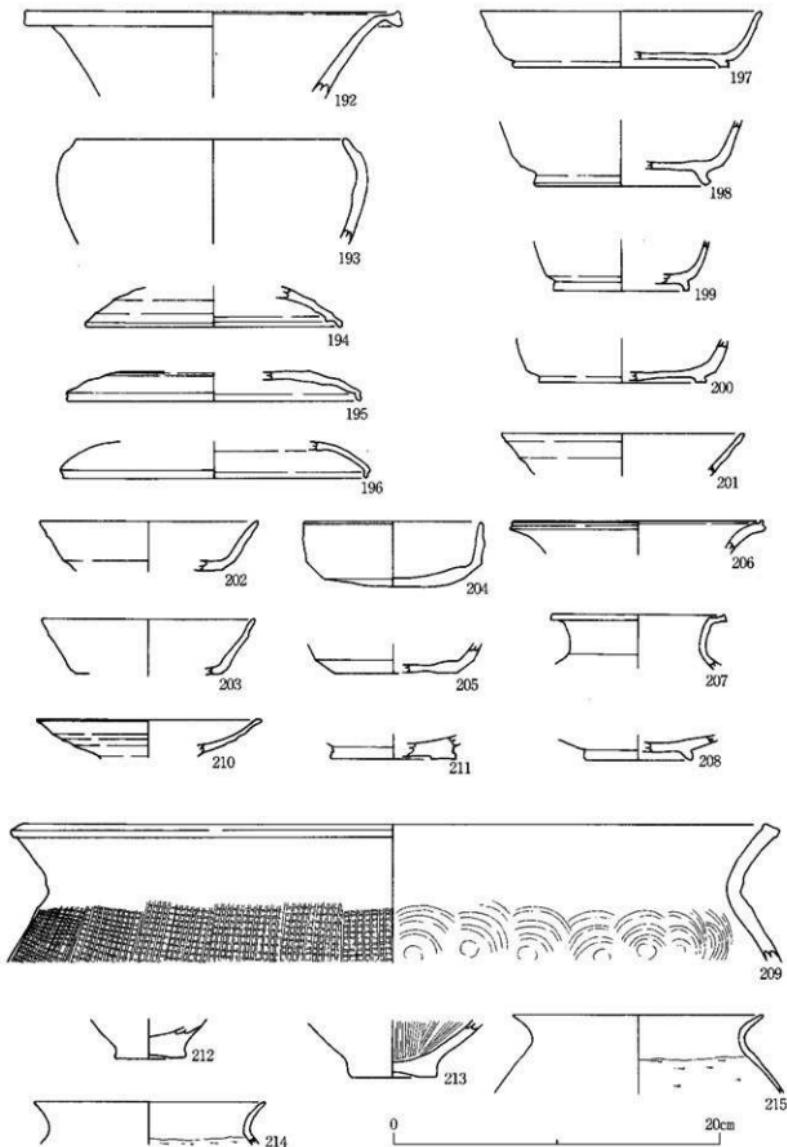
埴輪（第16図 246～257）

埴輪は形象埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪がある。

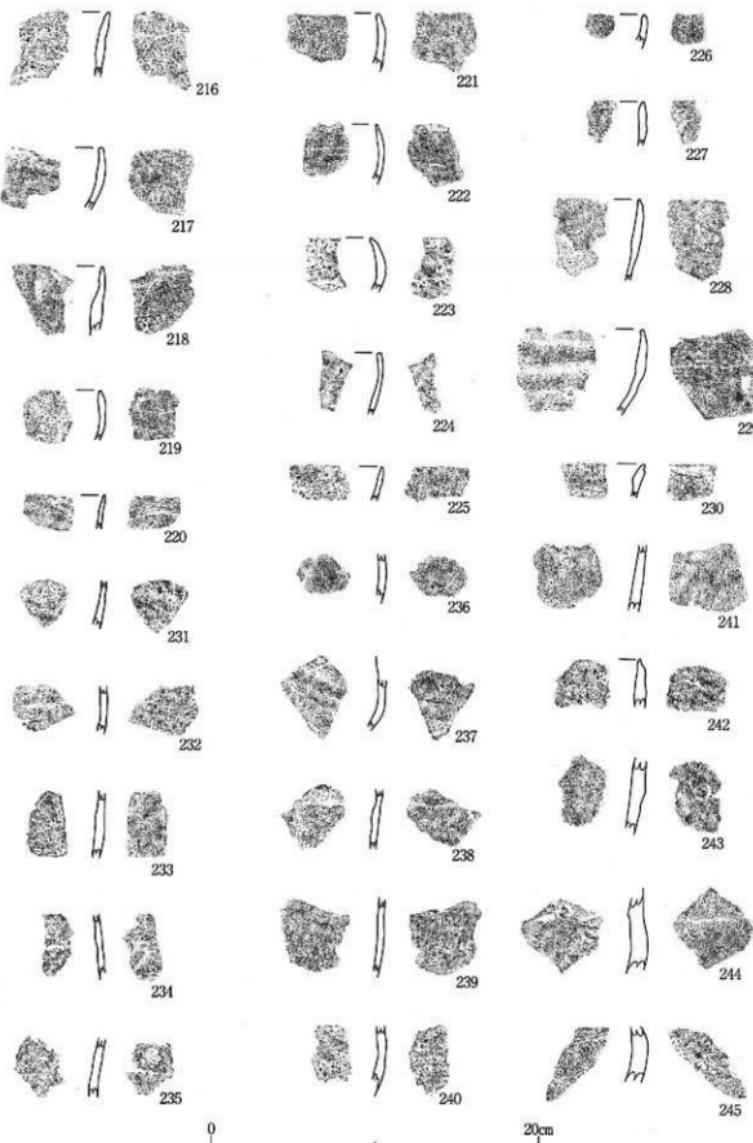
246・247は形象埴輪である。種類及び正位置は不明である。246は板状を呈する。表面は縦に2本の直線を引き、その間に斜線を加えた文様を施す。また、縱方向の剥離痕が残る。表面はナデ調整する。裏面はハケメの後、ナデ調整する。247は横断面形がゆるく湾曲する。表面は横方向の直線を1本引き、X状の線を加えた文様を施す。両面はナデ調整する。表面に赤色顔料が残る。S D 21の第①層より出土した。5世紀中～6世紀前半。

248は朝顔形埴輪である。肩部であり、内側へ強く湾曲する。上端は円筒部と朝顔部の境であり接合の剥離痕が残る。外面は横方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。第3層より出土した。5世紀中～6世紀前半。

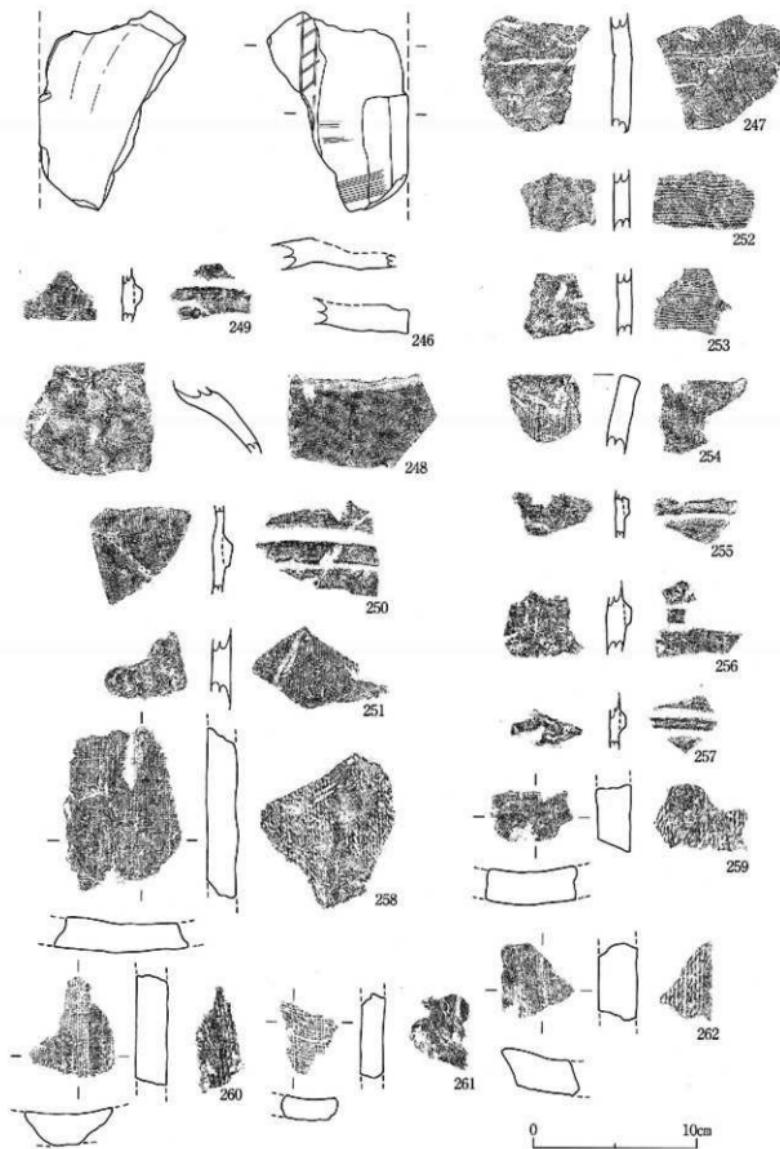
249～257は円筒埴輪である。254は口縁部、他は体部である。風化が著しく調整法が判るのは少ない。254は口縁端部が面を持つ。外面はナデ調整、内面は縦方向のハケメ調整する。250は内外面をハケメ調整する。251は外面を縦方向のハケメ調整、内面をナデ調整する。252・253は外面を横方向のハケメ調整、内面をナデ調整する。他は調整法が不明である。249・250・255～257は断面形が台形を呈する低いタガを貼り付ける。256はS D 19、257はS D 11、250・252・256・257はS D 21の第①層、253は第4層、他は第3層より出土した。5世紀中～6世紀前半。



第14図 第3・4層出土土器実測図



第15図 製塙土器実測図



第16図 塗輪・瓦実測図

瓦 (第16図 258~262)

258~262は平瓦である。凸面は縄目
のタタキを施す。凹面は布目痕が残る。
259は端面、262は側面をケズリ調整す
る。平坦な面を持つ。258はS E 1、
259・262はS D 21の第①層、260・261
は第3層より出土した。8世紀。

木製品 (第17図 263)

263は櫛である。片側の側縁と歯の
先端部を欠損する。長方形を呈し、細
い歯を挽き出した横櫛である。肩部は丸味を持つ。S E 1より出土した。10世紀。

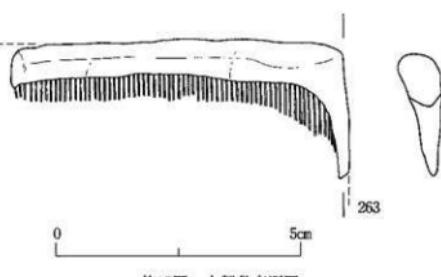
6)まとめ

今回の調査地は菩提寺遺跡の西端に近い箇所であったが、奈良~平安時代の遺構、遺物が濃密に検出された。ここでは第1次調査の成果と比較、対照することで、今回の調査成果をまとめておきたい。

遺構面Iでは、耕作に伴う多数の鋤溝を検出した。その中のS D 3から12世紀代の瓦器碗がみられることから、遺構面Iで検出した遺構は中世期以降に属すると考えられる。第1次調査でも奈良~平安時代の遺構面上面に鋤溝が見つかっている。中世期以降は第1次調査地と同様の土地利用がなされておりことがわかる。遺構面IIでは、土坑・井戸・ピット・溝を検出した。まず、遺構の所属時期をみると、出土遺物から概ね8世紀代のものと10世紀代に分かれる。前者を代表するのは調査地東端で検出した大溝S D 21である。S D 21の第①層出土土器には平城宮II(以下「平城II」と略記)の土器が定量される。体部内面に2帯の暗文が施される土器器杯(第8図38~42)などがそれで、第1次調査で平城IIがごく少数で平城IIIの土器が多数出土したとの対照的である。その他には平城IVの須恵器鉢(第10図102)がある。S D 21の開削が第1次調査のI期遺構に先行し、その埋没までが長期にわたっていたことが指摘できる。井戸S E 1など10世紀代に属する遺構が今回認められるのも特徴である。第1次調査では掘立柱建物2のものが10世紀代の遺構であった。各土坑の出土遺物では、SK 6、SK 9に黒色土器が含まれる(表2参照)。遺構面IIのピットを埋土の土壤と黒色土器の介在をもとに区分すると、SP 18・25~28の5基のみ8世紀代に所属する可能性があるが、それ以外は10世紀代のものである。

第3次調査の遺構面はTP 14.4m前後であり、第1次調査の奈良~平安時代の遺構面TP 20.5mと比較すると、東西90mの距離で約6m低くなっている。第1次調査検出の掘立柱建物6棟はその南北軸が全て東北を向き、転用視の出土もあわせ、地方末端行政機構としての「郷衙」の可能性が指摘された。第3次調査の遺構面IIの遺構は、郷衙の縁辺に所在する一般集落の様相の一端を示すことが考えられよう。

(注) 平城宮出土土器の型式編年は、古代の土器研究会編1992『古代の土器 I 都城の土器集成』を参照した。
第1次調査の成果は東大阪市教育委員会2003『菩提寺遺跡第1次調査発掘調査概要報告』に掲載した。



第17図 木製品実測図

1 西区 遺構面Ⅰ 遺構完掘状況
(東より)

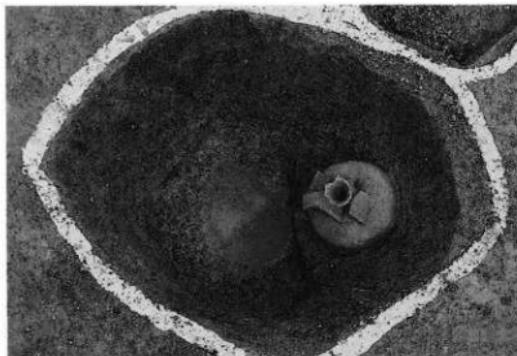


2 西区 遺構面Ⅱ 遺構検出状況
(南東より)



3 西区 遺構面Ⅱ 遗構完掘状況
(北東より)

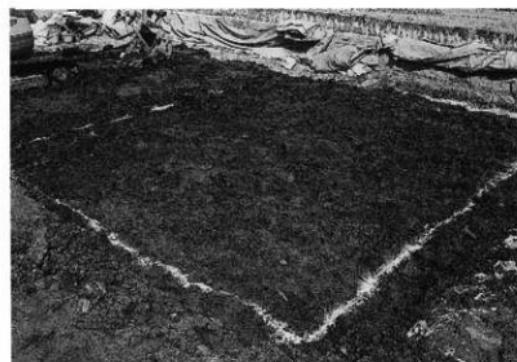




1. 西区 遺構面II SK7高杯出土状況（東より）



2. 西区 北壁断面（南西より）



3. 東区 調査前状況（南東より）

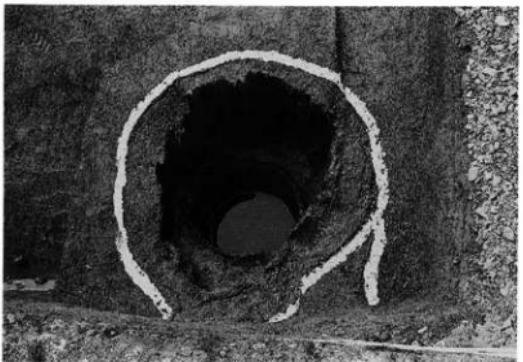
1. 東区 遺構面 I 遺構完掘状況
(南より)



2. 東区 遺構面 II 遺構完掘状況
(南より)



3. 東区 遺構面 II SE 1 完掘状況
(東より)

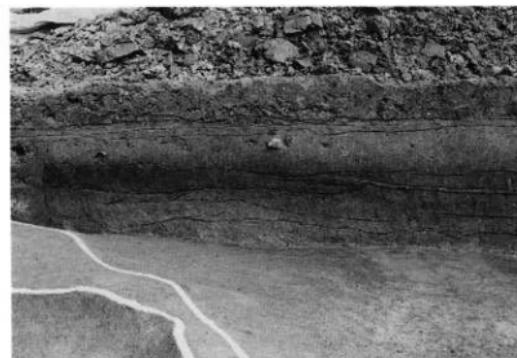


図版 4 善根寺遺跡第3次調査

遺構



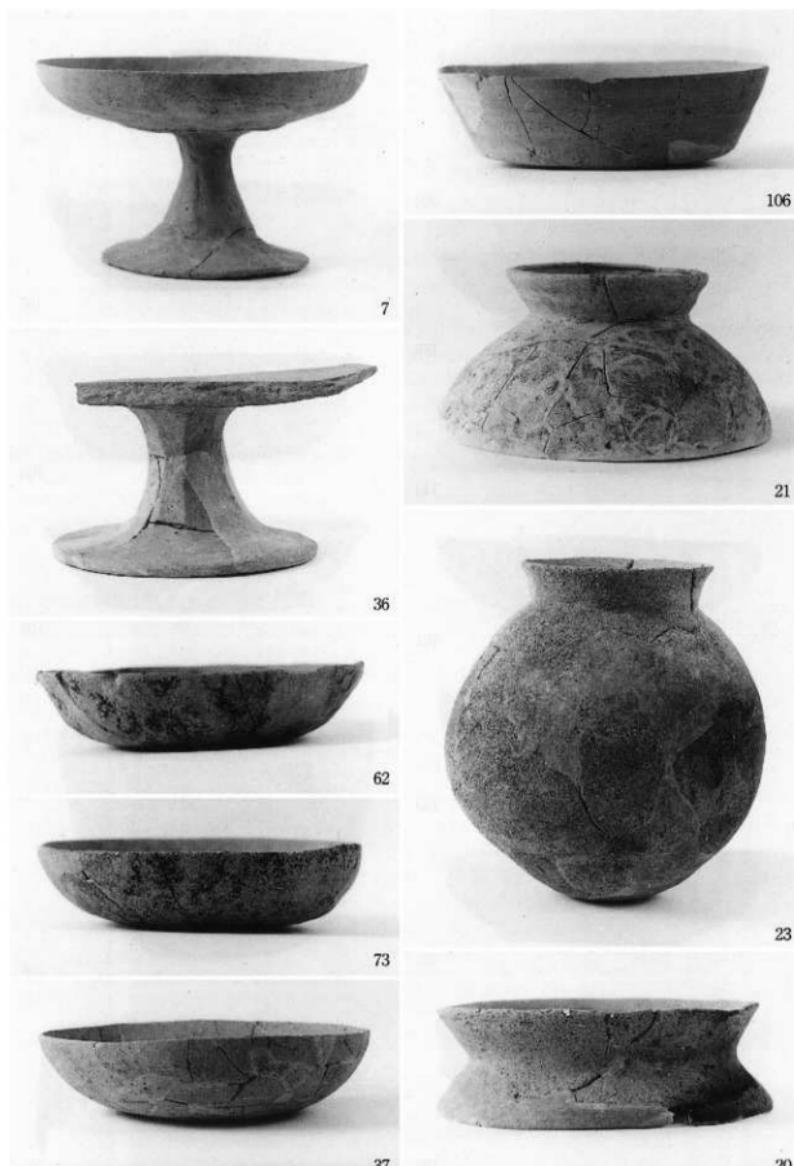
1. 東区 遺構面Ⅱ S E 1下部
井筒検出状況（東より）



2. 東区 遺構面Ⅱ S D 21東壁断
面（西より）



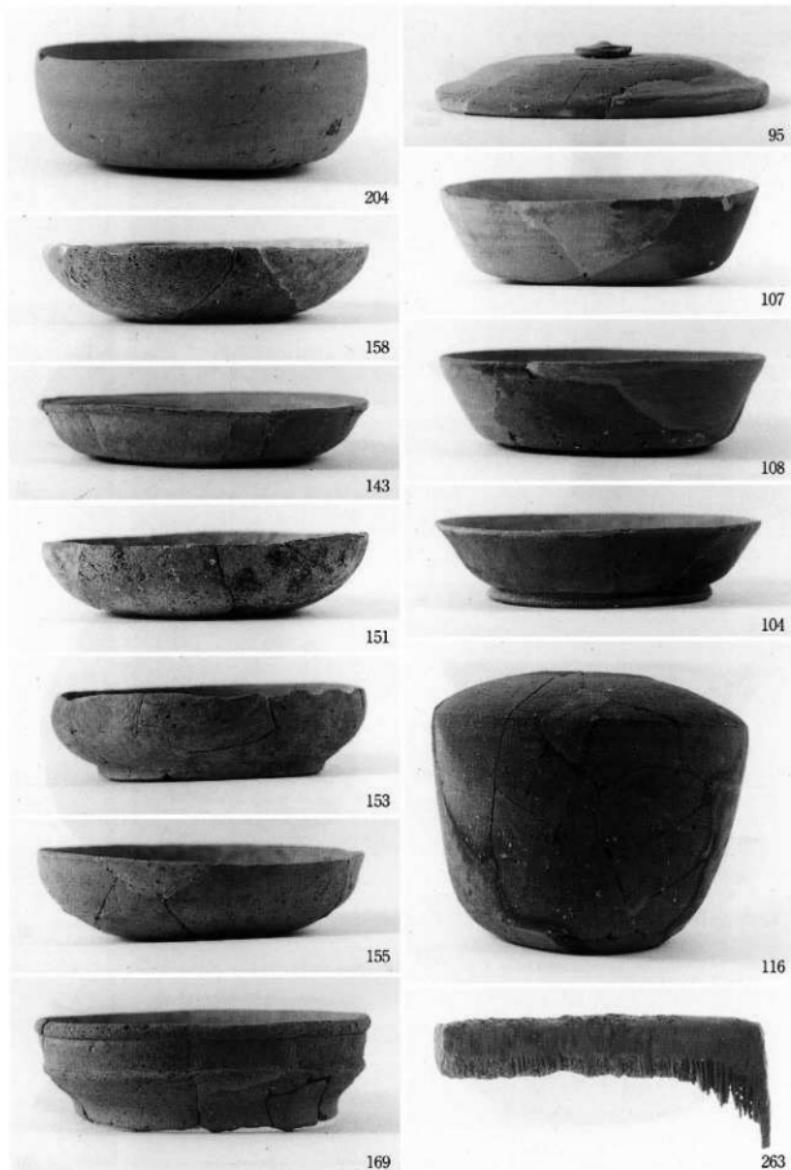
3. 東区 北壁断面（南より）



S D21第①層・SK 7 出土布留式土器甕 土師器高杯・鉢・椀・杯 須恵器杯

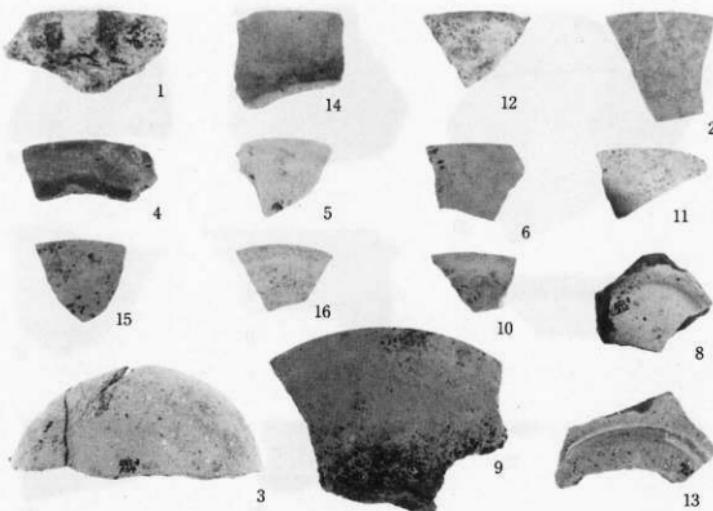
図版 6

善根寺遺跡第3次調査
遺物

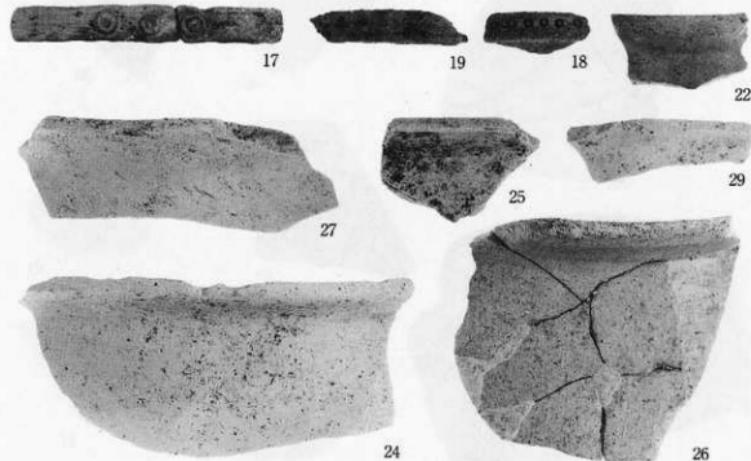


S D21第①層・SE1・第3層出土布留式土器壺 土器器杯・椀 須恵器蓋・杯・壺 木製品櫛

圖版 7 善根寺遺跡第3次調査
遺物



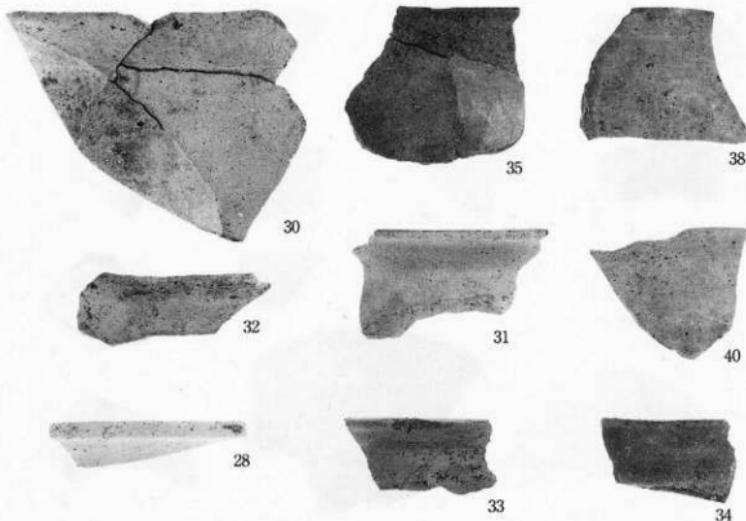
1. SD 3・4・10・11・19、SK 9、SP 10・13・21・22出土土師器壺・椀・羽釜・皿 黒色土器焼



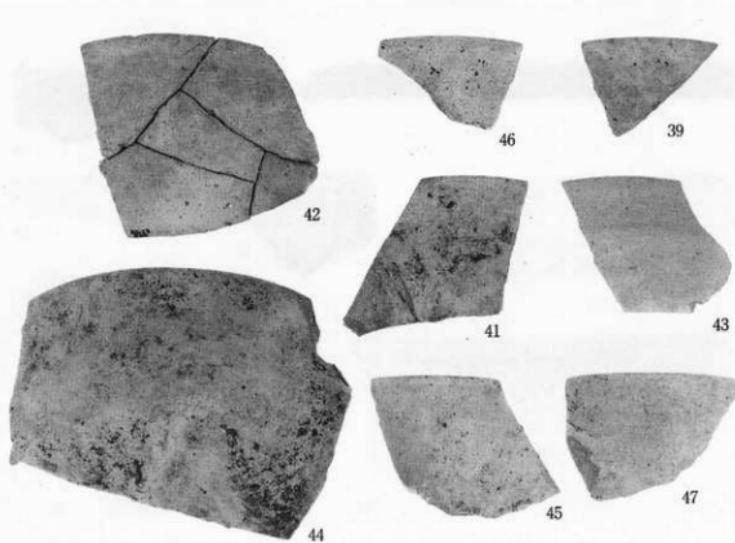
2. SD 21第①層出土弥生土器壺 布留式土器壺 土師器鍋・壺

圖版 8

善根寺遺跡第3次調査
遺物

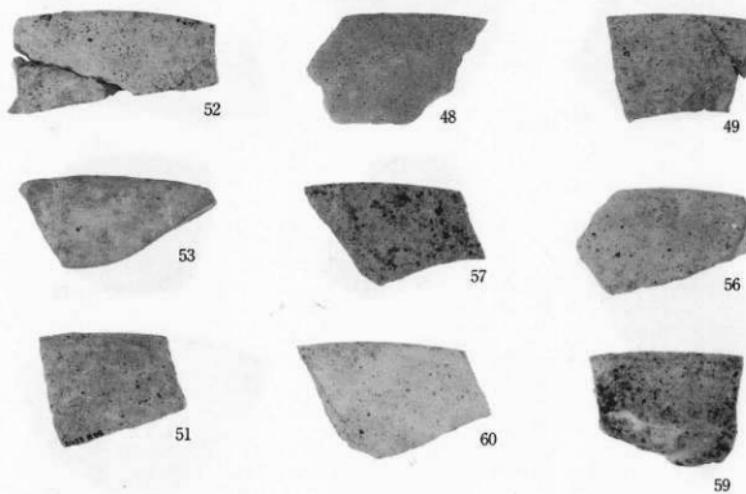


1. S D21第①層出土土師器甕・杯

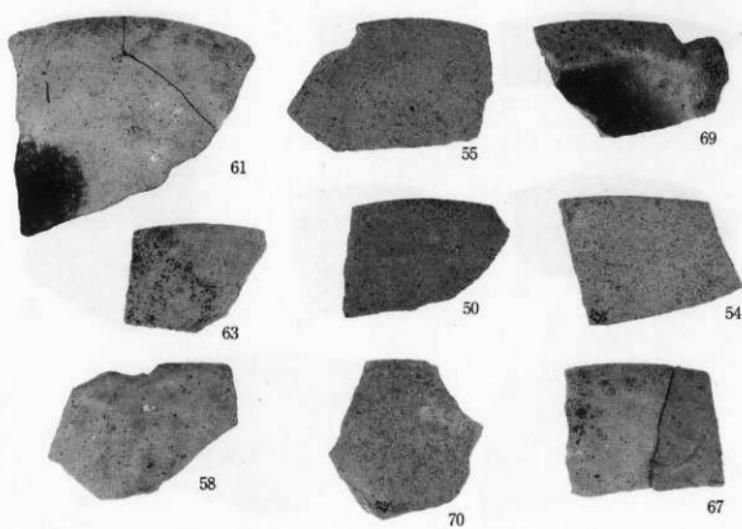


2. S D21第①層出土土師器甕・杯

図版9 善根寺遺跡第3次調査 遺物



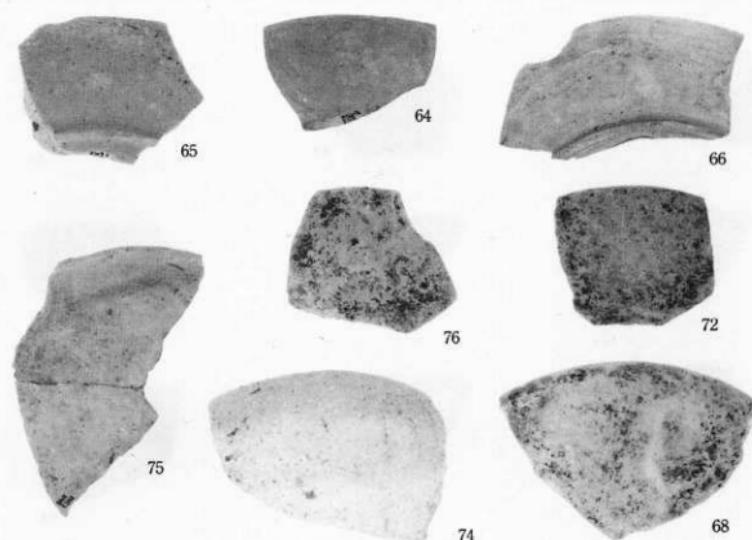
1. S D21第①層出土土器片



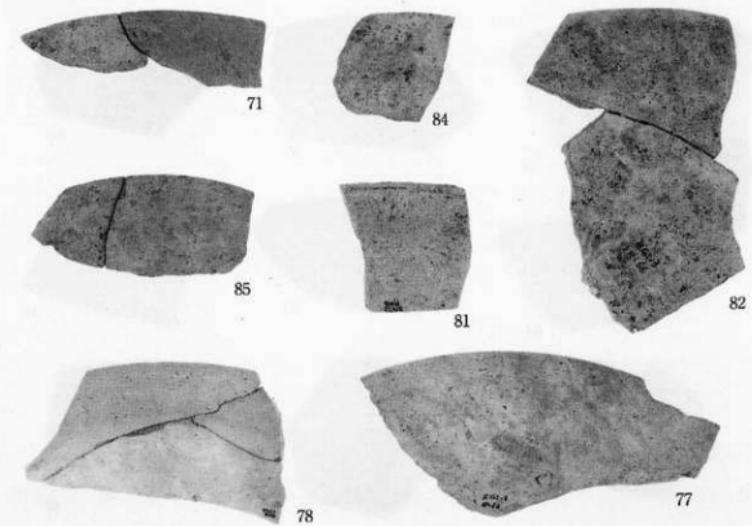
2. S D21第①層出土土器片

図版 10

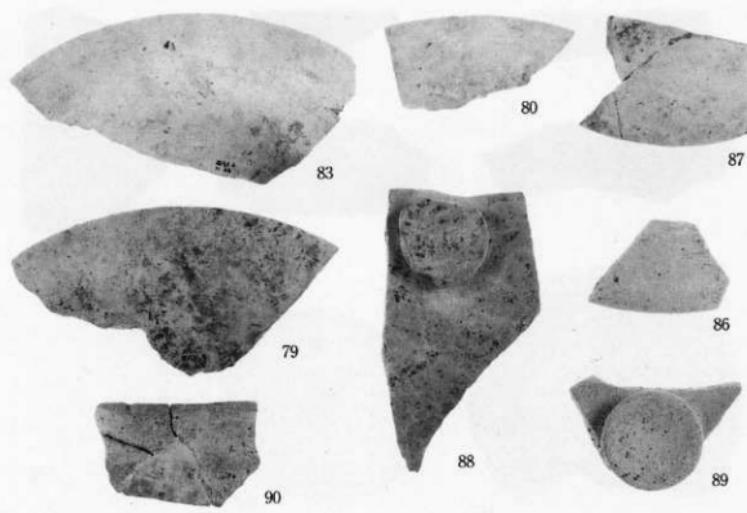
善根寺遺跡第3次調査
遺物



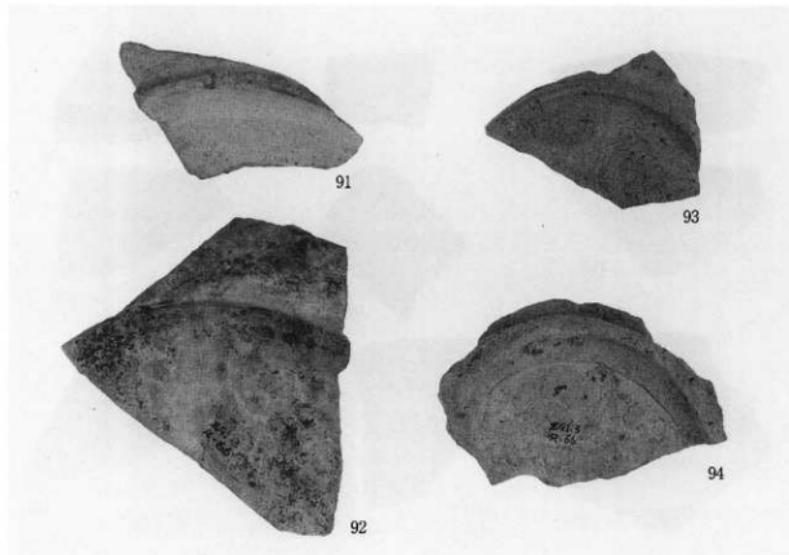
1. S D21第①層出土土師器杯・碗



2. S D21第①層出土土師器碗・皿



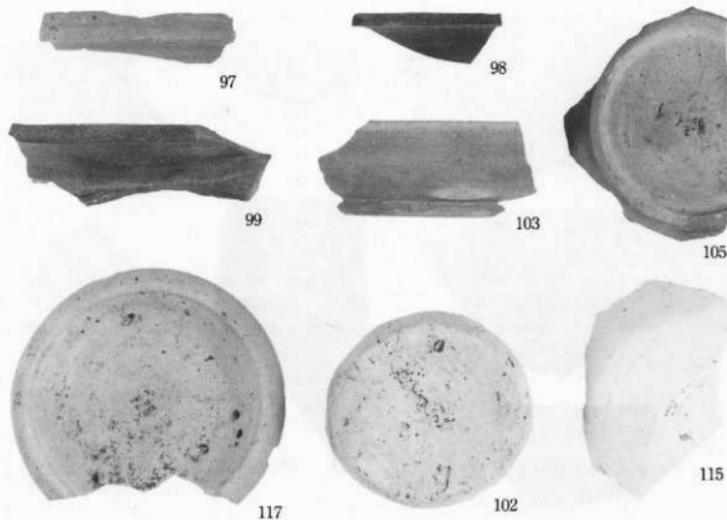
1. S D21第①層出土土師器皿・蓋・壺



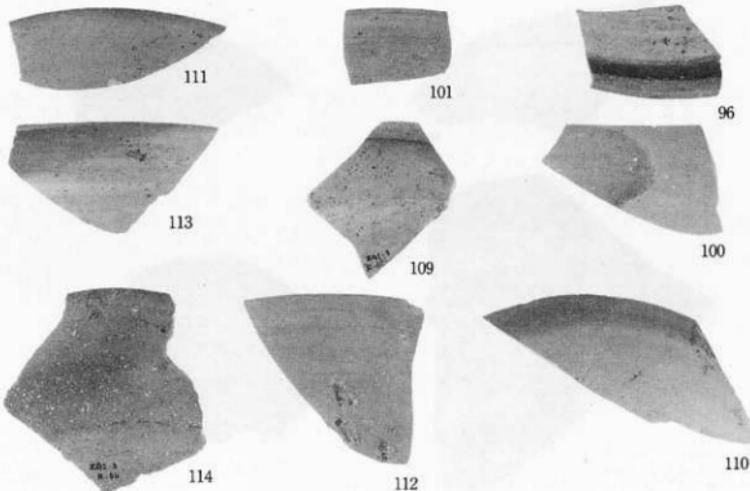
2. S D21第①層出土土師器底部

圖版 12

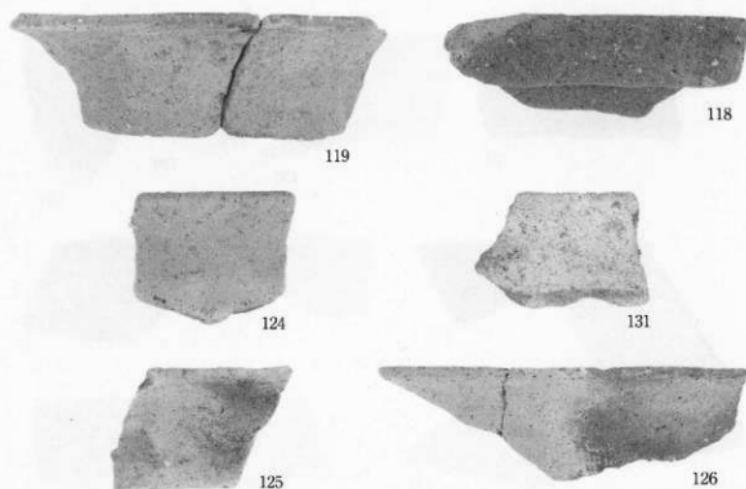
善根寺遺跡第3次調査
遺物



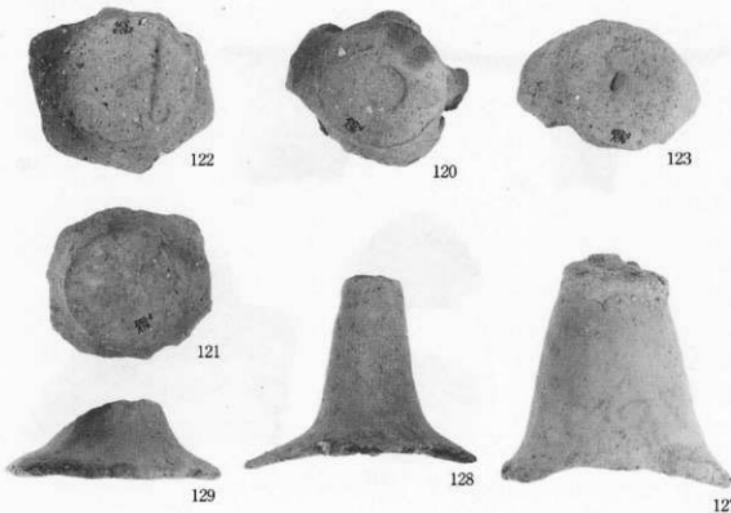
1. S D21第①層出土須恵器壺・蓋・鉢・杯



2. S D21第①層出土須恵器蓋・杯・鉢



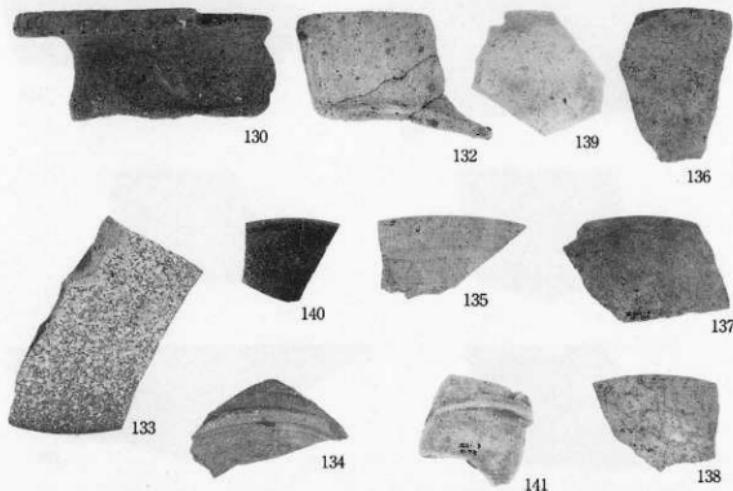
1. S E 1、S D21第⑤層出土弥生土器壺 布留式土器壺・壺・高杯



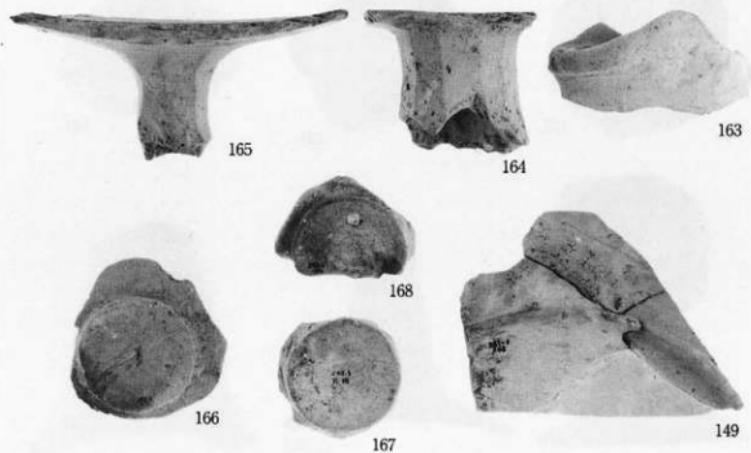
2. S D21第⑤層出土弥生土器底部 布留式土器高杯

圖版
14

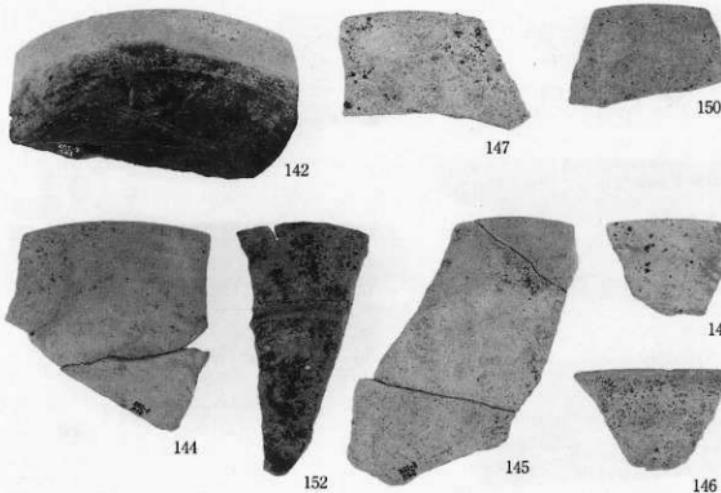
善根寺遺跡第3次調査
遺物



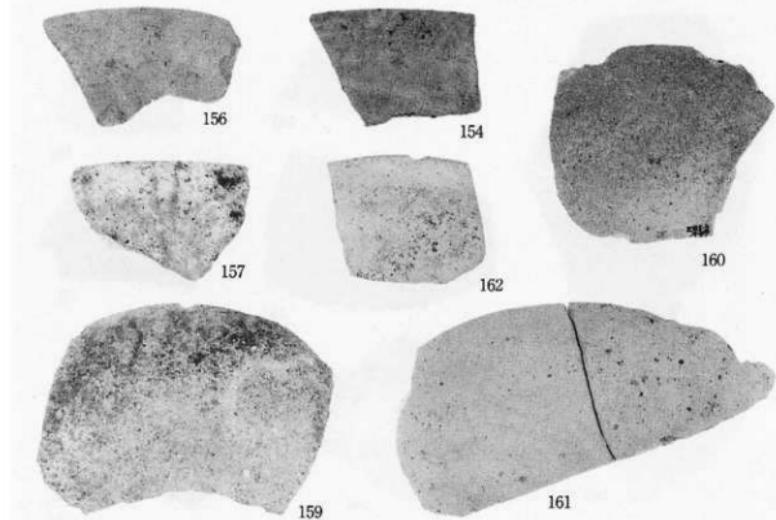
1. SE 1 出土弥生土器壺 布留式土器壺 須恵器杯・蓋 土師器杯・碗・皿 緑釉陶器皿 黒色土器輪



2. 第3層出土弥生土器底部 土師器高杯・杯・把手



1. 第3層出土土器片

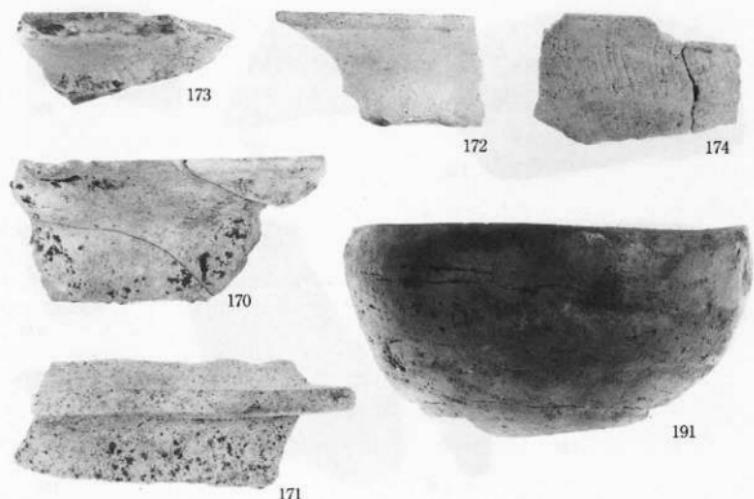


2. 第3層出土土器片

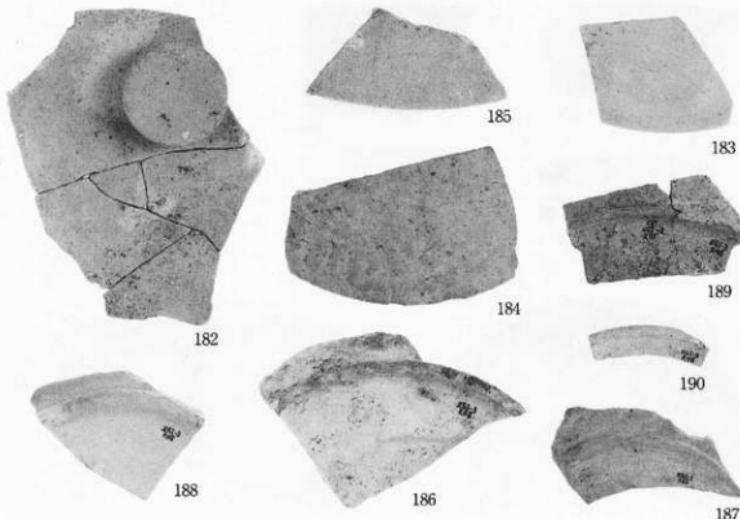
圖版 16

善根寺遺跡第3次調査

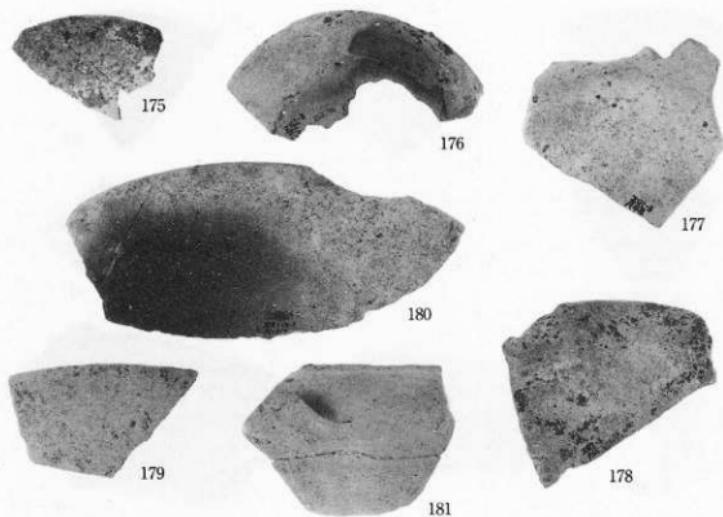
遺物



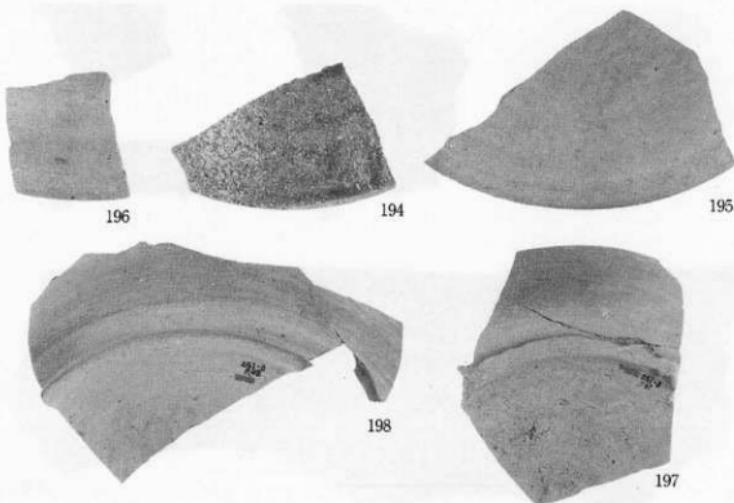
1. 第3層出土土器鍋・釜・甕 黒色土器鉢



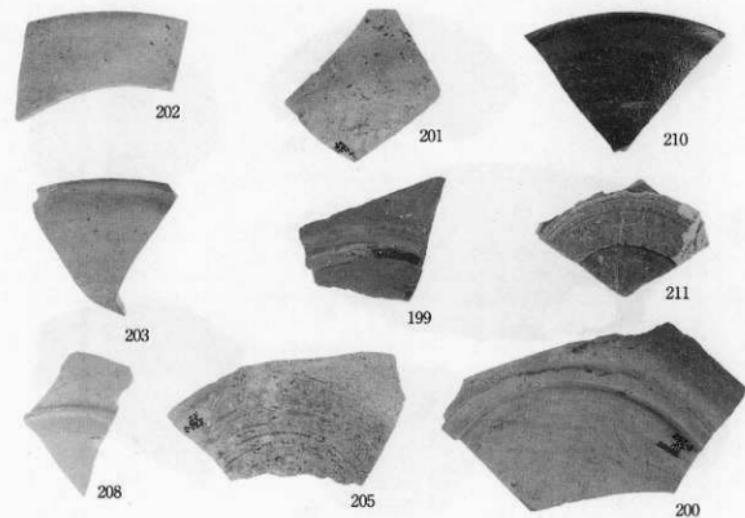
2. 第3層出土土器蓋・底部



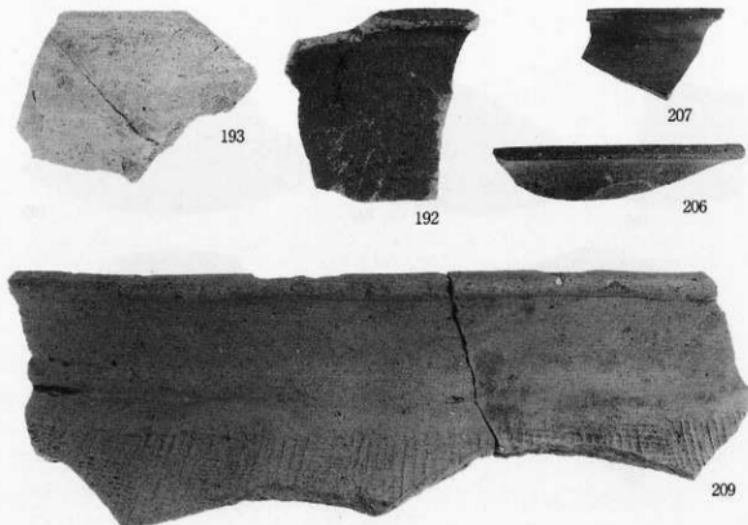
1. 第3層出土土師器皿・蓋



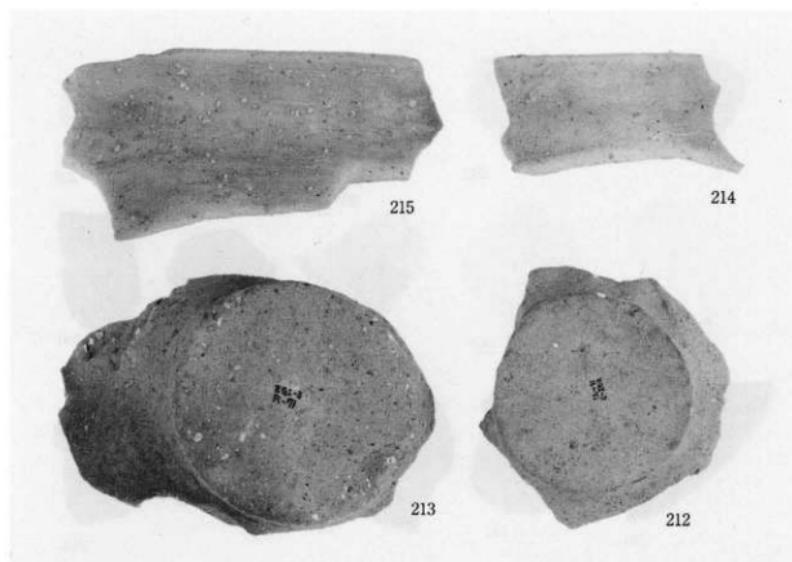
2. 第3層出土須恵器蓋・杯



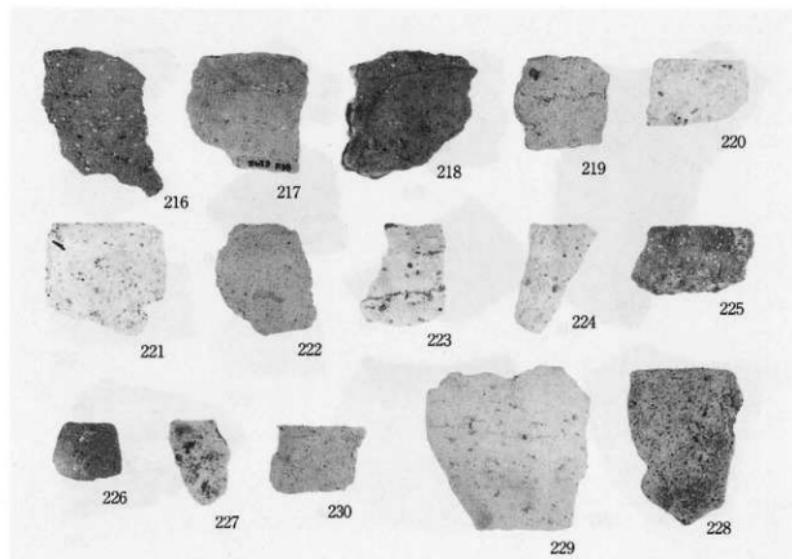
1. 第3層出土須恵器杯・椀 緑釉陶器皿・椀



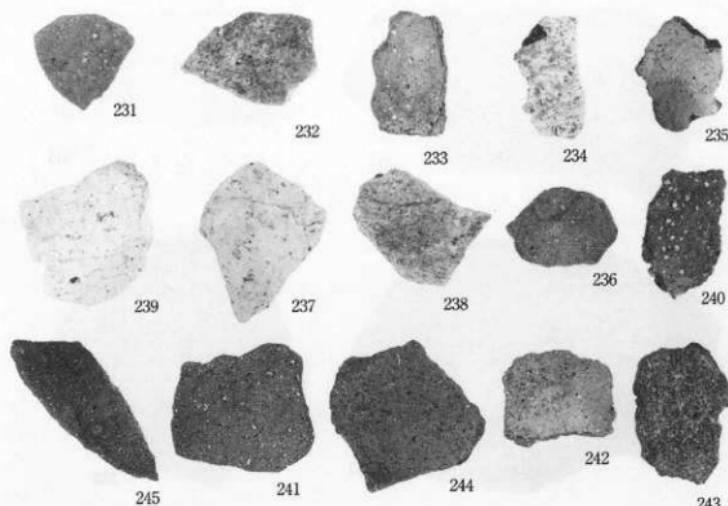
2. 第3層出土須恵器鉢・壺・甕



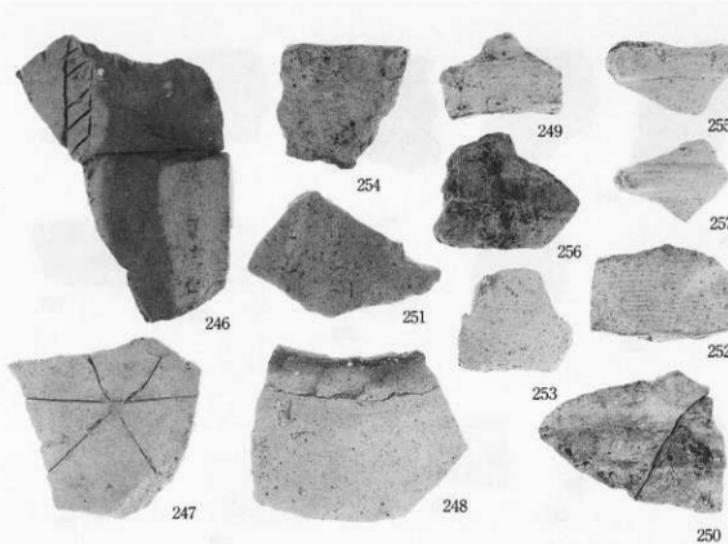
1. 第4層出土弥生土器底部 布留式土器壺



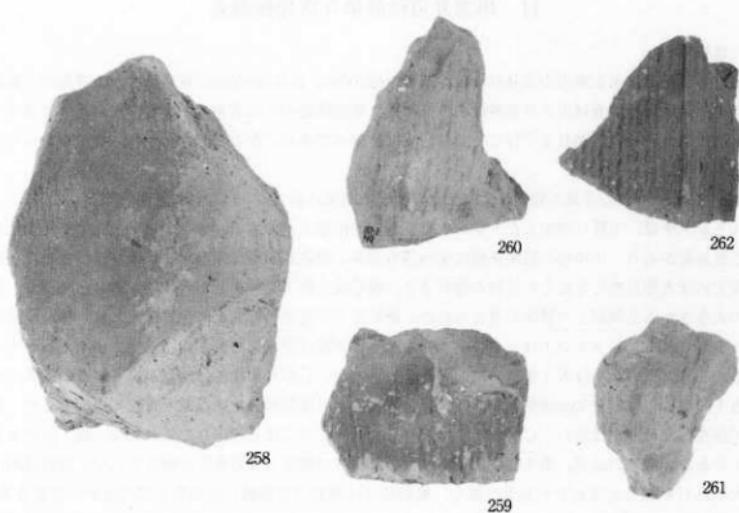
2. 製塙土器



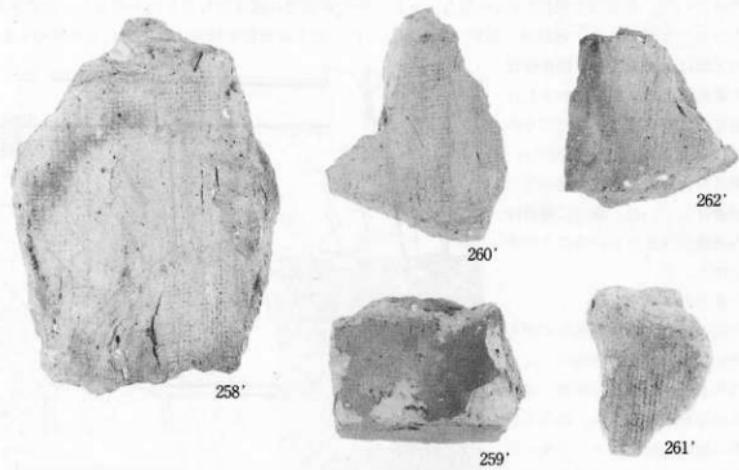
1. 製塙土器



2. 塚輪



1. 平瓦（凸面）



2. 同上（凹面）

付 出雲井遺跡群第5次発掘調査

1)はじめに

出雲井遺跡群は東大阪市出雲井町を中心に東西約700m、南北約450mの範囲に広がる群集墳・集落跡である。今回の調査は出雲井遺跡群の性格把握、範囲確認のため実施したもので、現地調査は平成2年2月1日より2月26日まで行なった。面積は約64m²である。なお、図化しうる遺物はなかった。

2)調査概要

調査は出雲井町462番地の周辺、式内社枚岡神社の南側にあたる3段の傾斜地を対象とした。

Aトレーニチは、上段に設定したトレーニチで長さ13.5m幅1mである。調査の結果、北半に地山土を含む整地面があり、中央部の石組南側は60cm落ち込み、黒色砂礫層が傾斜する状況が確認された。整地面上には大型自然石を配した建物の礎石2と、礎石抜き跡1を検出した。柱間は約2mを測り、礎石の大きさから2間以上の建物が考えられた。礎石近くで近世の軒丸瓦が少量出土した。神社関連建物と推定される。BトレーニチはAトレーニチの西20mの下段に設定した長さ15.2m幅1mのトレーニチである。トレーニチの大半は表土層下で地山層となっていた。しかし南端部は地形が高く、この箇所では黒色土の遺物包含層が30cm堆積しており、鎌倉時代後半の瓦器碗・土師器皿・青磁等が出土した。遺構が存在した可能性は高い。Cトレーニチは、Bトレーニチの北に接し設定した長さ16.5m幅1mのトレーニチである。調査の結果、南半部に10~30cm大の自然石で構成される集石が検出された。集石は約1m大の巨石を混じてトレーニチ北半へ続く。集石間に多数の瓦器碗、土師器小皿のほか、瓦質火舟、土師器土釜、青磁碗を含んでいた。遺物は13世紀中ごろから後半に属する。北半では整地層と地山層が続く。大振りな礎石状の石が含まれることから、周辺には建物跡が遺存していることも考えられる。Cトレーニチの西25mの最下段に東西16.8m幅1mのDトレーニチを設定した。トレーニチの中央東寄りで江戸時代の小規模な建物基壇を検出した。基壇の上部は削平されていた。基壇面は焼け、建物は火災を受けていた。基壇は東西約3.6mを測る。トレーニチの東端部は礎を含む落ち込みがあり、中世末期ごろのものと見られる土師器皿・香炉、瓦が出土した。西半は基壇破壊時に地山土により埋められ、その下部は遺物を含む黒褐色砂質土と黄色混土によって埋められた整地層が2層存在し、さらにその下部には瓦器碗片、土師器皿片、鉄製品を含む鎌倉時代の遺物包含層が遺存していた。周辺に鎌倉時代の遺構が存在していることが考えられる。

3)まとめ

今回の調査では枚岡神社の歴史を密接に裏付ける鎌倉時代~江戸時代の遺物包含層及び基壇、建物跡等の存在が確認され、出雲井遺跡群の範囲確認に加え、今後の遺跡の保存対策を講じる上で、多くの成果を得ることができた。

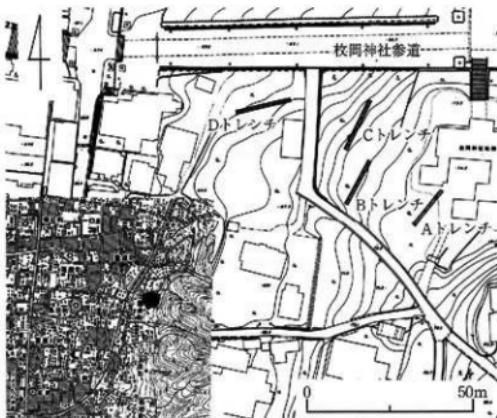


図 出雲井遺跡群の位置と第5次調査トレーニチ図

報告書抄録（その1）

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう -へいせい19ねんど-
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報 -平成19年度-
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太・若松博恵・才原金弘・松田直子・成瀬光一・村上昇・原田修
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北50番地の4
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
西ノ辻遺跡	東大阪市南莊町 1768-24、25番地	27227	45	平成18年12月13日～ 12月18日	106m ²	個人住宅
法通寺跡	東大阪市中石切町1 丁目671-2番地の一部	27227	37	平成19年1月25日～ 1月29日	25.24m ²	個人住宅
	東大阪市中石切町1 丁目671-4、5番地	27227	37	平成19年7月17日～ 7月23日	55m ²	個人住宅
五里山古墳群	東大阪市上四条町 1170-3番地の一部、 上六万寺町1744-2番 地の一部	27227	76	平成19年1月30日～ 2月7日	約20m ²	個人による区画整 理事業
	東大阪市上四条町 1170-1番地ほか1筆、 上六万寺町1744-2番 地ほか30筆計33筆	27227	76	平成19年3月19日～ 3月27日	約87m ²	
	東大阪市上四条町 1170-1-2ほか2筆 上六万寺町1744-2ほか31筆、里道、水路	27227	76	平成19年7月31日～ 8月3日	約78m ²	
山畠古墳群	東大阪市瓢箪山町 58-6番地	27227	66	平成19年2月5日～ 2月8日	41m ²	個人住宅
縄手遺跡	東大阪市南四条町 780-2番地の一部	27227	72	平成18年12月12日 平成19年2月28日	8.1m ²	分譲住宅
皿池遺跡	東大阪市河内町458-3 番地	27227	62	平成19年4月16日	1.5m ²	分譲住宅
善根寺遺跡	東大阪市善根寺町1 丁目644-645番地	27227	131	平成19年3月5日～ 3月22日	68.65m ²	個人住宅
出雲井遺跡群	東大阪市出雲井町 462番地	27227	56	平成2年2月1日～ 2月26日	約64m ²	範囲確認

報告書抄録（その2）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
西ノ辻遺跡 (第48次調査)	集落跡・ その他の墓	古墳時代	掘立柱建物・ 溝・土坑	土師器・ 須恵器	
法通寺跡 (第5次調査)	社寺跡	平安時代～ 室町時代	溝・土坑・ ピット	土師器・須恵器・ 瓦器・鉄釘	
法通寺跡 (第6次調査)	社寺跡	平安時代～ 室町時代	溝・土坑・ ピット	土師器・須恵器・ 瓦	
五里山古墳群 (第2次調査)	古墳	古墳時代	古墳	須恵器・土師器・ 鉄釘	
五里山古墳群 (第3次調査)	古墳	古墳時代～ 平安時代	古墳	須恵器・土師器	
五里山古墳群 (第4次調査)	古墳	弥生時代～ 鎌倉時代	古墳	須恵器・土師器・ 鉄釘・貿易磁器・ 石器原材	
山畑古墳群 (第30次調査)	古墳	平安時代～ 室町時代	溝・土坑・ ピット	土師器・須恵器・ 埴輪・黒色土器・ 瓦器	
縄手遺跡 (第20次調査)	集落跡	縄文時代～ 古墳時代	(遺物包含層)	縄文土器・ 弥生土器・ 形象埴輪	
皿池遺跡 (第9次調査)	集落跡・ 官衙跡	古墳時代～ 奈良時代	(遺物包含層)	土師器・ 須恵器	
善根寺遺跡 (第3次調査)	集落跡	奈良時代～ 鎌倉時代	溝・ピット・ 土坑・井戸	弥生土器・ 土師器・須恵器・ 瓦器・瓦・ 製塙土器・埴輪・ 木製品	
出雲井遺跡群 (第5次調査)	集落跡・古墳	鎌倉時代～ 江戸時代	基壇・礎石・集石・ 落ち込み	瓦器・瓦質土器・ 土師器・青磁・瓦	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

-平成19年度-

発行日 平成20年3月31日
 編集・発行 東大阪市教育委員会
 〒577-8521
 東大阪市荒本北50番地の4
 TEL.06-4309-3283
 印刷所 鮎近畿印刷センター

